

建国期のイスラエル内閣閣議議事録 史料紹介と予備的考察（五）〈後篇〉

——『暫定政府会合議事録』第3巻後半～第4巻初
（1948年6月20日～6月27日）に見る
ベルナドット和平提案前夜の内政・外交と
アルタレナ号事件をめぐる論議——

森 まり子

目 次

（本論考は単一のものであるが紙幅の関係で前篇と後篇に分かれる。本稿は後篇であるが、ここでは前篇も含めた本論考全体の目次を示す。「以下は後篇掲載分」という記載から下が後篇の目次となっている。前篇は『東洋文化研究所紀要』第174冊に掲載されている。なお本論考は、平成30年度跡見学園留学助成費による研究成果の一部である）

はじめに——ベルナドット和平提案前夜のイスラエルの内政と外交——

1. 史料の性格と背景

- （1）本議事録の位置づけ
- （2）本議事録の軍事的・政治的背景

——第一次停戦（1948年6月11日～7月8日）——

① 軍事的背景

- （i）停戦合意をめぐって（〈補論一〉A）

(ii) エルサレムとラトルン等をめぐる状況（＜補論三＞）

② 政治的背景

(i) ベルナドットと双方との会談（＜補論一＞B）

（ア） 1948年5月末から第一次停戦開始（6月11日）まで

（イ） 第一次停戦開始からベルナドット提案の起草開始まで

(ii) ベルナドット提案の基本方針の形成（＜補論一＞C）

(iii) 「将校の反乱」（＜補論二＞）

(iv) 本議事録における暫定政府の閣僚構成

2. 史料紹介——『暫定政府会合議事録』第3巻後半～第4巻初の概要——

(1) 1948年6月20日

- ① 軍と労働の為の更なる動員 ② 質疑 ③ 概観
- ④ 国家評議会のセッション ⑤ 灯火管制の諸措置
- ⑥ エツェルによる武器の持ち込み

(2) 1948年6月22日（臨時会合）〔以下は後篇掲載分〕

(3) 1948年6月23日（臨時会合）

- ① 国家評議会のセッションの運営手順
- ② エツェルとの事件の事後の状況

(4) 1948年6月27日

- ① 質疑応答 ② 概観 ③ イスラエル国家の政治の問題
- ④ 軍事的状況の総括 ⑤ イスラエル国家における通貨
- ⑥ アリヤーの諸問題 ⑦ シンボル委員会 ⑧ 国家評議会の議題

3. 予備的考察——本議事録に見る優先的審議事項とアラブ問題——

(1) 軍と農村への即時追加動員

(2) ベルナドット和平提案前夜の外交

- ① シェルトクの「異論」をめぐる波紋
 - ② 6月17日のシェルトク＝ベルナドット会談の報告
 - (i) 問題全体への見解（総論）
 - (ii) アリヤー、アラブ帰還、アラブ財産（各論）
 - ③ ネゲヴにおけるエジプトの停戦違反
 - ④ その他のロードス島関連事項
- (3) アルタレナ号事件関連
- ① アルタレナ号事件直前の右派軍事組織の動向
 - ② アルタレナ号事件発生の経緯
 - ③ アルタレナ号事件への対処をめぐる
 - (i) 6月20日閣議における論議
 - (ii) 6月22日臨時閣議における論議
 - (iii) 6月23日臨時閣議における論議
 - ④ アルタレナ号事件の国際的波紋
- (4) エルサレムとその近郊をめぐる情勢
- ① <征服とユダヤ化の記憶>ベングリオン
 - ② <困難と犠牲の記憶 その一>グリェンバウムの報告
 - ③ <困難と犠牲の記憶 その二>ベングリオンの報告
 - ④ 軍の規律・その他
- (5) 経済とアリヤー
- ① 経済危機と新通貨発行
 - ② アリヤーの諸問題と「ユダヤ船団」

終わりに——ベルナドット和平提案拒否の背景——

後篇に寄せる序文

後篇では、まず前篇の史料紹介の続き（6月22日閣議から）を掲載した後、予備的考察と結論を掲載する。「終わりに」では、本論考「はじめに」（前篇に掲載）で提起した論点を含めて考察する。凡例的な事項や閣僚構成など本論考に関する基礎的情報については、前篇の本文及び註を参照して頂きたい。

2. 史料紹介

——『暫定政府会合議事録』第3巻後半～第4巻初の概要——

(1) 1948年6月20日 [前篇に掲載]

(2) 1948年6月22日 暫定政府の臨時会合（欠席：レヴィン [エルサレム]、レメズ [海外]）

議題：アルタレナ号の来航

ベングリオン 夜の2時に、その船 [アルタレナ号] がテルアヴィヴに着いて [コルヴェット艦] 「ガト・リモン」 [「手榴弾の要塞」の意] と対峙しているという知らせが私のもとに入った。我々の二隻の船もそこに到着した。威嚇の後その船は降伏すると知らせてきたが、然る後カエサリアに向けて航行せよという命令が与えられた。朝、[アルタレナ号は] そこにとどまっており、「ケター・ダン」ホテルに面する状態で停泊していると私は知らされた。・・・その船 [アルタレナ号] を指揮しているのは——A. スタヴスキー¹、ベギン、メリドールだ [3: 153]。[一段落省略 3: 153]

今しがた私は、その船を屈服させる事ができる為に要する全兵力を集結させよという指示を与えたが、[軍は] この件について会合している政府からの、行動せよという指示を待つだろう [3: 153]。

シェルトク その船の積み荷がどうなったか知っているか？ [3: 154]

ベングリオン 一部はクファル・ヴィトキンで船から降ろされ、我々の手中に

ある [3 : 154]。

シェルトク つまり、船から降ろされた物が我々の手中にあるという事か？
[3 : 154]

ベングリオン 船から降ろされたのは僅かな部分にすぎない。積み荷の大半はまだ船内にある [3 : 154]。

ベントヴ 一昨日以来の事柄の顛末について、首相が我々に概要を報告して頂けないだろうか [3 : 154]。

ベングリオン [既に] 命令は出ており、明確な指示も出されていたので、その後は私にはすべき事がなかった。[ヤディン] 作戦部長自身がそこへ赴き、行動を指揮した。そして昨日の夕方前まで私は、どの様に事態が展開しているのか明確には知らなかった。昨日の夕方前に作戦部から私に次の様に報告してきた。グリュンバウム氏が将校の一人に自分の所へ来てくれと頼んでいるという。[作戦部は] 彼に、自分達は命令を受けねばならないと回答した。それで私はその事が何なのかを知る為にグリュンバウムの所へ人をやった。彼はツヴィ・マイモン [ベングリオンの秘書] に書き付けを手渡したが、そこには、自分はアブラハムという解決に積極的なエツェルの連中の一人と会ったが、この者の話によればガリリがここ [閣議] に報告した事柄は正確ではなかったものであり、交渉に入らねばならないと自分は思う、と書かれていた。私は彼 [グリュンバウム] に次の様に書いた書き付けを渡した。エツェルと交渉に入る事はできない。(A) 政府の決定があり、その決定は交渉ではなかった。(B) そうこうしている間に国連の人々がこの事件に関わり、政府に要請したので政府は彼らにこの様な船があると知らせた ([政府は] 彼らに移民については知らせなかった、なぜなら移民は全員、我々の人々の助けで降ろされたからだ) [3 : 154]。

グリュンバウム氏がそれについて私に報告したエツェルの提案とは何だったか？ (グリュンバウム エツェルの提案ではなく私が提案したのだ。) その提

案とは、この武器がエツェルと我々の共同の監視下に倉庫に移され、その武器はエツェルの諸部隊の装備に充てられるというものだった。私はそれは交渉だ、・・・エツェルの連中も既に敵対行為を始めている、と言った。・・・我々は、南部の地域にいるエツェルの諸部隊の多くの兵士たちがその武器を持ってネタニヤに逃走し始めたという情報を受け取ってもいた。(ツィスリング 南部にいる彼らの部隊が持ち場を去ったというのは正しい「情報」か?)——そうだ、彼らはラムレ近くの持ち場を去り、クファル・ヴィトキンへ彼らを運ぶ為の車両を掌握し、道を封鎖した。私の人々は私をテルアヴィヴに帰らせなかった。その後ラビ・フィシュマンが来て、自分はグリュンバウム及びシャピラと話し彼らは仲介と政府会合を提案している、と言った(それは昨夜11時の事だった) [3: 154~155]。

シャピラ 彼ら「エツェル」の代表と我々の代表の間で行われた交渉について詳細を我々に報告するようお願いする [3: 155]。

ベングリオン その事は前の会合で報告された。まず「エツェルは」彼ら「国防軍」が武器を「船から」降ろすのを手伝う事を提案してきた。「国防軍側は」彼らに、その武器は政府に引き渡されねばならないと言った。署名された合意²に於てベギンは国外からの武器購入の為の全ての分派的行動をやめて彼のコネクションを明け渡さねばならないとされていた。彼はその様な指示を与えたと知らせてきた。一週間が経過し、この様な指示は与えられなかったという情報が海外から届いた。再びガリリがベギンのもとを訪れ、ベギンは彼らとの通信に何らかの障害が起きたと言った。故にその指示は与えられなかったのだ。金曜か安息日にベギンがもう一度ガリリのもとに来て、その船が来た知らせ、積み荷降ろしの助力を要請した。ガリリはこれは停戦違反であり、その武器は政府に引き渡されねばならないと言った。それから「ベギンは」彼の人々と相談する為に出て行って返事を持って来た。その武器が政府に引き渡される事に自分達は原則的に同意するが、実際にはエツェルの倉庫に引き渡さ

れ、ハガナーの監督下にエツェルとハガナーの人々がそれを警備し、武器はエツェルの連中の装備に充てられて一部はエルサレム用として別に取り置かれるだろうというのである。彼ら〔エツェル〕には、〔武器の〕一部はエルサレム用として別に取り置かれるであろうが、そこ〔エルサレム〕でそれも引き渡されねばならない、と言い渡された。〔エツェルの連中は〕やって来て、自分達はこれらの条件を受け入れないと知らせてきた [3: 155~156]。

その船〔アルタレナ号〕は安息日には着かず日曜 [6月20日] に着いたが、その日に〔彼らは〕やって来て船が来航すると知らせた。それからその事はここ〔閣議〕に持ち込まれ、司令部から人が招かれて次の様な政府決定があったのである。彼らには、その武器は引き渡さねばならないと知らせること³、並びに彼らを屈服させるに十分な兵力をそこに配置すること、必要な場合には——その事が不可欠である程度に於てのみ実力行使すること〔という政府決定である〕 [3: 156]。

シャピラ ここへこの船で260人の移民が到着した。そして彼らに対処する移民課へ向かった。残りは別の〔様々な〕場所に向かわされたとは私は想定するが、それについての更なる情報を我々は持っていない [3: 156]。

話し合いに入る前に、クファル・ヴィトキン戦線にいる我々の司令官にも、その船に関して与えられたのと同じ指示を与える事を私は提案する。〔その指示とは政府〕会合が終わるまでいかなる行動もするなというものだ。というのも私は流血が更に繰り広げられる事を恐れるからだ [3: 156]。

ベングリオン その指示は船を屈服させるのに要する全兵力を海岸近くに準備する事だった。これらの兵力は政府の指示によってのみ行動するだろう。だがそこで彼らは我々の兵力と戦うのである。我々は本件全体について話し合わねばならない [3: 156]。

グリュンバウム 私が我々の前回会合で提案された提案に賛成票を投じたのは、流血を防ぐ為に大兵力を動員する必要があるという想定からだった。他の

同僚たちも、動員されるであろう兵力は流血と、エツェルの側の対抗の願望を防ぎ得る程大きなものでなければならぬというこの意見に賛成である、という印象を私は持った。それ故私はこう考えた。目的はどんな代価を払ってもエツェルを屈服させる事ではなく、目的はその件を終熄させる事だ。もしその件を、実際に彼らの屈服と我々の軍への武器引き渡しにつながるであろう交渉で終わらせる事が可能なら——それで充分だ。エツェルが戦闘では勝てないだろうと知るのがよい事だと私は考えた。私が前提とするのは、誰かがその行為によって停戦を破ったり、誰かが自らの考えで自らの使用の為に武器を入れるのを許容する事は我々にはできないという事だ。政府はこの様な行為を、自らが行使し得るあらゆる手段で防がねばならない。これについては我々の間にはいかなる意見の違いもないと思われる。もう一つ我々の間で論争の余地がない事は、エツェルが我々に対する地下テロ組織に戻る事に我々の関心はないという事である。我々の中にこの様な結果につながる事を望む者が一人としていない事を私は信じたい。これらが私の基本的前提である [3: 156~157]。

私には何故私が介入し、いかに介入したかを政府の同僚たちに説明する義務がある。私は二つの理由から介入した。A) [彼らが] 私の所へ話を持って来て、私はこう考えたからである。本件は大変重大なので、彼らが私の所へ来たとなれば、本件を首相に報告するのが私の義務であると。首相は政府のメンバーがイルグンの人々と会合するのは望ましくないと思う、と私に書いてきた。もし私がこれは望ましくなく、これが政府見解だと知っていたなら——そうであったとしても私は従うか従わないかのいずれかであったろう。しかし私はこれ [政府見解であった事] については知らなかった。私はこれはベングリオンの個人的意見だと想定している [3: 157]。

B) 皆さんは私を内相ポストで遇して下さい。確かに警察は内務省の権限に入らないが、それにもかかわらず内務省には国内治安と呼ばれるものへの所管はある。それ故、私は武装兵力を持たないものの、内相として国の内部治安

に関する諸事項に介入する権限は持つ [3 : 157]。

エツェルを代表して私と交渉した人物は、私がこう理解した様にその件を語った。実のところ我々はエツェルの連中にその船を持って来るなどとは言わなかったというのだ。（ベングリオン [彼らが] 我々に話を持って来た時には、その船は今夜来ると言っていた。）ガリリの手紙、またエツェルの人物の話から私が理解したところでは、司令部と、存続が合意されていたエツェル参謀本部の間の長い交渉がこの行動に先立っていた。（ところで組織が解体されると同時にその参謀本部の存続などという事に合意する事がいかにして可能だったのか、私には理解できない！）そしてこの交渉では、もし船がエレット・イスラエルの海岸に来たら、その事が知られずには済まないの——[彼らが] 船を帰した方がよい、とは言われていなかった。これについては議論がなかった。これをめぐる意見の違いはなかったのだ [3 : 158]。

第二に（ここでも私は何が正しく何が正しくないのかは知らないが、経験から言って常に双方の言葉を総合させねばならず、そうやって初めて少し真実に近づくのだ）[彼が私に語るには] 非常に友好的だった交渉の中で、その船を[彼らが] 持って来る試みは我々 [暫定政府] にとって価値があり、そうする事によってどんな前例がつくり出されるか我々を見るだろう、と言われたのだそうだ。「目的」に達した時、武器引き渡しについては語られず、倉庫及びそれらの警備の問題と武器の分配の問題という二つの問題が存在した。武器の20% を直ちにエルサレムに送る事が合意された。残りの分配については合意に達しなかった、なぜなら彼ら [エツェル] はその武器がエツェルに与えられ、軍と共にエツェルの手でそれが分配される事を要求したからだ。・・・ [3 : 158]。

これが私がエツェルの人から聞いた通りの話である。二つの話の総合は、たとえ停戦違反について語られていたとしても——これが核心だったのではなく核心は武器の分配問題であった、という結論に私を導いている [3 : 158]。

シェルトク 核心はイスラエル国家の権威だった [3:159]。

グリュンバウム 私は我々が何を核心と考えるのかについて述べているのではない——その交渉における核心について述べているのだ [3:159]。

ベングリオン それこそがその交渉における核心だったのだ！ [3:159]

グリュンバウム 実際には核心は、国家支配の原則に基づく武器の分配だった [3:159]。

この事を聞いた後、そして我々が流血を望まず本件の終熄を望んでいるという事を理解した後……——私は双方に提案を提示する事を試みる事は可能だと考えたのだった [3:159]。

その提案——私はこれは私の個人的提案だと強調した——の中には三つの土台があった。(A) その武器は軍に、軍の参謀本部の代表に直ちに引き渡されるだろう。(B) 合意された事に従って——その武器の20%をエルサレム用として別に取り置く。いかして別に取り置くか——この問題については私は触れられなかった(私と話した[エツェルの]人物は、あたかもエルサレム用として取り置かれるであろう武器をエツェルの手に引き渡す事で合意されたかの様に述べていた。私は、合意された通りに、と[のみ]言っておいた)。(C) 第三の土台は、軍は彼ら[エツェル]がその武器を持って来たという事実を、彼らに一定の権利を獲得させる事実として考慮するだろうという事である。何よりもまずその武器の一部はエツェルの二部隊の装備を補完する為に別に取り置かれるだろう、彼らの装備が完全ではない程度に於て。そして軍に追加の諸部隊が加わったら——[軍は]それらの部隊を武装し装備する為にこの武器から取っていく事になるだろう [3:159]。

私は内相として、又合意に関わった者として、この件を整えるべく試みるのが自分の義務だと考えた。そしてここに4時間続いた完全なオデューッセイアが始まったのである。私はこう述べねばならない。15年にわたるポーランドのセイム⁴代表[議員]としての私の活動中、我々の首相に私が連絡をつけたか

った今回私に起きた様に、ポーランド首相に私が連絡をつけられないケースは起きたためしがないと。私はまずこの道中に首相に連絡をつけられるかと期待して主任秘書室に電話したのだが——シャレフはその時会議中である事が判明した。私は別の「色々な」場所に電話した。7時にやっと参謀本部と連絡がつき、またもや完全なオデュッセイアが始まったのである。私は参謀本部の将校に、司令部にとっても首相にとっても重要な事を私が伝える事のできる人私の方によこしてくれと頼んだが——ならぬという返事を受け取る、理由は、我々はあなた「ベングリオン」から指示を受けていないからというのであった。私は言った。私は指示を与える事を意図しているのではなく情報を伝えたいのだ、私の方へあなた方の一人をよこしてくれ、と——時間はたつが私は返事を受け取らぬままだ。しかし私の所へマイモンが入って来て、首相は私「グリュンバウム」から情報を受け取る為に彼「マイモン」を送ったのだと言う。私は非常に喜んだ。私は書面で私が皆さんにお話しした事を全て伝え、もし首相が私がそちらへ行く必要をお認めになるなら車を廻して欲しいと付け加えた。というのは私は彼がどこにいるのか知らなかったし、こうでもしなければ——私の任務はこれで終わってしまうからだ。私は非常に語調鋭い返信を受け取り、その中には「本件を進めてはならない」二つの理由が書かれていた。

A) 我々が採択した「閣議」決定の意味は——力の行使のみによって本件を終息させねばならないという事である、B) これは交渉である [3: 159~160]。

私は我々が採択したその決定をやや別様に解釈している。我々は力のみによる本件の終息とは言わなかった。逆に我々が動員したかったのは、事態が対峙に帰着しない程度に大きな兵力なのだ [3: 160]。

・・・我々が敵との停戦に同意したからには——我々にとって内部における停戦に流血の前に同意する価値はある、と私には思える。それは可能だし、歴史的観点からするとこの闘争の中にはエツェルにとって何らかの教訓があらう——その教訓が我々にとってかくも高くつく事は大変残念に思う。自らの力

を知る政府は常に誇り「寛大さ」を持って振る舞い、他の出口がない時以外武器を使わぬものだ。この場合は他の出口があったから、流血なき屈服をもたらす事は可能だった [3: 160~161]。

シェルトク どうやって? [3: 161]

グリュンバウム [彼らが連れて来た] これら 800 人の移民は——海岸に降ろされて散り散りになった。彼らに残された力はそんなに大きくないので、彼らに他の選択肢がない場合以外「彼らは」敢えて対抗する事もないだろう。これが私の印象だ [3: 161]。

私は繰り返して強調する。私は、我々が我々の主権「スヴェレニユート」を守り、武装闘争の際には我々の方が優勢である事を証明するだろう、というこの事に賛成だ。しかしその事にはある限定がある。その限定とは、我々の国家の中で政府と法に敵対する方向性を持つ地下テロ組織を、我々のもとでつくり出す事に、我々は全く微塵も関心はないという事だ。それ故、我々が持つ全ての力をもってしても、又この力を行使する用意ができていたとしても——我々は交渉を拒否できない。もし交渉の可能性があるなら——交渉を行わねばならない [3: 161]。

首相が私にこれこれの条項はどうしても受け入れてはならぬ、他の条項は考慮に入る——これに沿って屈服させる事を試みよ、と私に言ったとしたら、私は全然文句を言わなかっただろう。今、状況はこの様である。血が流され、我々の軍の内部にいるエツェルの諸部隊は反乱しようとする試みを行って抵抗に遭い、人々が殺された（クファル・ヴィトキン近郊で殺された人々がおり、町でも殺された人々がいる）。軍内部の混乱は大きい。そして本件は公表されるだろう。こうした全ての事は我々にとって力を増す事にならないし、我々にとって威信を増す事にならない [3: 161]。

・・・私は知りたい。国内各紙への説明は私の権限の範囲内なのかどうか?・・・[3: 161~162]

私は提案する。もし「エツェルと暫定政府の」停戦があったら——我々はエツェルを屈服に持ち込む為に停戦を利用するが、それ「エツェルの屈服」の結果として我々に対抗する地下テロ組織が創設されない様な形でそれをしよう [3: 162]。

ツィスリング それは我々次第という事か？ [3: 162]

グリュンバウム ある程度その事は我々次第だ。我々の前には二つの道がある。我々は指導者を、裁判にかけるのであれ裁判にかけないのであれ処刑する事に決め、そうする事によって本件にけりを付けるか、地下組織がつくらぬ様な屈服の形にするか、そのいずれかだ。私は後者の道を行く事を提案する [3: 162]。

シャピラ 私はどの程度自分が本件に関わったかを報告したい。シャヴオート「ペンテコステ」の祭りの前日、私はパリのエレッツ・イスラエル事務所から、エレッツ・イスラエルに向けて武器搭載船が出航しようとしており船中には400人の移民がいるという電報の知らせを受け取り、その事を防ぐよう頼まれた。これと似た電報をモサドも受け取った。翌日私はベギンと会見した。ベギンは、前日自分は船が出航せぬ様にとという指示を書いた電報を送ったのだが、今日BBCラジオで情報が報道され、その中で800人の移民と言っていてこの数字は真実に合う様だったので船は「既に」出港してしまったと思う、と私に報告したのである。しかしながら——と彼は言った——もう一度電報を打ってみよう。そして彼は付け加えた。停戦中の今はその船がその地の海岸に着いてはならない事を自分は理解している、それはスピードが遅い船だ、それが到着する前に——我々は何とか折り合いをつけ、本件を収拾する方法を探そうと。私は当然こう言った。アリヤー・ベイト「非合法移民」の組織化自体が今はよくないのだと。ベギンはそれに同意し、その事は自分の知らぬうちに起きたのだと言った [3: 162～163]。

我々が百パーセント正しいという事については誰も異論はない。しかしここ

での問題は完全に別のものだ。[それは] 我々が辿り着いた事に辿り着こうとする [エツェルへの] 理解も [問題の] 一部だったのではないか、という事である。私はこの問題への対処の際に我々が示した理解と忍耐の、正にその程度について訝しく思わざるを得なかった。力によって今これらの人々を正しい道に引き戻す事が可能だと考える人々は論理的でなければならなかった。もしそうであるなら交渉の余地は全くなかった。エツェルの連中が明日来てこの交渉の内容を暴露できない様にする為にも。そして彼らはその様な事もためらわないだろう。彼らは明日真相を暴露してこう知らせてしまうだろう。イスラエル政府は国連の監視者たち [ボンデ大佐が長を務めていた国連停戦監視機構 (UNTSO) を指す] にこれについて知らせずに武器を [船から] 降ろす用意があったが、問題は誰に武器が渡されるかであった、と [3: 163]。

私はそれ故に聞く。もし我々に流血の衝突に帰結させる覚悟があったのだしたら、何故我々は後でつけを (しかもつけは小さくはないだろう) 払うであろう交渉に入ったのか? もし我々のうちの誰かが、力の行使によって我々が尊敬すべき人々としてベルナドットの前に、そして国連に対して立ち現れる事ができるだろうと考えたとしても——エツェルの連中がやって来てその事を否定し、こう語るだろう。これは内輪もめだったのであり、真相は全く別なのだと。そうなれば我々はその僅かな利益を世界に対して失う事になる [3: 163]。
シェルトク [では] どう行動すればよかったのか? [3: 163]

シャピラ 二つに一つだ。彼らといかなる交渉もせず、お前たちは武器を引き渡さざるを得ないと告げるだけにする事は可能だった——或いは世界の諸国民に向かって [エツェルの行動について] 抗議するのも結構だったろう。我々が交渉に入れば、その事は我々が既に相当程度彼らの手中にある事を意味する——そうなれば、彼らが秘密を暴露する様な事につながりそうなあらゆるステップを控えねばならない。私は交渉の公表の中に大きな政治的打撃を見る。このケース自体の中に対外的にも対内的にも、政府への更なる、脅威を感じさ

せる様な何らかの打撃がある。我々がエルサレムで蒙った、脅威を感じさせる様な打撃の後では「特に」・・・我々が彼らと交渉に入ったからには、流血に帰結させる事は我々には禁じられた。いまだに我々の支配が、外部に対してのみならず内部に対しても安定していない事を公表しなければならなくなっている。私はパルマッハをエツェルと同列視したくもなく、同列視はするまい。だがもし我々の中のある人々「パルマッハを指す」が昨今エルサレムでやった様に我々を軽んじているとしたら、というもある晴れた日に「彼らは」参謀本部から許可を受けずに武器を持ち出した——そして我々はこれを制止できなかった——わけで、どうやって我々はエツェルの連中を一遍に、しかもこんな力で元の軌道に引き戻す事を望めたか？ もしユダヤ人の手でユダヤ人の血が流されるであろう危険を我々が防がないなら、今日は何人かの殺人者が斃れ、明日は何十人かが殺されるだろう。我々は兄弟間の戦争に入っており、かくして外からの敵にこの地の門を開いている。・・・私はもしその事が続くなら、我々の生存そのものにとっての大きな危険を見る。だからこそ私は会議の初めに、威信の問題は考慮せず直ちに流血をやめるよう要求したのだ。支配の存続と国家の生存に責任を負っているのは我々であり、エツェルの連中ではない。私はクファル・ヴィトキンでの流血の衝突をやめるよう直ちに指示を下す事を提案する。・・・そしてもし今日「オブザーバー」が我々の辞任を要求したら、明日は更に何を要求するか分かったものではない。・・・イシューヴのユダヤ人は一つの事だけを望んでいる——少なくとも我々の間では平和が支配する事だ [3: 163~164]。

私は直ちに三人のメンバーを持つ委員会を選出し、それが本件を処理する事を引き受け、解決策を政府の承認に持ち込む事を提案する。・・・[3: 164]

ベルンシュタイン 我々は一昨日決定を・・・採択し、我々全員がその決定に賛成票を投じた。私としては、次の認識から賛成票を投じた。国家は二つの軍事的権威の中では存続できず、この様な状況の中で政治を行う事は不可能で、

それ故に重大な決断の必要がある、と [3: 164~165]。

我々が正式に、首相にこの件について法に従って行動する権限を与えると決定した事は確かだ。しかし決定に先立つ議論の中で、その意図が次の様であった事は明らかだった。流血なく彼らを屈服させられるだろうと期待する余地を与える充分な兵力を、前もって集結させるという条件が満たされるなら、というものだ。その〔軍事〕行動の詳細は承知していないが、私は、我々が必要な兵力を集結させる事に成功しなかったという印象を受けた。(ベングリオン我々は成功したし、流血も殆どなかった。)ところが流血はあったのだ。・・・私はひたすら戦争と我々の状況を心配している。我々が我々の決定を採択したのは遅きに失した、あり得る全ての結果を恐らく考量しなかったのだ。そして私は、今我々が外部からの大きな危険にさらされているというシャピラ氏の意見に同意する。もし私がアラブカイギリス政府のアドバイザーの一人だったら停戦を今日破る事を進言しただろう。なぜなら〔彼らが我々に〕勝利シテルアヴィヴに侵攻できるという、彼らが今持っているよりもよい展望は〔以前には〕まだなかったからである [3: 165]。

通告〔国連にアルタレナ号来航について知らせた事〕に関しては・・・別の大事な事がある。この通告の中には我々を苦しめた者の中に顕著にあった、不誠実さという一つの要素があり、この様な事については既にシャピラ氏が示唆していた——我々の政府は、〔停戦〕違反に加担し停戦条件に反して武器を受け取る用意ができていたのだと。武器が来る事自体の中に〔停戦〕違反に等しいものがある。政府がこれを行うか、それとも逸脱組織がこれを行うか——これが本質的な議論なのではない。我々が国連にそれについて報告せずに我々の手中に武器を受け取る用意があったという、その事実が問題なのだ [3: 165~166]。

残念な事だが我々が時々確認せざるを得ない様に、いまだに我々は我々の軍の隊列の内部にさえ必要な規律を浸透させる事に成功していない。議論の焦点

が逸脱者たちについてであり、外からの脅威を感じさせる様な危険がある
今——我々は平和的な方法による解決策を見出す事に関心がある。私は強調して言う。エツェルとの交渉は私がそれについて知る限り、軍の側からは善意と大きな忍耐から行われたのであり・・・相手側には「エツェルが独立して存在できる様な」別個の枠組みを残す方法を見出したいという願望がある様だと。私は・・・平和的な方法で解決に達するという政府の善意の意図を些かも疑うものではないが、事態が今この通りでは、我々はこれ以上の内戦なき本件の收拾に向けて努力せざるを得ない。クファル・ヴィトキン——これは一つのケースにすぎない。本件が他の場所に飛び火しなかったとしてもどの様に展開するかは、まだ我々には分からない。そして我々の良く正しい全ての原則にもかかわらず、我々が流血の戦争の中にあり、本件が侵攻そのものの中にある災いよりも大きな災いに発展しそうであるという事実を、我々は考慮せねばならない [3 : 166]。

ツィスリング・・・[政府] 決定の明らかな意図は、それ [問題] の放棄がもっとずっと深刻な流血の戦争の準備を意味する様な問題に対する、イスラエル政府の権威を実現させる事だった。・・・ [3 : 166]

確かに我々の中で流血を望む者はいない。我々は兵力の集結が戦争を防ぐだろうと期待した。しかしその事は我々ばかりではなく彼らにもかかっている。我々は、実力行使の意図があると説得されれば——彼らはたじろぐだろうと期待した。しかしそれらの条件を受け入れるのは彼らにかかっていた。参謀本部の者が我々に意図は何なのかとはっきり聞いてきた。我々は彼に答えた。我々の意図は「軍事」行動を防ぎ、可能な限り流血を避ける事だ。しかし「彼らが」決定を受け入れなければ——力も行使すると。この点では従って、いかなる間違いもあってはならぬのだ [3 : 167]。

今も流血を防ぐ事は可能だ。私にはシャピラ氏の提案が何なのか分からない。私は「閣議の」テーブル全体の意見に基づき軍の司令官たちに、彼ら「エ

ツェル] が少なくとも彼らとの間で署名された合意に従って行動すると知らせて来た時点で、全[軍事] 行動を中止せよと通達する事はできると思う。というのは、そうでもしなければ話し合いの土台が全くないからだ。誰かが侮辱されても我々の知った事ではないが、我々は[軍の] 能力が守られる事には関心がある。だからシャピラ氏が軍の内部状況に対して言いたい事があるなら、然るべき場での明確化にそれらを持ち込んで貰いたい。私は軍の一部に権威を侵害した者がいるとはまだ聞いていない。いずれにせよ明確化の前にそんな事を大勢の人に広めぬ様にして貰いたい。・・・[3: 167]

・・・流血は避けねばならず、今も、その事が可能な時はいつも避けねばならないが、政府の支配の限らない権威でない[権威を認めない] までも少なくとも合意を[彼らが] 遂行する、という条件の下である。さもなければ本件全体が根本から破壊される。私は今我々の前に、装備への要求、合意の遂行と責任の遂行への要求以外の別の道を見ていない [3: 167~168]。

公表の問題について。・・・政府は公表の問題についてどうすればよかったのだろう？ 我々は兵力を集結させた。もしこれが効果的だったら、或いはもし[エツェルが] 彼らとの間で合意された事を遂行していたら——本件は目立たず誰もそれについて知らなかっただろう。彼らが合意された事を受け入れなかったので、我々が行動している事が全世界の目に明らかになったのである。・・・私は何の為に彼らがその船をテルアヴィヴに持って来たのか分らない。もし本件を国連から隠す為とか、ユダヤ人の手中により多くの武器を残す為とかだったら——[適した] 場所はテルアヴィヴではない。テルアヴィヴに船を持って来る事は挑発を意図した行為にほかならない。何の為に彼らは前線を去るのだ、平和の為に？ ——誰との平和だ？ 何の為に彼らは道を封鎖するのか？・・・武器がユダヤ人の手中に残る事を彼らが望んでいるとすると、何故こんな事をするのか？ 彼らは自分達が政府の要求をのまない時点で、本件が全ての人の眼前に露呈する事を定めし思い知るだろう！・・・[3:

168]

・・・主権 [リボヌート] や権威を尊重しないなら——せめて自分達が守ると言った合意位は尊重しろ！ この事は特に他の誰よりも合意に責任を負っている者に要求せねばならない。・・・この事を私は緊急に・・・責任者に通告する事を要請する。・・・[3: 168~169]

ベントヴ 私は首相が二つの事実についてグリェンバウム氏の認識を正す事を望む。(A) その船を出航前に止める試みはなされたのであり、便乗してひそかに停戦を破る意図はなかった、(B) エツェルの司令部は過渡期のみの暫定的司令部にすぎず、彼らの人々を軍に動員する為だけのものだ [3: 169]。

状況はどんなか？ 我々は軍の一部の側からの露骨な反乱に直面している。英軍では食事がよくなくて反乱が起きた例はあった。この様な事だったら私はまだ理解できるし、それには許容性をもって対応できる。しかし今我々が直面しているのは、明白に軍司令部と政府に向けられている軍の政治的反乱だ。・・・彼らは我々に対して武装したいのだ——政府に対して、政体に対して。グリェンバウム氏は寛大な態度を提案している。私はこの様な反乱の後に責任者を処刑しなかった国を世界で一つも見た事がない。もしその意図が彼らに禁錮十年とか、半年の経過後に恩赦を与える判決を言い渡すという事なら、許容的な態度をとるのも分かる。だが [政府が] 支配の放棄に寛容心から同意するなどと!? [3: 169]

・・・国家に於ては政府とその他の分子の間の交渉はあり得ないだろう。だから私は国の運営について考える人間 [閣僚、暗にグリェンバウムを指す] が、本件を交渉に基づかせる事が可能だなどとどうして言えるのか理解できないのだ。誰が我々の権限を廃する事を我々に許可するのか？ 政府は法に従って行動せねばならない。政府には法を変更する権限はない。もし政府自身が交渉に基づいて行動し始めたら、或いは自らが行わねばならない事を法に従って行わなくなったら——政府が国の法を破る最初の者になってしまう。故に、国

防相に法に沿って行動するよう課す、という原則を私が提案したのは理由なき事ではなかった [3: 169~170]。

私は、真実はいつも真ん中にあるという意見もあり受け入れる気はない。それはいつも真ん中にあるわけではない。我々はこちら数年ベヴィンとアラブに対して、真実は真ん中にあると言っている全ての人々に対して、苦々しい戦争を行っている。ここで真ん中はなかった。ここで我々の前には政府と、政府に反乱を起こしている人々がおり、しかも彼らは自分達が守ると言った明白な合意に反して反乱を起こしているのである。・・・ [3: 170]

私はグリェンバウム氏に聞きたい。一体我々はポーランドで我々と「オゾン」⁵⁾の間の妥協に賛成できたか? 「オゾン」の人々も妥協する事を望んでいた。そして我々は何を要求したか? 我々は妥協を要求しなかった——彼らを法の全ての厳格さでもって扱う事を要求したのである。・・・確かに我々は流血を避けるであろう様な戦略的な道を行きたかった。私も、彼らが敢えて抵抗せず屈服する様な、決定的な優越性を持つ兵力を送らねばならないと言った人々の一人だった。・・・しかし私が思うにためらいがあったのであり、これが彼らに、反抗し自分達の意見を主張する可能性を与えたのである [3: 170]。

私はここで同僚たちの感情は理解する。私がラビ・フィッシュマンを見つめて彼の顔に意気消沈を見る時、これは私をも落ち込ませる。私も、もしその事が死活的な結果につながるだろうと信じていたら寛大になる用意があっただろう。国家の承認まではこう考える事が可能だった。国が全ての問題を解決するだろうと。しかし今、我々には選択肢がない。この政府が実効的な政府として行動するのか、力を欠いた政府として世界の目に映るのかのいずれかだ。・・・我々の前には撤退の道はない。私は我々が撤退しなければ——彼らが撤退すると思う、なぜなら彼らには展望が全くないからだ。社会は彼らの味方をしていない。そしてこれは地下組織の問題ではない。地下組織も正しい畝の上に土台をおく事なく生きてはいけない。本件を終わりに持って行かねばならない、も

し可能なら血を流す事なく。我々は流血を防ぐ為にあらゆる努力をせねばならないが、政府の放棄まで行ってはならない [3: 170~171]。

シェルトク [グリェンバウムとシャピラの発言から自分が理解したところを要約する。省略3: 171]

私は事実に戻ってみたい。移民と武器を乗せた船が来る事が分かった。その出航を止める試みがなされたが——この試みは失敗した。その船がこの地の入り口にある事が分かった。三つの可能性があった（皆さん一人一人にはその事を扱わねばならない人々の立場に自分を立たせて頂きたい）。[第一に] 本件全体から完全に目をそむける。つまり彼らが静かに積み荷を降ろす事に成功する場合、エツェル——それは[組織的] 清算の状態にあり解体される事に同意していたわけだが——の手中に突然、エレッツ・イスラエルのユダヤ軍の武装の為に充分な武器の宝が見出されるであろう・・・という事に最初から同意してしまう。この事は不可能だった。その事が露呈する可能性があった、つまりユダヤ人による明白な・・・停戦違反 [が露呈するという事] である——この可能性ゆえに、目をそむけるという事は考慮に入らなかったのである。[第二に] 国連を代表する監視者に最初からこう知らせる可能性があった。ご存じの様に船が来るが、その中には我々が責任を負わない移民がおり、その中には我々が責任を負わない武器がある。あなたができる事をしてくれ、と。・・・この様に行動するという王国的 [国家的, מַמְלֻכִּי (mamlechi)] 論理はあり得たが、我々はこのやり方で行動するのが可能だという事は思いつかなかった。第三の可能性が残る。その件に立ち入り状況を救おうと試みる事——つまり彼らと折衝して折り合いをつける事だ。・・・しかしどんな文脈でこれらの言葉は言われているのか [これは限定的な場合にしか当てはまらない、の意]——イスラエル国家を守る場合のみであって、イスラエル国家の存在を掘り崩す場合は当てはまらない [3: 171~172]。

私は反乱について、又グリェンバウム氏がいかにも本件を提示したかも知念な

思いで聞いた。あなたは武器の件で合意に至らなかった事は自分にとって明らかだった、と言ったが——恰もここでは、武器庫を手中に収めたが武器の山分けについては話がつかなかった二人組のやくざについてでもあるかの様な話しぶりだ。あなたが政府のメンバーでなかったとしても、本件をこの様に提示したのでなかったとしても私は仰天しただろう。どういう事だ？ 二人組のやくざがここで会合したのか？ ここで一方の側からは政府が、もう一方の側からは——合意を破り、今その違反により建て直しを試みている組織、[両者が]会合したわけか。・・・問題は支配するか支配しないか、一つの軍か一つの軍でないか、合意の存続か合意違反に妥協するかだった。あなたは[武器の]20%がエルサレムに行く事について合意されたと言うが——エルサレムに20%が行く事について合意されはしなかった。・・・ここにはいかなる合意もなく、ここにあったのは、露骨な戦争への更なる口実から彼らを遠ざけるであろう何かをしようとする努力からの通告だけだ [3: 172~173]。

その後あなたは「双方への個人的提案」を提案した——政府のメンバーであるあなたが、その一方の側があなた自身である双方に対して。この政府はあなたの所有物か？！・・・あなたはいつも王国的思考 [国家的思考, マムラフティユート (ממלכותי)]⁶ の試みにさんざん依拠し、王国的 [国家的, マムラフティ (ממלחתי)] 試み [という見地] から「軽蔑すべき」という言葉に反対している。一体 [国家的見地から見て軽蔑すべき事の] この欠点を, [逸脱組織の] 国家との交渉や, 双方 (彼らの一方はこの政府の権限を侵したのである) への政府メンバーの個人的提案の欠点 (あなたはそれを正当化しているが) と比較できるのか [後者の欠点の方が比較にならない程悪い]。私はこの事が理解できない [3: 173]。

私は我々が今合意に戻れるか分からない、なぜなら合意違反があったからだ。私はベギン, メリドール, スタヴスキーを逮捕せねばならないと考える。(ベングリオン [彼らは] ピーター・ベルグソン [ヒレル・クック, 前篇参

照] は既に脱走兵として逮捕した!) もし誰かがエツェルの連中への影響力を持っていたら、彼らを屈服と服従に持って行く為にこの影響力を利用し、この様にする事によってクファル・ヴィトキンにおける戦争をやめさせねばならない。その後政府は彼らをどうするか話し合うだろう。・・・[3:173]

[政府の] 声明について。・・・問題は政府の名で声明を出すか、政府の名で声明を出さないかという事だった。状況は以下の様だった。・・・もし[彼らが] 昨日決定を受諾していれば、恐らく本件は夜のうちに終わっただろう。しかし・・・本件は夜通し、曙光が差すまで続いた。朝、国連機が船の上を旋回しているという知らせを私は受けた。私はすぐに、我々は国連に知らせねばならないという事を理解した。加えて昨日の朝ベギンの代表たちが回答委員会を招いて[記者会見を開いて] 本件全体を新聞各紙に伝えた、勿論[話を] 歪曲した形で。そしてこの事は各紙に伝わると——この地全土に広がった。国連の人々は我々の内部に住んでおり・・・直ちにその事を国外に打電した。しかも国連がその船の来航について知るところとなったのはそれが海岸に着いた数時間後で、我々の軍は既に行動に入っていた。その上、飛行機が旋回していた。国連の人々が私の所に来て停戦の重大な違反があると言った時——彼らは私が正にこの件について彼らに手紙を書いている最中であるのを見出したのである。私は言った。私はあなた方に手紙を書いており、我々が何をしているかをお知らせする、というのも彼らはイスラエル国家に対して反乱を起こしているからだ。夕方6時45分にエツェルは本件を放送した。私はベングリオンに言った。我々は声明を公表せざるを得ない、エツェルのみが本件を世界の前に提示する事はある得ないと。それからこの声明が作成され、新聞各紙における公表に廻されたのである。これは情報局の事項ではなく政府の声明である——しかも[閣議] 決定に沿うものだ。あれこれの言葉は削除可能だ [3:173~174]。

これが[今までの] 状況だ。私は彼らをあらゆる手段で——武力を使ってで

も服従に持って行かねばならないと考える。その後我々は何をすべきか改めて話し合おう。しかしあの三人——ベギン、スタヴスキー、メリドール——は逮捕する事を私は提案する [3: 174]。

フィシュマン 昨日から今朝までに私はシャピラ氏と何回か話し、我々二人は、エツェル側から罪が犯されたという事で・・・意見が一致した。それ故ツイスリングさん、私は決定に反対票を投じたくなかった。だが賛成票も投じたくなかった。・・・私は、採択された決議の精神では、流血を防ぐ為になされねばならなかった全ての事がなされなかったのではないかと危ぶんだ。私は首相に電話し、その直後にタクシーでラマツト・ガンの彼の所へ向かった——道中私は一時間半足止めされた。ベングリオンがそこにバリケードがあると知っていたのだったら私の来訪について知らせ、指示を送っておくべきだったのだが。(ベングリオン バリケードがあるとは全く知らなかったのだ!) 一時間半後偶然にベングリオンの車が到着して私を移動させた。私が彼のもとに来た時にはベングリオンは既に参謀本部にいた [3: 174~175]。

というわけで私とグリェンバウム氏へのこうした全ての扱いは侮辱だ。(ベングリオン 事柄を真実通り話した事は容赦願いたい。) 私はベングリオンについて彼が私を侮辱したかった事を全く疑わないが、これは本件そのものを軽んずる事だった [3: 175]。

私は参じて彼 [ベングリオン] に直ちに戦火を停止せよという命令を出すよう要求した。彼は何もする事はできないと言った。私は非常に敬意をもって軍を扱ってきたが、軍内に反乱 [複数形] がある事は知られており・・・軍と政府の間には規律上の関係がなく、私はエルサレムでなされた事を知っている(私がエルサレムにいた時、私はベングリオン氏に電報を打って一人の司令官を直ちに解任するよう要求し、それから [彼らは] 私の言う事を聞かなくなった)⁷。私がベングリオン氏に要求した第二の事は——夜に政府会合を招集する事だった。彼は夜に会合を招集する事はできないだろうと言った。そして私は

ベングリオン氏について、そんな事があってはならないのだが、彼が適切ではない事をしたがつたのを疑わない。昨夜彼は私に言った。流血はないと自分は聞いていると。しかし結局流血はあったのだ [3 : 175]。

私は皆さんに、政府の名誉ある名に於て停戦命令を直ちに出すよう、そして本件の解決のため二、三人の人々を選出するよう要請する。彼らが無法者である事は私も分かっているが、我々には責任がかかっている事も分かっており、責任感が我々を義務づけるのだ。政府はまだ若さの盛り、青春期にある事を忘れぬ様にしよう。私も皆さん同様、国民がどう思っているか知っている——残念な事に国民は彼らの味方だ。それ故に何よりもまず戦火を停止する命令を出し、彼らと折衝して折り合いをつけるであろう二、三人の人々を直ちに送る必要がある。私は我々が我々自身を貶めねばならぬと言っているのではないが、我々には本件の解決の為の道を探す義務がある。というのは、そうしなければ私は地下組織のみならず——国民の中の露骨な反乱をも前にする事を大変恐れているからだ [3 : 175～176]。

ベングリオン たった今 [彼らが] 私に知らせてきたところではその船はテルアヴィヴから出る試みをしている様で、[彼らは] これに出る事を許すべきか許さぬべきか聞いてきた。私は言った。妨げない様に、その居場所はテルアヴィヴ中でない方がよい、と。しかしそれが出る事ができるかは明らかでない [3 : 176]。

ローゼンブルート 私はシェルトク氏と意見を同じくし、彼の全ての提案を支持する [3 : 176]。

シトリト 我々全員が兄弟の手によってユダヤ人の血が流されないか恐れている。他方、国家評議会は法を採択したが、その法はイスラエル国家に於てはイスラエル国防軍以外の軍勢力は存在しないだろうというものだ。自らを尊重する国家が採択された諸法を遂行せねばならない事は明白だ。もし我々が我々自身で制定する法を遂行する事を知らないなら、[彼らは] 我々を国に秩序を導

入する能力がないと見なすだろう。そして私の意見では、これが今国連で浮上する問題であるだろう——我々には国に秩序を導入する能力があるのか能力がないのか[という事が]。かつて彼らが分割に賛成する決定をしてそれを遂行しなかった時、恰も彼らが我々の力の評価に於て間違えて、我々が力を持っていると考えたがそうではなかったかの様に言われた。我々は確かに我々が力を持っており、我々が警戒態勢に入り戦争できる事を証明した。今我々は第二の問題に直面するだろう。我々が制定する法を我々が導入できるかできないか[という問題である]。私が思うに我々全員にとって、国の存続が統治と秩序を実現するその力にかかっている事は明らかである。武器に対しては、その事が国連に知られたからには、たとえその武器が[船から]降ろされたとしても——それが法的・国際的方法で国に引き渡される事ができるのか大変疑わしく思う[3: 176~177]。

我々には一つの道しかなく、それは健全な王国的[国家的、マムラフティト(ממלכתי)]道——[すなわち]法と秩序の存在である[3: 177]。

交渉の為の委員会の選出の提案についてだが——私は我々が魔法の輪の中に我々自身を入れない事を望んでいる。もし交渉が失敗したらどうなるだろうか——その場合も武器を使わずに、武器の力で秩序を導入せずにその要求を主張するのだろうか？ というのは、再び我々はこの問題に直面するだろうからだ[3: 177]。

カプラン 起こった事は災いであるという評価に同意する。そして私はラビ・フィッシュマンに言いたい。私の評価はこの様だったので議論に加わらなかったが、決定には賛成票を投じた。苦渋の心で賛成票を投じた、というのも私は我々の前に他の方法を見なかったからだ。彼らが交渉を悪用する危険はあると思う。故に、私もいつも行動についての合意への試みに反対していた。彼らの行動全体は欺瞞と挑発の上に築かれていた。・・・恰も双方の間の講和の為の委員会についてであるかの如く交渉について話す事自体が、その様な事につい

て話す事 자체가、我々を破壊しているし我々を破壊するだろう。私の心の中には、力〔の行使〕なくして彼らに影響を及ぼす事ができるという信念はない。・・・彼らはイスラエル国家の平凡な市民となるだろう！ グリェンバウム氏には、ここ〔閣議〕と新聞各紙における、交渉と〔エツェルへの〕寛大さについての全ての言説が単に彼らを強め、彼らの間の極端主義者を鼓舞するだけだと私が言うとしてもお許し願えるだろう〔3：177〕。

ベングリオン・・・起こった事は我々の戦争努力を危険にさらしており——そして次が核心なのだが——国を危険にさらしている（というのも国家は、我々が軍と軍に対する支配権を持たぬ間はずっと存在しないからである）——これこそ軍を破壊する試みだ。これこそ国家を欲する試みだ。これらは二つの問題であり、これら二つについては、私の意見ではいかなる妥協もあり得ない。そして我々にとって極めて不幸にして、これをめぐって戦わねばならないなら——戦わねばならない。軍と国家が他の武装勢力に屈服した瞬間、我々はそれ以上すべき事を持たない〔どうする事もできない〕のである〔3：177～178〕。

〔既に〕言われた幾つかの事を訂正するのが私の義務の一つである。シャピラ氏は建国後のエツェルとの合意の中に余計な妥協傾向があったのは何故かと議論した〔シャピラの発言3：163 参照〕。私はこの責任に関わっていたので、理由は何だったのかをお話したい。私はシオニズム行動委員会の合意⁸に反対しており、それは災いだと考えていたが、それは運動の多数派によって受け入れられたので拘束力を持っている。・・・それで私は合意を遂行するのが自分自身にとって義務だと見なしたし、私を助けた同僚たちもそれを自分達自身にとって義務だと見なした。・・・それ故、解体に到達する為にあらゆる種類の放棄〔譲歩〕がなされた。〔ところが〕彼らはその合意を破ったのだ〔3：178〕。

グリェンバウム氏は首相の所に着くのに成功しなかったと主張している。グ

リェンバウム氏にこの様な主張をさせてはいけない。私に会いたがっている事を私が知っている人は——私の所に来るが、私はその人が私に会いたがっている事を神意〔直観〕によって知る事はできない。私が二、三週間前に政府のメンバーの幾人かと会いたかった時には、私が彼ら一人一人の所へ出かけて行った。シャレフからグリェンバウム氏が情報を持っていると知らされ、私はその情報を取りに私の秘書〔ツヴィ・マイモン〕を彼のもとへ送った。私はこの「罪」が何なのか〔この事のどこが悪いのか〕、どの点で私がポーランドの大臣より劣るのか分らない〔3：178〕。

私は双方の言葉からの総合の問題を斥ける。それは不可能だ。・・・私は誤りがあったと思っている、その誤りが良い意図からなされたにもかかわらず。私はグリェンバウム氏が独断で交渉に入ったのは災いだと考えた、彼はこれを疑いなく良い意図から行ったのだが、それにもかかわらずこれは誤りである。これは国内治安の問題ではなく——これは国の生存の問題であり、我々は我々が決定した事を決定した。我々一人一人が様々な理由を持っていたかも知れないが、理由について投票するわけではない。私は聞いた。我々は彼らを屈服させる為に兵力を集結させる事になるが、その兵力に行動する可能性が与えられなければ力で威嚇する事が不可能である事は明らかだろうか、と。〔彼らは〕そうだとやった。そうしてその決定が採択されたのである〔3：178～179〕。

本件自体について。これは全ての戦争努力を危険な状態においている。この軍は世界に存在する中で最も危険なものだ。【1行半削除】 かくなる故に、軍を文民統制下におく必要がある。軍が軍として反乱し諸条件を政府に命令する時、それ〔軍〕はもはや存在しない。私は皆さんに劣らず妥協的だが、いかなる妥協も適用されない事柄というものがある、これ〔妥協〕がその件の命運に関わるが故に。その一部が既に軍に動員されており一部は動員されていない勢力がかくも政府を脅かすなら・・・〔それは〕正に軍ではなく、全ての戦争努力は危険にさらされ、国家は存在する事を停止する。全世界が本件を知ってい

るのではないか、彼ら「エツェル」は新聞記者たちを招いて彼らに嘘を喋ったのだ。黙らせる事は不可能だった。私の意見ではいかなる妥協も不可能だろう。彼らは船を明け渡し、政府命令を遂行する事を受諾せねばならない。彼らがその事を遂行すれば——我々は「ユダヤの強盗」[גזלנים יהודים] という事でいかなる人も絞首刑にせず⁹、恐らく数人の人々を逮捕する「だけ」だろう。我々は皆、流血を避けたいのである。……しかしいかなる交渉もあり得ない。その船を政府に引き渡す事、及び軍、それも我々の軍から命令を受ける事以外は。そしてもし「彼らが」これを受け入れ、力を行使しなかったなら——我々は彼らを酷には扱わないだろう。もし本件が本当に片付けば——恩赦がある。しかし私は全ての妥協、全ての交渉に反対だ。この件は戦争努力の命運に関わる。今しがたアレクサンドロニ旅団の司令官から、もしそれが本当なら我々全員がそれに喜ぶであろう知らせが入った。「一時間前にクファル・ヴィトキンにおける戦闘がエツェルの全面降伏によって終結した。現地のエツェル司令官メリドールは全ての武器及び車両の引き渡しと、宣言に署名する事に同意した。その宣言には彼らの人々が全員、個人個人署名する事になっており、その宣言によって、彼らはその様に求められたらイスラエル当局の前に出頭する義務を負う。国防軍の損失は死者2名と負傷者6名、エツェルの損失は死者6名と負傷者18名であった。彼らは我々の捕虜を帰し、一つの装備も引き渡している。メリドールを拘禁する指示が出された。ピーター・ベルグソンは脱走兵としてハデラで拘留中である……」。彼らは我々の軍に包囲され、逃亡もなく、行動はできる限り流血がない様な形で行われた。……いずれにせよまだ船の問題が残っており、船こそ根本的な事である [3: 179~180]。

本質的に二つの提案があった。交渉の為の二、三人の委員会。対する提案は——船を政府に引き渡すよう彼らに要求し……必要なら——力も行使するというものである。私は提案を付け加える。この行為「アルタレナ号事件の様な合意違反の行為」の後エツェルとのいかなる合意ももはや存在せず、エツェ

ルには他の人々に適用されるのと同じ全ての法が適用され、特別司令部が存在しない故に特別部隊も存在しない、というものだ。というのも彼らは自分達の言質を守らなかったからだ [3:180]。

グリュンバウム ……船に関して首相によって言われたのは、もし [船が] 逃げおおせるなら、我々はそれを止めないだろうという事だ [3:180]

ベングリオン 私が言ったのはこうだ。その船がテルアヴィヴから出ようとしている徴候があり、それに出る事を許して我々の船がそれを追跡するべきか、それとも出る事は許さず、政府が行動について決定した場合にはここでその行動をとるべきかという問題がある [と言ったのだ] [3:180]。

グリュンバウム その船がエレッツ・イスラエルの岸から遠ざかると仮定しよう——あなたは、我々が船に逃れる事を許さず、それを追跡して屈服させる事を提案しているのか? [3:180]

ベングリオン 勿論そうだ、そして私は船を指揮している人々を拘束する事も提案する [3:181]。

シャピラ 私は [閣議の] テーブルの周りを支配している楽観主義には加わらない。クファル・ヴィトキンで二、三人の人々を屈服させればそれで事は片付くと考えるのは間違いだ。他方では、最後まで戦争する事を今要求する様な人々がいると私は確信する。彼らは戦う事を知っておりこの事を証明した、地下における戦争なら尚更の事だ。それ故我々は、我々自身を早くも勝者として見てはならない [3:181]。

[A)] 私はイシューヴにおける平和構築の為に、状況を前の状態に戻す委員会を選出する事を提案する。B) その船がこの地の海岸から出航したいなら——出航する事を許す事を提案する。その武器を理由に我々が船を捕えろとすれば——我々はその武器をベルナドットに引き渡す必要があろう。……我々はエレッツ・イスラエルに武器を入れる事によって停戦を破る可能性を彼らに与えてはならない。しかし彼らが去る用意があるなら——何故我々は彼らを

追わねばならないのだろう？ それにどんな論理があるのか？ [3：181]

ベングリオン 三つの提案がある。A) いかなる決議もとらない、B) 委員会、C) 船を国家当局に引き渡す事を要求する [3：181]。

シェルトク 武器の扱いに関する国連の人々への我々の提案がどのようなものになるかを、話し合う必要があるだろう [3：181]。

ベントヴ その反乱の結論の問題もあろう [3：181]。

ベングリオン 船が去る場合には去る事を許すという提案があるが——これは行きすぎた提案だ。しかし船がエレッツ・イスラエルの領海を去らず、カエサリヤかクファル・ヴィトキンに行って武器を降ろしたいとすると——その時はどうする？ [3：181～182]

シャピラ 我々は武器を降ろす事を彼らに許さないだろう！ [3：182]

グリェンバウム もし船がエレッツ・イスラエルの海岸から出航し、自分の方から入植地に接近するいかなる試みもないなら——それを放っておいて去るに任せる事を私は提案する。もし〔船が〕接近しようとするなら——その場合はクファル・ヴィトキンにいた、その同じ人々として扱われねばならない [3：182]。

ベングリオン 私はあなたの提案の後半部分における軍事的意味がどのようなものを明確にしたい。あなたが説明する通りだと——その事は我々に、専らこの船に向けて準備された我々の武装船を増強し、全ての海岸線に沿って小さからぬ軍勢力を維持する事を余儀なくさせる。つまり我々の全海軍力と、陸軍の大きな部分の連携だ [3：182]。

グリェンバウム氏は、船が〔公〕海域に出ているという情報を我々が得た場合——我々は介入しないと提案している。シャピラ氏はこの文言に賛同するか？ [3：182]

シャピラ はい [3：182]。

ベングリオン [A)] まず委員会の選出提案について投票しよう。この委員会

はエツェルとの紛争の件を扱い、その結論を政府の承認に持ち込む事になる [3:182]。

6:4の多数派で、エツェルとの交渉の為の委員会を選出するという提案を斥ける [3:182]。

B) グリュンバウム＝シャピラ案は、船が〔公〕海域に去る場合は——介入しないが、それがある場所から別の場所へ移動する場合は——それに対抗して行動するというものだ。オルタナティブの提案は、政府に引き渡される事を船に要求するというものだ [3:182]。

フィシュマン 投票を分けるようお願いする [3:183]。

7:3の多数派で、国家当局に引き渡されるよう船に要求する事を決定する [3:183]。

フィシュマン それで、船が逃れた場合はどうなるか？ [3:183]

ツイスリング 領海の範囲から遠ざかる意図について、船から通告を受け取った時には——我々はその事について話し合おう [3:183]。

グリュンバウム 我々は彼らに屈服を要求するという決議を採択した。もしこれに対する回答として、船はエレッツ・イスラエルの領域を去り、我々の許可なく戻らないという通告が来るならば——この事の中に屈服の形〔表れ〕を見る事を提案する [3:183]。

シャピラ 我々が我々の手に受け取るであろう武器の判断はどうなるか——我々はそれを国連に引き渡す必要があるだろうか？ [3:183]

シェルトク 監視者〔ボンデ大佐〕への手紙で私はこう書いた。我々は状況を支配下においた後、武器についてはどうするか提案に移るでしょうと。私は

次の様に提案するつもりでいる。武器は船内に残されるだろう。・・・船はこの地の海岸の一定の場所に停泊し、武器は停戦期間中ずっと国連の連絡将校の一人の恒常的監視下に置かれるだろうと。つまり停戦終了と共に我々はそれを降ろす事ができる。停戦終了と共にその船がすぐに爆撃の標的と化するという考慮に私は目をつぶるわけではない。しかし私にはこれが、我々が国連に提案できる、武器を最終的に我々の権限内に受け取る見込みを最大限に守る唯一の措置である様に思われる [3:183]。

ベングリオン　・・・グリュンバウム氏によって支持されたツイスリング氏の動議と、ラビ・フィシュマンの提案がある。票決しよう [3:183~184]。

全員対一人（ラビ・フィシュマン）により、もし船の所有者たちがこの地の領域から出て〔政府の〕同意なく帰る事はないと提案するなら——政府はその事について話し合うだろう、と決定する [3:184]。

ベングリオン　私は、我々が採択した決定〔の内容〕が何かをはっきりさせたい。我々は彼らに船を引き渡すよう要求する事を決定した。彼らが同意しなければ——その決議が意味するのは、私が理解したところによると、クファール・ヴィトキン〔既出〕におけるのと同様に力を行行使する——〔つまり〕彼らが屈服せざるを得ない様な力で彼らを包囲する必要があるという事だ。彼らが我々に向かって、この地の海岸から船を去らせると知らせてきた場合には——政府はその事について話し合い、彼らに回答を与えるだろう。私は次の事が決定の意味するところである事についてはご異存ないものと想定する。〔すなわち〕流血なく船を捕える事ができる為に全ての事をする。だがもし他の方法がなければ——力を行行使する [3:184]。

ベントヴ　多分シェルトク氏は法的解釈の点では正しい。だが彼の提案している事は妥協にはかならない。私はもっと進んでこう要求する事を提案したい。

武器を〔船から〕降ろし、その武器は倉庫内に彼ら〔国連側〕の警備下に預けられる様にと。彼ら〔国連側〕が同意しないなら、我々は武器は船内に置くという事で妥協できるだろう〔3：184〕。

〔次の事を〕決定する 国連との交渉で、武器を停戦終了まで国連監視下に置く為に陸に降ろす事を要求する。もし彼らが同意しなかったら、我々は武器を、この地の海岸に停泊するであろう船の中に、国連の監視下に停戦終了まで残す事に同意するだろう〔3：184〕。

シャピラ 私は政府の名でその様な事についての決定がない限り、いかなる逮捕もなされないだろうと理解している。彼らの指導部の逮捕は政府の特別な決定を要する〔3：184～185〕。

ベントヴ 前回、国の法律に従って行動するという明示的な決定が採択され、これらの人々を逮捕状態におく事を禁じる国の法律はない。もしこれが法に沿っているなら——彼らを逮捕するだろうし、これが法に沿っていなければ——逮捕しないだろうという事だ〔3：185〕。

グリュンバウム 屈服後につくり出されるであろう状況の結果については——もし屈服があるとしたら——我々が特別に話し合う事を提案する。これは逮捕の問題だけではない。彼らの部隊を解散させるか解散させないかの問題もある〔3：185〕。

ベングリオン この提案を支持する〔3：185〕。

ローゼンブルート 私はテルアヴィヴでの死者の大衆的葬儀を防ぐ必要があると思う。大衆的葬儀はデモと化す恐れがあり、そうした事と結び付いた全ての否定的結果を伴う〔3：185〕。

ベングリオン A) ローゼンブルート氏は正しいと私には思われる。クファール・ヴィトキンで斃れた人々は、我々の側でも彼らの側でも、現地に埋葬され

ねばならない [3: 185]。

B) グリュンバウム氏の提案がある。[それは] 事が起こって船が我々の手に引き渡され、紛争に片が付けられたなら——政府は次のステップについて話し合うだろうというものだ。この提案に反対はないものと私は理解している [3: 185]。

シェルトク メリドールが船内にいなかった事が明らかになった後では、ベギンが船内にいるか私は疑わしく思う [3: 185]。

政府はクファル・ヴィトキンにおけるエツェルの屈服後つくり出された状況について、次回会合で話し合う事を決定する [3: 185]。

ベングリオン 諸措置全般について。昨日車両の掠奪があった。[出される] 命令はテルアヴィヴにおける集会、摩擦につながりそうなあらゆる状態、そして勿論、掠奪のあらゆる試みを防止せよというものになるだろう [3: 186]。

半頁削除

閉会 [3: 186]

(3) 1948年6月23日 暫定政府の臨時会合（欠席者：レヴィン [エルサレム]、レメズ [外国]）

① 国家評議会のセッションの運営手順

ベングリオン 評議会の規程に従えば、議長が一つ一つの項目における議論の時間を定める。今日は一つの項目しか議題に上がっていないので時間制限の問題はない。にもかかわらず私は、演説者一人一人について15分と設定する事を提案したい [3: 188]。

ローゼンブルート 政府の名で話すであろう政府メンバーには、いつでも発言する資格が与えられねばならない [3: 188]。

シャピラ 私は、一人一人が自らの名で話すだろうと考えている [3: 188]。

ローゼンブルート 自らの名で話すであろう政府メンバーは、演説者リストに記載されねばならない [3:188]。

ベングリオン 私はその件 [アルタレナ号事件の顛末] を報告するつもりだが、これは長くて10分だろう。政府の立場を擁護したい者はこれをする事ができるだろう。政府のメンバーたちは評議会メンバーとしても発言できる [3:188]。

シャピラ 政府のメンバーが政府の立場に反する発言をしたい場合はどうか? [3:188]

ベングリオン ユダヤ機関にはこういう慣行があった。特別な場合に、メンバーがユダヤ機関の立場に反する発言ができるという明示的な決定が採択されたというものだ。私の意見ではこの慣行が政府にも適用されねばならない [3:188]。

ツイスリング 今回は、政府のメンバーたちに政府の立場に反する発言もできる自由を与えねばならない、というのが私の意見だ [3:188]。

ベングリオン この場合には私も同意する。一般的には、政府メンバーはその旨について明示的な決定がある場合のみ政府の立場に反する発言ができるであろう、と定めねばならない [3:189]。[以下余白]

② エツェルとの事件の事後の状況

フィシュマン 昨日、人を逮捕しないという政府における決定があったが、あなた方はこの決定に違反した。イシューヴにいずれにせよ存在する怒りを強める権限は全くなかったはずだ。しかしなされた事がなされた以上、今、空気を静める為に私は政府のメンバーの集団の名で要求する。全ての議論や明確化の前に、逮捕された者全員を釈放せよという命令を直ちに出す事を [3:190]。

シェルトク 人々を逮捕してはならぬといういかなる決定も採択されなかった事を私はしっかり確認したい。逮捕する様といういかなる決定も採択されなかったが、逮捕してはならぬといういかなる決定も採択されなかったのだ。こ

の様な決定が提案されていたら私はそれに反対票を投じていただろう。逮捕してはならぬとは誰も提案せず、この様な提案は聞かれなかった。確かに私はベギンを逮捕するよう提案した（ローゼンブルート氏が私の全ての提案を支持すると言った時、彼はこの提案をも支持していると私は理解した）。それからこれに反対して発言した同僚たちがいた。これがあった事の全てだ。いかなる決議も採択されなかった。ベギンを逮捕するという私の提案は票決には全くかけられなかったし、この様な決定が採択される事を私は要求しないが、逮捕を全く行ってはならぬという決定も採択されなかったのだ [3：190]。

シャピラ 我々は逮捕の問題についてはもう一度話し合おうと言った。我々にとっては、政府が会合するまではいかなる新しい事も起こらないだろうという事は明らかだった。そうこうする間に大変深刻な事態が起こった。それらが深刻であるのは何よりもまず、その様な事についての決定がなかったのに、誰かが人々を逮捕する権限を自分のものにしてしまったからだ。第二に、逮捕の仕方故である。[彼らが]「ゼエヴの砦」[צוקת זאב, メツダト・ゼエヴ]¹⁰を襲撃し、威嚇の爆弾を使い、船から降りた人々のうち60人を逮捕したという証言がある。私は聞く。誰が、政府決定なしに人々を逮捕する許可を警察や軍に与えたのか？ 昨日私は政府のあるメンバーとの協議の後、彼らを移民として扱う様という指示を与えた。・・・誰がその後彼らをこんな形で逮捕する命令を出したのか？ [3：190～191]

私は拘禁されている全ての人を直ちに釈放せよというラビ・フィシュマンの提案を支持する。我々はこの町[テルアヴィヴ]で多大な流血に直面している。しかもエルサレムとネタニヤで今日何が起こるか分からないのだ。この地の多くの場所から大変深刻な反響がある。私は、もしテルアヴィヴの中心で船を武器で爆撃し真夜中に二万人を退去させるというこの事が正しかったなら、もしその船に対処する為に我々がこうせねばならなかったのなら、起こった事について述べはしない。或いは我々にこの災いを免れさせたであろう他の提案

を採択すべきだったなどと述べはしない。だが合法的でない、ユダヤ的でない事がなされた——人々を襲撃して彼らを逮捕した。お聞きしたい。法相はこれについて知っていたのかどうか？ お聞きしたい。警察相はこれについて知っていたのかどうか？ 誰が政府の許可なく人々を逮捕する指示を与えているのか？ 特に、これは人々の逮捕の問題というだけではない——これは大変デリケートな政治問題でもある。既に少なからぬ死者と約50人の負傷者が出ている。・・・政府の同僚たちの意見を聞く事なくこの様なステップをどうやってとれるのか？！ [3:191]

ツイスリング [一段落省略3:191] この件については票決がなかったと記憶する。シャピラ氏が言及した先の件についても票決はなかった。逮捕してはならぬという決定も採択されなかった。その上前の会合では、イスラエルに現にある法に従って彼らに対抗する行動をとるという決定があった。(フィシュマン イスラエルに、などと言うな——ゴイーム [異教徒] の中に、と言え！ ツイスリング これは失礼、ラビ・フィシュマン、だがイスラエルの法では我々も権威を認められた教師 [מורה הוראה, モレー・ホラアー¹¹] なのだ。) それだけではない。クファル・ヴィトキンで起きた事について我々に対してなされた報告の中で、司令官メリドールが逮捕された事がとりわけ言われていたが——同じ会合で誰もこれに抗議しなかった [3:191~192]。

ラビ・フィシュマンとシャピラ氏へ一言。政府の法は「悪法でも」法だが、イスラエルの法は法ではないと。これはどういうわけか？ 私は逮捕の詳細を正確には知らないし、それらの逮捕が合法的でなかった事が判明すれば——その事は修正を要する。しかしこうした全てにもかかわらず、ラビ・フィシュマンとシャピラ氏がイスラエル国民 [עם ישראל] にとって基本的な利益が危険にさらされている事実をここで持ち出さず、体制の権威への侵害の事実を持ち出さず・・・彼らがいかにしてその船から海岸や人々を攻撃し、いかにして人々の命を危険にさらし、いかにしてテルアヴィヴに侵入しようとしたかを語らな

い事がいかにして可能なかを理解するのは難しい。イスラエル国家の法も尊重する必要のある法だ！・・・[3：192]

ベングリオン イスラエルの全ユダヤ人に等しい裁きがあるのか、それともベギンと彼のテロリストたちが誰かに対して手を上げたら——彼らに屈服せざるを得ないのか、これは基本的な問題だ [3：192]。

拘禁されている人々の中に移民がいる可能性があるため——私は提案する。クファル・ヴィトキンであれここであれ拘禁されている全ての移民は、たとえその者の逮捕に十分な理由があったとしても——釈放される様に、という命令を出す事を [3：192]。

グリュンバウム 私はシャピラ氏の質問に対する答えを聞かなかった。私にとっては問題は、誰がこの事をしたのか、一般警察か軍警察かというものだ。軍警察は軍の人々に対してのみ支配権を持つ。だがこの場合は逮捕されているのは軍の人々ではない。何故一般警察によって逮捕されなかったかと問う事も可能だ。これは重要な問題である。なぜなら軍警察が全てに於て支配するという慣行が、我々のもとで支配的になる恐れもあるからだ [3：192]。

ベングリオン 警察は今のところ軍の一部で武装兵力の一部だ。まだその領域はそんなに定義されていない。我々は非常時にあり諸事項は圧力からなされており、法学的観点からは非常に多くの事が疑わしいだろう。事柄はそうあった事実通りに見なければならない。武器を運ぶ許可を持たぬ人々の兵力によって軍の兵力と国の兵力を攻撃する試みがあり、これに対抗せよという命令が出された。私はラビ・フィシュマンのアプローチは理解する——これは政治的アプローチだ。しかしこれが軍警察か一般警察だったかの検討を今、法の形式主義的アプローチから行うのは——問題の正鵠を得ていない。・・・昨日は〔事実として〕武装勢力があって活動していたのだ [3：193]。

グリュンバウム 逮捕された人々のステータスの問題がある。軍警察によって逮捕されたなら——彼らは捕虜の立場であり、一般警察によってなら——彼ら

を裁判にかけねばならない [3:193]。

ベングリオン 彼らは捕虜ではない、なぜなら戦闘員側ではないからだ [3:193]。

グリュンバウム もしそうなら彼らは裁判にかけられるだろう！ [3:193]

ベングリオン これについては話し合うだろうと昨日決定された [3:193]。

ベントヴ 私は非常時には権限にそんなに几帳面になる必要はない、という首相の立場を支持する気はない。だがこの場合は、法的観点からは全てがうまく行っている。私は前々回の会合で、国防相に国の法に沿って本件を扱うよう課す事を提案し [6月20日, 3:147], その様にする権限が彼に与えられた。逮捕の件が対処の範囲を超えたか否か今議論する事はできる。その上昨日の会合で逮捕されている人々の問題が提起された時、私はこういう趣旨の事を言った。国防相に国の法に沿ってこれらの事項を扱うよう課すという先立つ決定があり、この決定が生きているため、逮捕するか逮捕しないかを決める必要はない。その様な必要があれば——逮捕するだろうし、必要がなければ——逮捕しないだろうと [3:185のベントヴ発言を参照]¹² [3:193~194]。

ベングリオン それらについて異議を唱える人のある事項は速記録で吟味され、間違いがなされたと判明すれば——訂正されるだろう [3:194]。

被拘禁者に関しては二つの提案があった。ラビ・フィシュマンの提案は——昨日と今朝逮捕された被拘禁者全員を釈放する命令を出すというものだ。移民全員を、その様な人々が被拘禁者の中にいる限りに於て、彼らが拘禁された理由を考慮する事なく釈放するという提案もある [3:192のベングリオン自身の提案を参照] [3:194]。

ベントヴ 二番目の提案に修正。釈放し、よい行動についての言質を要求する [3:194]。

フィシュマン 私は私の提案を説明したい。私はあなた方の所に広いカハル [共同体] の名で来たのであり、今日流血があり政府がその様な事を引き起こ

す者になるだろうと警告する。・・・私は言った。エツェル側で大きな罪が犯されたが、政府によっても間違いがなされた。・・・私はあなた方に報告する。シャピラ氏と私は五万人の行進を今さっき防いだと。我々がその事に介入しなければ——今頃五万人がトーラーの本を片手に町〔テルアヴィヴ〕の街頭に繰り出していただろう。我々は昨日から今日までの間に逮捕された全ての人々を直ちに釈放せよという命令を出す事によって以外、空気を少しでも静める方法は他にないと思う。〔あなた方が〕この様な命令を出さなければ——結果への責任はあなた方にかかるだろう。私は、その発足後最初の一か月間に既にユダヤ人によるユダヤ人の流血が起きているところの政府に参加する事に同意しない。この命令が出されなければ——私は政府を辞任する [3: 194]。

ローゼンブルート 何故〔彼らは〕その人々を逮捕したのか？ [3: 195]

ベングリオン これらの人々は確かに武器で襲撃したのであり、その咎で逮捕されたのだ [3: 195]。

シャピラ 今朝そこで逮捕が行われた「ゼエヴの砦」には、武器で襲撃した人々の一部がいたのみならず——昨夜北から逃げて来たその町〔テルアヴィヴ〕の住民も大勢おり、実際彼らが証人だった。・・・ [3: 195]

カプラン 私の提案は政府が明日、釈放について話し合うというものだ。誰がどの様に逮捕されたのかについての完全な報告書が受け取られた後に [3: 195]。

シトリト A) 一般警察は何も知らなかった [3: 195]。

B) 私は移民に関する二番目の提案 [3: 194 のベングリオン発言を参照] を支持する [3: 195]。

C) 武器を携行していた人々を、武器を携行していなかった人々から区別する必要がある——後者を釈放する事を私は提案する [3: 195]。

グリュンバウム 私は法的判事を任命する事を提案する。この者が被拘禁者に対する告発の明確化に直ちに着手し、人々を、武器による反乱の告発が当ては

まらないと認める場合は釈放する権限も持ち、そして何よりもまず被拘禁者の中にいる移民を、首相の提案の様に釈放するだろう。我々は法相に、首相と共にその取り調べ判事を任命するようお願いするだろう [3: 195]。

シェルトク 私が受け入れるグリェンバウム氏の提案への付加だ。私は提案する。何よりもまず新規移民と分かっている人々を、彼らに対する何らかの告発がある場合以外釈放すること。第二に、武器がないのに捕まったとか彼らに対する何らかの告発がない全ての人々を、彼らがたとえ移民でなくても直ちに釈放すること。彼らに対する何らかの告発がある人々は——取り調べ判事に引き渡すこと [3: 195~196]。

ベングリオン 問題は、罪ある人と罪のない人をいかに見分けるかだ [3: 196]。

カプラン グリェンバウム氏の提案を支持する [3: 196]。

シャピラ ここではあれこれの詳細が問題なのではない。問題は全く異なる。政府が沈静化の為のステップをとる用意があるか用意がないかという事だ。我々はこの地で我々が再び流血に直面しているという信憑性の高い情報を持っている。・・・私はユダヤ人の財産を掠奪しないであろう我々の軍を制するのが我々にとっていかに「易しい」か知っている。我々は正に自分達の手で政府とこの地のユダヤ人支配を破壊しているのではないかという大きな恐れを抱くのである。今回その船の司令官が恰も犯罪者の様に逮捕された——彼は「不法」移民をこの地に連れて来て武器を持ち込んだ [だけだ]。しかも政府はこの武器について交渉を行っていた！ [3: 196]

ベングリオン 我々は昨日からの決定に抗議する事はできないだろう。政府はあなたの立場を受け入れなかった。それが政府の立場であり、あなたはあなたの意見に反して採択された決定を尊重せねばならず、議論してはならない [3: 196]。

シャピラ 我々の提案は現在イシューヴにある狂乱状態をやめさせるというも

のであり、国を破壊するであろう流血につながらぬよう、社会を鎮静化する道を探ろう——我々は破壊の淵に立っている [3：196]。

私は被拘禁者全員を釈放するよう提案する。もし釈放されなければ——私は責任を負う事をやめざるを得ないだろうとお知らせしておく [3：196]。

グリュンバウム 恐らく我々全員が、三人の閣僚から成る委員会を選出する事に同意するだろう。その委員会が沈静化と恩赦の条件を保証するだろう [3：197]。

ベングリオン 私はこの案を心から支持する [3：197]。

昨日と今日逮捕された全員を釈放するというラビ・フィシュマンの提案がある。これに対して私の提案とグリュンバウム氏の提案があるが、それはすぐに取り調べ判事を任命して、彼が被拘禁者の中にいる移民全員と、武器を携行していて捕まったわけではない人々全員を、彼らに対する重大な告発がある場合を除いて釈放する権限を持つ様にする、というものだ [3：197]。

シトリト 移民を釈放し、武器を携行していて捕まったわけではない人々を釈放し、武器を携行していて捕まった人々については——彼らの告発内容を明らかにするよう提案する [3：197]。

ラビ・Y. L. フィシュマンの提案に賛成——4人の閣僚が投票

Y. グリュンバウムの修正された提案に賛成——7人の閣僚が投票 [3：197]

フィシュマン 宣言だ。大変悲しい事に私はこの政府の将来を悲観する。私の意見では、本件に於て罪のある政府内の全ての人は辞任せねばならない。私はいずれにせよ責任を持たないだろうし、政府からの私の辞任について宣言する [3：197]。

ベングリオン ……今、昨日あった問題と完全には同等視できない別の問題が喚起されている。今あるのは評価が易しい問題だ。釈放するか釈放しないか

だ。私はあなたに反対と怒りがたまっている事は理解できる。だがもし我々が昨日と一昨日直面していた難しい問題に於て多数決で決定できたのだったら——あれこれの者を釈放するのか全員釈放するのかという問題に於て我々が多数決で「あなたの思い通りに」決定できないからと言って政府を揺るがせねばならない「というのはおかしいではないか」？！ それには全く根拠がない。・・・あなたはこういう事も考慮せねばならない。シャピラ氏が今日流血があったと言うのなら、誰の側の事なのか私は知らないが（シャピラ エツェルの側だ！）——ラビ・フィシュマンのこの様なステップは、彼にそういう意図がなくてもその件を些か煽る恐れがある。我々は昨日クファル・ヴィトキンで起こった事の後につくり出された状況についてもう一度話し合おうという決定を採択した。あなたが最も気高い動機から今とっている、又とるであろうこのステップは逆の結果につながる恐れがある。だから待ってくれ。我々は評議會の後もう一度状況について話し合おう、我々が何らかの道を見出しても見出さなくても。我々がそれらの上に橋を架けられない様な鋭い意見の違いがあらわになるなら——あなたのそのステップは理解されよう。[だが] 今の時点ではこれには全く論理性がない [3: 197~198]。

フィシュマン 首相としてあなたは、十人の無実の人々を逮捕するより百人の犯罪者を釈放する方がましだと知るべきだ。信用して貰ってよいが、もし待っていていられたら——私は待っていた [3: 198]。

グリェンバウム あなたの宣言は政治的宣言だ。本当のところそれは国防相・首相への不信任の表明を意味する。私とて全てが法に沿って行われたとは思っていない。私の意見では一般警察は初めからその事件を知っていなければならなかったが、これは別の問題だ。・・・もし私が希望する様に委員会の提案が採択されたら——社会は、我々がある条件の下で恩赦を行う用意があると知るだろう。勿論それらの条件を我々が見出さない事もあり得る。しかしもしここで委員会を任命するという決定が採択されたとしたら、その事は恩赦の問題を

明らかにする用意がある事を意味する。それに恩赦は釈放よりずっとよい [3 : 198~199]。

フィシュマン お話は承った——遺憾ながら私の辞任は撤回できない。私が今まで負ってきたこの責任は私の力を超えていた [3 : 199]。

ベングリオン 私はラビ・フィシュマンの宣言の中に不信任の表明を見ていない。ほんの僅か前に私は逮捕についての明確な報告を聞いたし、今国家評議会セッションの前でなければ我々はその件を明確化していただろう。なされてはいけない行為がなされたのかも知れない。こういう時勢にはこういう行為が起こり得る。[彼らは] 度を越した事もあり得るから、もし度を越していたら——その件を調査し、必要な所は修正せねばならない [3 : 199]。

(ラビ・Y. L. フィシュマンと M. シャピラ大臣が会合を去る)

シェルトク 追加の提案だ。武器を携行していて捕まった人々は——保釈とする [3 : 199]。

カプラン それは取り調べ判事が告訴を受け取った後に行うだろう [3 : 199]。

グリュンバウム [私は] 三人のメンバーを持つ委員会の選出を提案する。その委員会は政府に、全事項の解決の為の提案と、恩赦の諸条件についての提案も持って来るだろう [3 : 199]。

ツイスリング 我々は、我々の監獄を被拘禁者で一杯にする事に関心はない。しかし政府は武器の解体の保証、[及び] 軍内にエツェルの組織化された勢力が存在しない事の保証を要求せねばならない。そしてこの土台の上のみに——罪の許しがある [3 : 199~200]。

ベングリオン その提案は我々がここで決定を採択するだろうという事ではない。提案は委員会の選出のみで、委員会の任務には、全員を束縛する一つの軍と一つの法がある様な解決を保証する事、そしてこれと共に——過去の罪に対する恩赦がある。これこそが意図するところだ [3 : 200]。

カプラン 私は本件の為には恩赦という言葉を使わず、本件の清算の為の提案

を持って来るよう委員会に課す、という言い方にする事をアドバイスしたい
[3:200]。

ベングリオン 恩赦の定義こそびったりだ。その意味はよくない行為がなされたという事だから [3:200]。

6:3の多数派により閣僚委員会を選出する事を決定する。その委員会は国家における法と秩序の維持、軍の一体性の保証、犯罪者たちへの恩赦の付与の為の諸条件の創出を保証するであろう [3:200]。

グリュンバウム 法相、内相、国防相の三閣僚を委員とする委員会を提案する
[3:200]。

ベングリオン その様な委員会なら進んで参加したいが、私は任命される事はできないだろう [3:200]。

ツィスリング 首相に対しては、例外的にこうしたら如何かと提案したい。全会合に参加する義務はないが、彼の名で行動するであろう代理を送る事ができるとか [3:200]。

ベントヴ 五閣僚を委員とする委員会を提案する——グリュンバウム氏が提案したメンバーに、M. シャピラとA. ツィスリングの両大臣を加えた構成で
[3:201]。

グリュンバウム 私は私の提案を主張する [3:201]。

三人委員会に賛成——3人 五人委員会に賛成——4人

カプラン 二回目の投票を提案する [3:201]。

五人委員会に賛成——4人 三人委員会に賛成——4人

ベングリオン 私は三人〔委員会〕の方に投票する [3:201]。

二回目の票決で5:4の多数派により、国防相、法相、内相の三人を委員とする委員会を選出する事を決定する [3:201]。 [閉会]

(4) 1948年6月27日（欠席者：フィシュマン〔辞任〕、レメズ〔外国〕、シトリト）

① 質疑応答

ベングリオン 幾つかの質疑に対しては私が回答を用意している。質疑の一部については私は回答を用意していない、なぜなら私はその件の関係者たちを捕まえる事に成功せず、彼らの一部については参謀本部がまだ調査中だからである [4:2]。

私は参謀本部に、何故パルマツハの諸部隊が彼らの武器を持ってエルサレム近郊から下ったのか、そして誰の命令で、という質問への答えを要請した¹³。私は作戦部長から次の様な回答を受け取った。パルマツハの人々は作戦部の命令に従って、援護用武器は持たず彼らの個人的武器だけを持って下った。私がその命令を変えるよう提案した時には既に遅く、人々は下ってしまっていた。彼らの場所はエルサレム隊と治安部隊によって掌握された、と [4:2]。

彼らの武器を持ってであれ持たなかったのであれエルサレム近郊から更なる兵力は下らされたのか、という質問がなされた。回答は次の様であった。エルサレム司令官に南部から貸していた師団以外、更なる兵力は下らされなかった。そしてそれは命令に反してテルアヴィヴに下ったのである [4:2]。

5 行削除

エルサレムへ送られた食糧は、軍と、その〔エルサレムの〕住民の間でどの様に分けられているのか？¹⁴——参謀本部はその様な事について答えるべき事を知らない。その事はエルサレムで調査せねばならない。私はこれをする事に

成功しなかった、というのもネゲヴから私に届いた心配な情報の故に私はエルサレム訪問を短く切り上げたからだ [4:2]。 **25行削除 [4:2~3]**

ローゼンブルート 首相は最近、ラビ・フィシュマンの辞任の理由についての情報が新聞に載ったのをご存じだろうか。それら [の情報] によれば、彼の辞任の根本的理由の一つは私との意見の違いにあるそうだと。記者団との会話で彼は私を侮辱的な形で攻撃したが、主にその事は今日「ボーケル」紙に掲載された会話に於て顕著である。私は同紙に書かれている事の一部を読み上げよう [4:3]。

「この政府によってなされた最も重大な誤りの一つは——とラビ・フィシュマンは語った——[政府が] 政府における最も重要な任務を、私の明らかな知識によればこの任務に全然ふさわしくない人物に与える事を正しいと見なした、この事であった。私が言わんとするのは法相の事である。・・・正に私はイスラエル国家は伝統的なヘブライ法¹⁵に立脚せねばならぬという認識に浸っており、それ故に私の見解は、法務省のトップに、ヘブライ法を決定的なまでに知らず法全般についての専門知識も疑わしい人物を据えるのは正しくなかった、というものである [4:3]。

「イスラエル政府における閣僚ポストの割り当ての前に私は、法相ポストはヘブライ法についての、深くなくても少なくとも広い知識を持つ人物に与えられる事を要求していた。それにふさわしい人物を選ぶ事に関して交渉が行われたが最終決定には至らず、私がエルサレム滞在の故に政府会合を欠席した時、政府は法相ポストをローゼンブルート氏に与える事を決定したのである。私の意見では彼は、マバイに近い「新しいアリヤー」[העלייה החדשה]¹⁶に所属している事以外、このポストに対するいかなる資格も持っていない [4:3~4]。

「ラビ法廷¹⁷は——[権利を] 剥奪されている。私はその歪みを正そうとし、それ故少なくとも法律局の局長ポストにはヘブライ法に精通している人物が任命されるよう提案した。イスラエル国家とその政府の樹立の日から今日まで私

が私のこの要求を繰り返さずに過ぎた日は一日もないが、大変遺憾ながらこの課題について私は一步も前へ進まず、法相の特別なる頑迷さはヘブライ法に関するあらゆる事項に於て障害物をおく事につながった [4:4]。

「私は非常に際立つ事実をここで社会の前に持って来る事を私の義務の一つと見ている。委任統治政府は全ての年月の間にラビの権利を奪い、ラビ法廷をムスリム法廷のそれより低い地位に置いた [4:4]。

「私はラビ法廷への差別に終止符を打つよう要求し、要請し、懇願した。・・・ユダヤ教徒の観点からすると、ラビ法廷に対してはムスリム法廷に対するよりも多くの権利を与える必要があると私は考えていたし、今も考えているが、今のところは現にある差別の撤廃を要求する事で満足していた。[しかし] 法相はこの要求に応えず、その歪みを正す事を拒否し続けている [4:4]。

「邪まな委任統治政府はラビ法廷とラビたち自身 [の権利] をさんざん奪っていたが、イスラエル国家に於てはこの種の、又それに似た差別の継続の余地が全くない事は明らかである」 [4:4]。

政府はこの件について行われていた交渉について報告を受ける事に関心があるだろうか？ [4:5]

私はこの記事とそれが書かれたトーンに大変傷ついたが、これがラビ・フィシュマンの言葉を正確に伝えているかどうかは知らない。いずれにせよここには、ラビ・フィシュマンの物の見方という観点からすると必然的な攻撃と主張があるのみならず、単なる侮辱がある [4:5]。

ベングリオン 私はラビ・フィシュマンが、「ボーケル」紙の中で彼が言っているとされている言葉を言ったのかどうかは知らない。しかしここで言及された諸事項の一部は、私がラビ・フィシュマンとの、及び P. ローゼンブルートとの話の中で扱った事がある [4:5]。

A) 法務省の件について。私が持った会話ではローゼンブルートが法相にな

る事については何の抗議もなかったが、同省では法全般とヘブライ法に精通した人物が助手の一人にならねばならないという主張はあった。私はこの件について P. ローゼンブルートと話をしたが彼はこれに同意し、従ってラビ・フィシュマンが提案した候補者たちについて同意し、ラビ・フィシュマンも満足してその事を受け入れた [4:5]。

B) ラビ法廷の件について。その問題はローゼンブルート氏が最高裁の件で導入した命令故に引き起こされた。そこには今のところ全ての法廷は現状のまま存在するとうたう条項があった。ラビ・フィシュマンはこの条項について抗議したが、その理由はその事が、法務省が恰もこの件についての要求がなかったかの様に今まで通りあり続ける事を意味するからというものだった。それは私にその件に立ち入りたいという関心を起こさせなかったが、この条項はその法の本質には不可欠ではない様に私には思われた。ラビ・フィシュマンとの、及びローゼンブルート氏との話の後この条項は削除されるだろうという事、かくして最高裁との関連ではその問題は喚起されないという事で合意された。その件自体について私は、その事は政府内での話し合いにかけられるが、その前にその事が提案を準備するであろう委員会での明確化に持ち込まれる事を提案した。この事もローゼンブルート氏とラビ・フィシュマンにとって受け入れられるものだった [4:5~6]。

C) 補給部門には、祈禱用ショールと聖句箱を持っていない全ての兵士は、靴とライフルを受け取る様にそれらを受け取る資格があるという指示が与えられた [4:6]。

コシエルの食堂の件については、私はハポエル・ハミズラヒ [既出] のその様な事の担当者と呼んだ。私は彼にこの任務を引き受けるよう頼んだ。・・・ [4:6]。

シャビラ 私が覚えている限りでは、パルマツハの件との関連で二つの質疑がなされた。その一つに於ては、パルマツハの人々がエルサレムから掠奪品を出

した故に道を閉鎖したと言われていた。この情報はエイタン氏がもたらし、ここで質疑の形で提起されたのである。（ベングリオン その事は政府の諸官庁の外から持ち込まれて私の知るところとなり、その同日に私は参謀本部に次の様な命令を与えた。その件を調査し、もしその事が正しいなら——彼らはその財産を軍の権限に引き渡さねばならないと。私はこの件についてまだ報告書を受け取っていない。）[4：6]

第二の質疑は、兵士たちが許可を得ずに武器を持ち出したという情報に関するものだった。ここではその事は許可を得てなされたという回答が与えられた[4：6]。

ベングリオン 個人的武器を人々は持って行った。援護用武器は残された。その事は作戦部の命令に従って行われた。確かに私は作戦部に、兵士は「エルサレムから」下らぬ様にとという指示を与えたが、その命令が来たのが遅かったのだ[4：6]。

シャピラ エルサレムでは去った兵士たちの場所の穴埋めや、彼らが持ち出した武器に関して何が行われたか？ 私が知る限りでは、パルマツハの人々がエルサレムにいた時も軍の人々の数は充分限られていた。この軍が町「エルサレム」から出されてしまったら、状況はもっと深刻になったはずだ[4：7]。

ベングリオン 私はエルサレムに関して定着した主張を皆さんの心から払拭しよう。エルサレムの件に関しては多くの混乱と無知がある。それ「エルサレム」はこの地の他のどの場所よりも兵力が枯渇していた——エルサレムの歴史と地理がその様な事の責めを負う「という混乱と無知である」。これに対してエルサレムであった程大きく重要な征服があった場所はこの地にはない。・・・私はいかにその事に我々が成功したかという事に喜び、驚いた。なぜならもし状況が逆で、エルサレムに我々の兵力の二倍のアラブ兵力があったとしても——彼らはこれらの場所を我々の手から征服する事に成功しなかっただろうからだ。シャイフ・ジャラーフの陥落故に些かその輝きを失ったこれらの征服

の価値は計り知れぬものだ。旧市街を除いてアラブ人をエルサレムに見出す事はできない。・・・私の手元には征服を強調する様々な色で塗られた地図がある。それらは、軍の手中にあり我々の手に移った地帯〔すなわち〕アラブの手中にあったが〔今は〕我々の手中にある地帯と、今はアラブの手中にある地帯を示している。私は征服地を訪ねた時、強く印象づけられた。これは歴史的価値を持つ強力な征服であり、それを遂行した人々は大きな歴史的権利を持つだろう。しかしこの事は我々がエルサレムで受けた激しい打撃によってかすんだ。〔その打撃とは〕35人が斃れた事¹⁸、ネビー・サムエル¹⁹〔アン＝ナビー・サムーイール、前篇参照〕、エツィオン・ブロック、旧市街である〔4：7〕。〔一段落省略4：7〕

シャピラ氏は質問した時、二つの事を混同した。エルサレム市とその周辺の戦略的高台である。エルサレムから兵力を出したのではなく、戦略的高台にあった兵力〔を出したの〕である。戦略的高台にあった諸部隊は死傷者を出す激しい損害を蒙り、多くは休養を必要とする衰弱した者たちである。私が戦略的高台を去らぬようにという命令を出した時、私は彼らをエルサレムに移し、快適な場所に収容して自由を与えるつもりだった。しかしその命令は着いたのが遅すぎた、というのは彼らは既にその場所を去っていたからだ。それらの戦略的高台はエルサレムの人々によって征服され、彼らの手中にある。もし我々が戦闘再開に直面したら、エルサレムにはそこに前にいた同じ兵力が再び上るであろう事は疑いない。エルサレムには外からの一部隊を上らせようとしているところだ、というのはエルサレムの人々は攻撃され、非常に意気消沈しているからである。それまでそこにおらず同じ苦しみを耐え忍んだわけではない部隊が町〔エルサレム〕に来れば——それは命の風を町〔エルサレム〕に入れるだろう〔4：8〕。

もし我々がエルサレムの町を失敗の町と見るなら、歴史的現実と我々の諸征服に対して不正義を行う事になる。これは我々がそれらの為に高い代価を払っ

た諸征服の町である。我々はそこで大きな諸征服を持ったのであり、多分それらは決定的な歴史的価値を持ち、エルサレムの相貌を完全に変えるだろう。私がカタモン²⁰の街路を歩き回り、旧市街からの巻き毛を垂らしたユダヤ人を見た時——これは偉大な光景だった [4: 8]。

門戸開放と共にエルサレムからの大衆の逃亡があるだろうという大きな恐れについては——エルサレムの人々は意見を異にしている。彼らはこの恐れには根拠がないと主張している。確かに人々は町〔エルサレム〕から転出するだろうが、行かねばならない人々とエルサレムの人々ではない人々のみである。・・・この推定が正しいかどうか分からないが、私にはそれは正しい様に思われる。（ツイスリング ヴァルハフティグ氏²¹が、1万5000人が町を去りたいと我々に報告した。）そんな事はばかげている。エルサレム〔緊急〕委員会〔前篇参照〕の中に、町を去りたい人々の登録の為の特別な事務所がある。事務所は通知を公示して住民の間に書類を配布したが、町を去りたい者がそれらに署名する。700人が登録され、彼らの構成がどの様なものであるかが私に報告された。私がエルサレムの人々とその事について話し合っていた時、オースター氏〔Daniel Auster, エルサレム緊急委員会のメンバー、〈前篇〉註89参照〕が数十人の人々が町からの退去願を持って自分の所へ来ている、と言った。彼はその人々の名前を聞かれ、これらは登録されていたのと同じ人々である事が判明した。オースター氏は300人が転出許可を受け取る為に列をなして待っているのを見たと言った。その事について〔彼らは〕彼に、この数は登録されている数の半分以上だと答えた。これらの事実から、恐れは大袈裟で、1万5000人というのは誇張された数字だと想定する根拠がある。私の質問に対しては、もし道が自由に開かれれば、転出者数は2000人に達しそうだという答えが返ってきた [4: 8~9]。

グリェンバウム ベングリオン氏がそれらについて話した諸征服は・・・包囲の初期だった。その後困難な日々が始まり、徐々に深刻化して遂にハダッサー

[病院]と、町から完全に切り離された[ヘブライ]大学の陥落、その後に旧市街の陥落という事態に我々は立ち至った。だから初期の征服は忘れ去られたのだ[4:9]。

私は町から出ている、或いは出たい人々の統計の問題全体は決定的ではなく重要ではないとコメントせねばならない。問題はエルサレムが切り離されて、それと国家の間の直接の橋がなくなるかどうかである。もしエルサレムがこの件においてアラブの善意に委ねられるなら——このヘブライ都市は足場を強化できないだろう。これこそ真実であり、残りの事柄は重要ではない[4:9]。

レヴィン 私はエルサレムから到着した誠実な人物から、昨日エルサレムにおける安息日の件で宗教的[に敬虔な]ユダヤ人[ユダヤ教徒]のデモがあったと聞いた。・・・[彼らは]全方面から彼らに発砲した。その事は多大なパニックを引き起こし、一人が負傷した。まだ私はその件について詳細を得ていないが、私は首相にこの件について何をご存じかをお聞きたい[4:9]。

ベングリオン ・・・私はあなたがここで提起した事を調査するだろう[4:9～10]。

シェルトク 「コル・イスラエル」²²の放送で、エルサレムのエピソードを伝えねばならない。船の件[アルタレナ号事件]とエルサレムの件[掠奪]という二つの件で暫定政府に対する悪意に満ちたプロパガンダがなされている。・・・このプロパガンダは政府への信頼の土台を浸食している。・・・私はその任務を行った者、できればエルサレム司令官が彼の副官の一人による、権威ある重要な放送が不可欠だと考える。・・・[4:10]

* * [この印は原文通り]

② 概観

シェルトク 私はこの地の内部の出来事の全体的な印象について、ワシントンにおける我々の代表から短い報告書を受け取った事を指摘せねばならない。彼は次の様に指摘する。一般世論とユダヤ人世論は、その大多数がこの危機の間

中、[イスラエル暫定] 政府と政府がとった手段を支持していた。特にワシントンでは、[暫定] 政府の強力で迅速な対応が合衆国政府から見て、また主要な外国公使館から見てそれ「暫定政府」の株を上げた「威信を高めた」、と[4:10]。

この地における武器搭載船に関する事柄の展開について。金曜日にベルナドットとの連絡役を務めるテルアヴィヴの特使からの手紙²³が受け取られた。その手紙のトーンは非礼だった。A) 彼はクファル・ヴィトキンとテルアヴィヴの衝撃的な出来事の件を、我々が停戦を破ったとアラブが主張するこの地の様々な場所での一連の些細なケースと混同していた。B) 彼は我々がとった行動は、我々が取るべきだったその様なものとして提示している。しかし「彼の議論の」本質はこの事の中に停戦違反があった恐れがあるというものだ、というのも人々がこの地に移住し武器が移入されたからである。彼は、人々はどこか武器はどこかと問い、もし我々「暫定政府」がこの件で明確かつ「こちらを」満足させる情報を示さなければ仲介者は我々が停戦を破ったと安保理に知らせねばなくなるだろう、と我々に通告している。もう一つ起こったケースは手違いでなされた可能性もあるものだ。・・・クファル・ヴィトキンでの「軍事」行動の最中、「彼らは」国連の二人の人々に現場に近づく事を許可しなかった。この事が疑念を引き起こし、彼らの一人はクファル・ヴィトキン事件は陰謀に基づいて演出されたものだと言った。[但し] 私は他の連絡官たちの為にこう語っておかねばならない。もう一人の監視官とこの監視官の間には鋭い論争があり、その中で彼「もう一人の監視官」は、自分は真の戦闘と「やらせ」を区別する事を知っているがクファル・ヴィトキンでは真の戦闘が起きていた、と主張したそうである [4:10～11]。

私はその手紙に対してそれにふさわしい鋭さで答えた。ここで全ての詳細は報告しないが私はこう述べた。自らの国民に発砲し、自らの支持者たちの命を危険にさらし、自らにとって非常に必要であり停戦後の時期の為にそれを取っ

ておくという希望があった武器を犠牲にするまでに鋭い手段をとった政府は、充分やらなかったとそれを非難するいかなる法廷の前にも現れる用意がある、と [4: 11]。

移民に関しては、私はある説をとった。A) そこに移民がいたとしたら——彼らはその夜のうちに、我々の軍が行動を開始する前に [船から] 降りた。そして我々の軍は一定の準備に基づいて [軍事] 行動を開始したが、危険の本質は武器の持ち込みにあった。B) 我々の情報によるとクファル・ヴィトキンではいかなる武器も降ろされなかった。我々がエツェルの手中に見出した武器は彼らの個人的な武器であり、船でもたらされた全ての武器はその後火をつけられた [4: 11]。

私はロードス島から電報を受け取ったが・・・言葉の端々から私は、ベルナドットがここの特使の手紙から距離をおいて政府の立場への評価を表明したのだと理解している。私は非常に懸念したという事を指摘したい——ネゲヴで起こった事が起こった時——誰かがこれに飛びついてユダヤ人が [停戦に] 違反したからエジプトが違反したのだという人工的な同一視をつくり出すのではないかと。彼 [ベルナドット] はエジプトによって停戦違反がなされ、船に関しては彼が調査しているという声明を新聞に渡した [4: 12]。

その後我々は、まだ我々がそれらについて回答していない一連の質問を受け取った。[船から] 降ろされた武器、降ろされた人々、負傷者について何が知られているのか [という質問だ]。周知の様に負傷者がいて市長が彼らを見舞い、この事は新聞に載った。・・・三つの質問については、それら [の問題] は喚起されていないと答える必要がある。しかし負傷者の質問については、病院に幾人かの負傷者がいると答える以外選択肢がないだろう [4: 12]。

ツイスリング 捕まった人々が移民である場合、彼らを釈放する事についての国家評議会からの声明が発表された。私はこの事に皆さんの注意を向ける [4: 12]。

シェルトク 監視者ボンデは、いかにして〔彼らが〕船から弾薬を降ろしていたかを自分は見たと知らせてきた（彼はそれがなされた現場の上を飛行機で旋回していたのだ）。私は、我々の情報によると武器は降ろされず、我々が見つけた武器はエツェルの連中の個人的な武器であったという説をとっておいた〔4：12〕。

ネゲヴに関して。停戦の少し前、実際は停戦前の最後の瞬間に、エジプトがネゲヴへの道を遮っていた十字路を非常に小さな兵力で掌握した。この件についてはベルナドットとエジプトの間に論争があり、彼は、我々には輸送隊を通過させる資格があるという我々に有利な判断を下してくれた。彼とエジプトの間の話し合いは続いたので我々は彼に、我々はさきなく回答を待たず、我々自身を通る自由があるものと見なし、彼の同意の下に通過すると発表するだろうと知らせた。彼は自分が行動せざるを得ないと見て、エジプトに、彼らは我々を通過させねばならないという決定的通告を行った。彼は金曜を輸送隊通過の日と決めた。彼の司令部の長（ボンデ）が輸送隊の先頭に立って旅をしてその大きさも決めた。ベルナドットが最初の日々にはもっと大きな輸送隊が通過せねばならない、なぜなら二週間にわたり輸送隊は全く通らなかったのだからと割って入った。ボンデは輸送隊の中で武器が必要以上に突出する事は望んでおらず、その様な事に関する指示を与えた。輸送隊が十字路に着いた時、そこでエジプトの装甲車の列が道を塞いでいるのを見出した。彼らの側から発砲があったかは明らかではない。彼らは通らせないと知らせてきた。それと同時にベルナドットの人々の飛行機が旋回し、そのパイロットは中佐〔lieutenant colonel〕の階級にある・・・監視者〔ボンデ〕その人であった²⁴。エジプト機がこの飛行機に発砲し、安全保障上の理由から彼に降りよう強制した。・・・監視者が非常に怒ってその飛行機から出て来た。ところでこれらの銃声は、クファル・ヴァルブルク〔Kfar Warburg〕とベエル・トゥヴィア²⁵が空襲されたという噂をもたらした。ヌクラシーは〔国連の〕飛行機は誤って攻撃された

と発表した [4: 12~13]。

エジプトの戦列は道を塞いでいた。監視者 [ボンデ] はエジプトに飛んだが、彼らは彼に通過を許可しないと通告した。我々の人々もいる所で [ボンデは] 自分のノートの頁を破ってその場で幾つか言葉を書き、それを主任連絡官に渡した。その文書の頁にはこう書かれていた。エジプトが輸送隊の通過を妨害し、仲介者の決定に従えば停戦は破られた。イスラエル軍はエジプト軍に対抗して行動する自由がある。署名: T. ボンデ, 1948年6月25日午前10時30分。そのメモは我々に渡された。輸送隊は戻った。この直後、新聞記者らが私を質問攻めにした。我々の軍は何をしている、我々の飛行機 [戦闘機] はどこだ、・・・と。・・・²⁶ [4: 13]

作戦将校との協議後私は新聞各紙に、我々への監視者の声明の正確な文面を渡し、軍は自らに与えられた [自由に行動できるという] 許可をそれにふさぐしい時と場所に於て使うだろうと発表した [4: 13]。

そうこうする間に私はロードス島から電報を受け取ったが、その中で [彼らは] 私にこう知らせている。仲介者はボンデによって出された声明を認可しているが、我々の人々はベルナドット自身だったらかくも決定的な声明を出しただろうかと疑わしく思う事を自らに許している、と。ボンデは非常に単刀直入な人で軍人であり慎重さを知らない。(電報を読み上げる——それは外務省のファイルの中に保管されている) [4: 14]。

私は連絡官に、我々は48時間以内にエジプトの立場を変える事に成功したかどうかの最終的の回答を知らねばならない、という通告を渡した。我々の軍の参謀本部で [彼らは] 私に言った。四、五日間の基本的準備なしでは、もしこの件で戦闘に入ると決定されてもその事を遂行できないだろうと。私はこれらの事の影響下で、我々是我々が必要であると考える時と場所で行動するだろうという新聞各紙への私の声明を起草したのである [4: 14]。

そうこうする間に停戦違反が、事実としてこの地の北部であった。カーウク

ジー〔既出〕の兵力が我々が停戦前夜に征服した、アッコの東8キロのサフェドへ向かう途中の村を攻撃し、我々の兵力をその内部から追い出したのである。我々は反撃を行い、百人の死傷者を出した——半数は死者だ。彼らは三部隊によって反撃を行ったが、その場所から我々を追い出す事には成功しなかった。・・・その後、その件は鎮静化した。私の印象ではアラブは停戦の大々的な違反や我々との戦争の再開に関心はないが、エジプトは彼らの条件によって停戦を解釈しており、この件では悪い事は全く起こらないだろうという想定から頑になる構えでいる。そしてこれが、ネゲヴにおける彼らの頑固さの〔背後にある〕論理だ〔4：14〕。

安保理への彼の通知に於て、仲介者はエジプトの戦略をユダヤ人ネゲヴを飢えさせる試みと定義した。私が理解するところでは食糧補給の観点からは、ネゲヴの状況は場所によって一つ一つ異なる。輸送隊に依存しない場所〔複数形〕はある一方、クファル・ダロム²⁷では例えば状況は困難だ。・・・クファル・ダロムは殆ど包囲されているが、その上に我々の飛行機が現れる事・・・これは停戦違反と説明される恐れがある〔4：14～15〕。

ロードス島での会談に関して——私は行われた最初の諸会談について書面で報告書を受け取ったが、それによってあまり賢くはならなかった。それら〔の会談〕は極めて一般的、曖昧で具体性に欠ける。それらはベルナドットとではなく彼のスタッフたちと行われた。・・・会談の核心は、我々がアラブと和解する、或いはアラブがイスラエル国家と和解する事につながる展望があるか展望はないかという事だった。・・・〔4：15〕

私はベルナドットと彼の会談について報告しているレオ・コーンの手紙の一部を読み上げよう。（その手紙は外務省のファイルの中にある）〔4：15〕

私はこうコメントせねばならない。エジプトではコレラの〔流行〕事件²⁸が彼らにとっては天からの贈り物の様なもので、暫しの間世論を煽って国内危機からそらし、政府に国民の救済に於て影響力を持つ可能性を与えたが、その時

と同様この戦争の件でもそうである。政府は非常に不安定な状態にあり、大衆の怒りを、それが纏む事のできるあらゆるものへ向けているのだ [4: 15]。

ところで私が国家評議会で（ヴァルハフティグ氏 [既出] によって）旧市街の非軍事化について質問された後、私はロードス島にいる我々の人々にその事は本当なのか伯爵に聞くよう電報を打った。彼らは私にこう知らせてきた。いかなる所でも伯爵は旧市街のみの非軍事化についての問題を提起してはいない、彼はエルサレム全体について構想を持っているがまだそれらは固まるに至っていない、と [4: 15]。

私の手には、[今の] 状況とイギリスの利益がそこでいかに反映されているかについてワシントンから送られた概況 [報告] がある。この概況は国務省と財務省の人々との会話に基づいて報告された。（その概況 [報告] は外務省のファイルの中にある。） [4: 15~16]

我々の国連加盟について提起されていた問題はその解決を見出した。ウルグアイが我々の国連総会加入申請を支持する方向に転換したのだ [4: 16]。

* * [この印は原文通り]

③ イスラエル国家の政治の問題

政治の問題についての議論の総括を次回会合に延ばす事を決定する [4: 16]。

④ 軍事的状況の総括

最初から設定されるであろう日付に議論を延ばす事を決定する [4: 16]。

⑤ イスラエル国家における通貨

カプラン 私はそれについて皆さんが検討する時間が充分あった委員会の報告書に皆さんの注意を向ける。委員会の仕事と共に、信託統治理事会の特別な別個の活動がこの地で我々の為になされ、彼らは国外の人々との協議に出かけ諸提案を準備してくれた。私も国外の二、三人の人と連絡をとった。重要な事には、彼らの中にモーゲンソー [財務長官] の副官 [財務次官補] ヘンリー・ホ

ワイト [Harry Dexter White] がいた。私はヘンリー・ホワイトから通貨についての一連の勧告を、自分はここに来る事に同意してその事の遂行を助ける用意があるという強調と共に受け取った²⁹。通貨発行の重要性をここで説明する必要があるとは思わない [4: 16]。

エレッツ・イスラエル [パレスチナ] 経済と国の経済は、この地における貨幣の不足故に危機的な点に近づいている。・・・銀行はその気はあっても救済する事ができない。[例は省略 4: 16~17]

銀行の現金化の状況を示す一連の例を持って来る事はできるが、皆さんの時間を奪うのではなく要約しよう。私は、銀行の現金化の状態が全ての最低ラインを下回ったため、彼らにとって信用を与えるのが難しくなっているという結論に達した。その結果、経済問題が徐々に深刻化している。・・・[4: 17]

政府と国の経済的状況に関して。6月に国防支出は350万リラの額に達するだろう。その他の必要性の為には50~60万リラの額が出て行っている。つまり6月の支出は400万リラに達したわけだ。7月に我々は500万リラを超えるであろう支出に直面する。支出が増えるのは主に国防の必要性の増大による。次回の政府会合の議題に私は予算問題を立てる事を要求するだろう、私はこの件をまず政府決定に持ち込まざるを得ない。予算全般について話し合いを持つ事に私は関心がある [4: 17]。

6月に我々は予算を組む。国家収入は今月100万リラの額に達するがその中には延滞税の一部が含まれている。我々は税収を増大させる試みを行いたいのであり、私は皆さんの前に増税案を持って来るだろう。この提案の一部は話し合いには持ち込まれないだろう、というのは脱税を引き起こす恐れがあるからで、我々はそれを緊急時の命令として出すだろう。評議会の通貨委員会は・・・増税に同意したのであり、私は国家収入をあと25万リラ増やす事に我々が成功する事を望んでいる。つまり7月に我々の予算としては400万リラ不足する事になる [4: 17~18]

今月の差額を我々は、かなりの程度、我々が既に集めるのに成功したローンの資金（約400万リラ）によって、[又]ユダヤ機関が（アメリカの資金の中から）一定額参加する事によってカバーし、そして幾らかの程度に於ては放棄された敵の財産によっても助けられた。・・・[4:18]

海外での我々の全収入は実際には購入に行き、予算には含まれていない。我々はクレジットの形で予算を融通する事が必須になるという問題に直面するだろう。銀行は、今の彼らの状態では信用貸しをする能力はない。エレッツ・イスラエル[パレスチナ]経済の状態と国の経済状態は、窒息状態を止めるため我々に暫定通貨の発行を余儀なくさせる[4:18]。

我々は10月に通貨を発行するべく準備を開始し、今まで既に多くの事がなされた。（シェルトク どの位の額をこれは我々に与えるのだろうか？）1000万リラだ。つまりこの額は二、三か月間我々の予算を均衡させるだろう[4:18]。

通貨発行については多くの技術的な準備が必要になる。まだ10月で私の旅の前の話だが、私は通貨発行の為に求められるものを準備する試みを行おうと考えたけれども、[紙幣の]印刷が多く困難と結び付いている事が判明した。我々はアメリカ、スイス、イギリスで困難にぶつかった。[彼らは]我々に、政府を持たぬ限り我々[イスラエル]は貨幣を準備できないだろうと言った。そうこうするうちにアングロ・パレスチナ銀行³⁰が通貨発行の為に準備を行った。同銀行は一、二週間のうちにアングロ・パレスチナ銀行の銀行券と呼ばれるのに十分な、大きな額の銀行券をもたらし可能性があり、それらをエレッツ・イスラエルの貨幣として使用する事は可能だろう[4:18~19]。

私が連絡をとったアドバイザーたちの意見によると、もし我々が自由に行動できる五、六か月の期間が我々の裁量下にあったなら貨幣発行を担当する特別な政府銀行を設立する事が可能だったろう。この銀行は、その任務が商業的なものではなく中央銀行として機能する「イスラエル銀行」の名で呼ばれたら

う。我々がこのような銀行を設立するつもりなら、ここ五、六か月間いかに我々の経済を維持するかを知らねばならない [4:19]。

初めに言った様に銀行設立に要する時間が我々の裁量下に見出せないので私は自分の提案を持ち込んだのであり、その難点が何かを述べる。過渡期には我々はアングロ・パレスチナ銀行に通貨発行権を与え、同じ時期には新リラはなくアングロ・パレスチナ銀行の銀行券が出回る事になるが、それをエレッツイスラエル・リラ [パレスチナ・ポンド] と交換する事が義務づけられるという布告に基づいてこの銀行券の使用が保証される。この件の為に、銀行と我々によって共同で運営される特別な部局が設立される。発行される通貨の量は政府の同意の下に決定されるが、政府は約 1000 万リラが我々に残る事を保証する。つまり 3000～3500 万リラを発行する必要がある。この通貨は暫定的にこの地における法定通貨として宣言される。つまりある日付から現行のエレッツイスラエル・リラはこの地で通用しなくなり、交換されなければその貨幣は価値を失う。三、四週間の期間がその貨幣の交換の為に設定される [4:19]。

グリェンバウム 私は今行かねばならないが、カプラン氏の提案への私の同意をお知らせする [4:19]。

カプラン その事を遂行し始める際に我々は一連の困難にぶつかっている。[アングロ・パレスチナ] 銀行は二つの条件でその遂行を引き受ける用意があった。A) 我々がその通貨を暫定的と宣言すること、B) その暫定性は少なくとも五年続くこと。私は五年の代わりに六か月から一年、[つまり] その事を変更できる政府の樹立までとする事を提案した [4:19～20]。

誰がこの事の先頭に立つかという問題が生じ、かくして大変難しい技術的な諸問題が生じた。本件について公に議論する事はできない、なぜならユダヤ人であれ非ユダヤ人であれ海外へ行く人々によるこの地からのエレッツイスラエル・リラの流出が始まる危険があるからだ。彼らはロンドンでエレッツイスラエル・リラをイギリス・リラ [イギリス・ポンド] に交換する事ができる。・・・

[4:20]。

私はその件を通貨委員会 [Palestine Currency Board を指す]³¹ に持ち込み、委員会はその問題について長らく話し合った。彼らはその事に原則的に同意し、暫定通貨の発行についての構想を受け入れた。確かに喜んでではなくそれを行う事が緊急で不可欠であると見たからではあったが。彼らはその事を満場一致で承認した。その貨幣にはアングロ・パレスチナ銀行の銀行券と印字されるだろう [4:20]。

あと一つコメントしよう。私がここで提案した事は11月29日決議に反するが、私は我々が通貨発行を進展させそれを遅らせてはならない理由を [皆さんに] 示した。私は [政府が] その事を原則的に承認し、私とベルンシュタイン氏に、ホロヴィッツ氏と共に [アングロ・パレスチナ] 銀行との交渉を行うよう課す事を提案する。最終的な合意を我々は政府と国家評議会の認可に持ち込まざるを得ないだろう。我々はあと二、三週間で新リラを発行できるよう、その事を進展させなければならない [4:20]。

私はエレッツイスラエル・リラの一部は、イギリスに移されるかイギリス・リラに交換する必要があるだろうと考えている。・・・今の状況は我々がイギリスで商品を買いたい時にイギリス・リラを持っていないというもので、これが購入の領域で窒息状態をつくり出している [4:20]。

ベルンシュタイン 私はカプラン氏の言葉に補足はしないが、私の意見では明らかにする事が不可欠な他の諸点に関して幾つかコメントしよう [4:21]。

A) カプラン氏は通貨の保証については話さなかったが、確かに彼は、通貨の保証は凍結されるリラによってのみではないだろうと付け加える用意があった。新通貨発行の難しさは——それが凍結されるリラによる保証を持つ点だ。我々に時間があつたら——我々は本件を別の方法で秩序立てねばならなかったろう [4:21]。

B) 私はこの計画に同意し、その準備に参加した。しかし私は二つの事をコ

メントせねばならない。1) 新通貨について暫定的であると発表する事は我々にとって禁物である。なぜならどんな新通貨もそれについて暫定的であると宣言されれば、それへの信頼は最初から掘り崩されるからだ。それ故に私は全ての困難にもかかわらず、より継続的な期間にわたり銀行に特許を与える事を提案する。九、十か月の期間で通貨を発行するのは不可能だ。2) 私の勧告は・・・我々はこの通貨発行についてアメリカ政府からの同意を（たとえ非公式の形で）得よう努力しよう、というものだ。ある諸会談によってその事への同意を得る事は可能で、それは通貨を非常に強化するだろう。・・・現エレッツイスラエル・リラでは買う事ができない。故に我々は、アメリカからこのような同意を得るよう努力する事に大いに関心を持たねばならない [4: 21]。

ツイスリング 我々は一定期間における通貨の交換について宣言するだろう。その後交換がなされ、エレッツイスラエル・リラはエレッツ・イスラエルで価値を失う。問題は国外に対してどうなるかだ。もし国外でそれが効力を持ったままだとすると、委任統治政府はこの地では「機能を」停止したが我々を国外に結び付ける手段はその手中に残り、我々がかなりの程度それに依存するという状況が生まれそうだ。実際エレッツイスラエル・リラを廃止する事は不可能になるが、その件の規制の為の法的土台はないのか？ [4: 21]

カプラン 彼ら [イギリス] は我々を承認していない。もし [彼らが] 我々を承認しており、[国連分割決議に規定されていた] 経済連合が公式に存在していれば、[彼らは] イギリスにおける我々の資金の凍結を解除し、我々に保証を返さねばならなかっただろう [4: 22]。

ツイスリング 私はこれらの問題に精通していないが次の事を欲していた。A) この件について国際的手段をとらなかったとしても問題を提起すること [4: 22]。B) 第二の問題はアングロ・パレスチナ銀行に関してである。・・・この [通貨委員会の委員長の] 手紙には、アングロ・パレスチナ銀行がイギリスで登録されている事に鑑み・・・我々が発行する通貨をイギリス・リラに基

づかせる必要がある、という一節がある。私は本件について政府メンバーの幾人かに向かい、通貨の発行はこれらの条件の下ではイギリス法に従属する恐れがあり、彼らがこれら〔の法〕をいかに利用するかを我々が最初から知る事はできないと言った。私はその事が国際社会に於て、我々の威信の観点からどの様に受け取られるかと聞いた。これと結び付いた経済的結果は何か？——それについて私はいかなる回答も受け取らなかった〔4：22〕。

感情の観点からその事について論じるとすると——我々はイスラエル国家の通貨を発行しないのみならずイギリスと結び付いている機関の通貨を発行するので、再びそれ〔イギリス〕から解放されない事になる。故に私は、我々が別の機関と結び付く事ができるかどうかという問題を提起する。・・・〔4：22〕

ベングリオン 何故国は今、通貨を出さないのか？ 〔4：22〕

ベントヴ 何故我々は政府銀行を設立しないのか？ 〔4：22〕

シャビラ 何故保証として、我々がアメリカから受け取るであろうドルを考慮に入れる事ができないのか？・・・〔4：23〕

カプラン 初めにベングリオンの質問に答えよう。本質的な困難は、貨幣を国ではなく銀行が発行する事を私が望んだところにあった。やはり国には技術的な困難もかかる、適切な国の機関も紙もないからだ。これとは別に、大専門家たちの意見ではその事は九か月を要するだろう。これに対してアングロ・パレスチナ銀行は既にアメリカで通貨を発行している。同銀行は通貨不足への恐れから、かなり前にその事を扱い始めた。（ベングリオン 同銀行の通貨を偽造できないのか？）これをするのは非常に難しいだろう。・・・〔4：23〕

第二の質問は〔通貨発行の〕保証に関連して問われた。保証としては幾つかのものが機能するだろう。A) これらのリラと引き換えに我々が受け取るであろう、正にそのリラ。B) 我々の手中にあるであろう全ての余剰の外貨。C) 国が受け取る義務があり政府が支払う義務のある、税の保証（イギリスは戦時にこれを行い、10億リラの額に上った）。D) 信用の土台の役割を果たし得

る、顧客の保証された紙幣 [4:23]。

この件については幾つか見解がある。保証としての貨幣の70%が手元にある場合以外、[新] 貨幣を使う事はできないという保守的な見解がある。ヘンリー・ホワイトはこの見解には反対で、彼の見解ではこの様な割合に縛られるのは禁物であり、それはこの事が我々を泥沼に陥らせる恐れがあるからだという。彼の見解では保証はこの地における価格の保護、インフレ回避、人々に交換を許す可能性、によるものでなくてはならない [4:23]。

この件について私は委員会を提案した。・・・[4:23~24]

イギリスが関与する恐れのあるイギリスの銀行と我々のつながりに関する、ツイスリングの質問について。これは私が弁護士らを介してアングロ・パレスチナ銀行にそれについての回答を要求する質問の一つだ。問題は、同銀行がエレッツ・イスラエルにある故にイギリス政府がいかなる件についても決められない、という事をいかに保証するかである。しかしイギリスがロンドンにある同銀行の諸事項に介入できるかも知れないという問題は提起されている。・・・これこそがそれらをめぐって交渉が行われている事案の一つであり、最終的承認と共に政府の前に持ち込まれるだろう [4:24]。

通貨の発行はイギリス [の利害] に反する法律 [Act] だ。リードマンは早くも二週間前、我々がどうやって我々の戦争資金を調達するのか分からないと言い、イギリスの同意なく我々が敢えて通貨を発行できるだろうかという疑念を表明した。イギリスには5500万リラのエレッツ・イスラエルの信用 [手形] と利子があり、今日の同国の状態ではこのお金は同国にとって多大な価値がある。・・・[4:24]

我々は通貨発行へのアメリカの同意を得る事はできないだろう。だがもしアメリカ人が、我々が我々の通貨の利益を配分する事を知っている、と分かったら——[彼らは] その事実を進んで受け入れるだろう。イギリスはこの事の中に自国 [の利害] に反する法律を見るだろう。通貨圏への我々の所属について

は——我々は宙ぶらりんである。非公式なやり方で我々は実際にこの地で、1リラにつき3ドルの購入を行った。そうする事によって我々はリラの価値を下げた [4:24]。

これらが私が答える事のできた数少ない回答だ。近々の会合の一つで私は政府銀行設立の為の提案を持って来よう [4:24]。

ベングリオン 今最終的に決定する必要はない。アングロ・パレスチナ銀行との取り決めを含む最終提案をあなたが持ち込む際に我々はこれをしよう [4:24]。

ツィスリング カプラン氏の答えによると私の恐れは真実だ。私はその程度がどの位か、その結果がどの様になりそうか、それら [の結果] がどんな範囲に及ぶ事になるかを知りたかったのだが。私はそれらの [結果が及ぶ] 範囲が、その事から生じるであろう利益を疑問視せざるを得ないほど深刻になる事を恐れている。この地から貨幣が流出する多くのルートがあるだろうから、我々はここに貨幣なき状態でとどまる恐れがある。私はこの深刻な恐れを表明する事が必要と考えた。B) イギリスの銀行の件。アングロ・パレスチナ銀行がイギリス [の銀行] であるという事実は、その事を非常に真剣に政治的・法的観点から考慮する事を余儀なくさせる。C) カプランの言から私は、もし我々に時間的ゆとりがあったなら——彼はこの計画を提案しなかっただろうと理解した。彼の提案は、アングロ・パレスチナ銀行が既に貨幣を準備中であるというこの理由のみによって提起されたわけだ。もし我々が、我々の為に貨幣を発行できるであろう国々の一つと結び付くなら通貨発行に要する最小限の時間はどの位か、できる限り根本的な方法で明らかにするようお願いしたい [4:25]。

ベントヴ 二つの通貨の自由な循環は考慮に入らないのか——エレッツイスラエル [・リラ] と新通貨と？ [4:25]

カプラン それこそ最も危険な事だ、なぜならそうなればエレッツイスラエル通

貨〔旧通貨〕の流出が起こるだろうから〔4：25〕。

私は暫定通貨の即時発行をめぐるアングロ・パレスチナ銀行との交渉の継続を原則的に承認するよう提案した。我々は交渉を行う為に二、三人のメンバーを廻し、最終合意が執行部の承認を受けるべく提出されるだろう〔4：25〕。

ベルンシュタイン 暫定性の性格への同意についてはどうか？〔4：25〕

ベングリオン それは最終提案の中に入るだろう〔4：25〕。

ツィスリング 根本的な諸問題への回答が得られたからには、我々が聞いた報告についての話し合いに戻ろう。明確化の続きは委員会の手に残されるだろう〔4：25〕。

ベングリオン カプランの今日の発言は最終的な言葉ではない。ツィスリングが彼の発言で言わんとしたのは我々が本件を前もって最終決定せず、我々が最後の言葉を語る前に——二つの件について専門家の意見があるだろうという事だ。カプランは、この意見を提出する事が可能だと考えている〔4：26〕。

ベルンシュタイン 同僚全員への、この件に関する願いはこうだ。本件を公表しないのみならずそれについて話してはならない〔4：26〕。

ベングリオン 我々はカプランの提案を聞き、否定してはいない。しかし我々はそれについて最終的に決定せねばならないだろう。その提案が最終決定に持ち込まれる際、ツィスリング氏は〔次の事について〕意見を求めている。A) どの程度アングロ・パレスチナ銀行は理論的にはイギリスの機関である故に、我々を縛るのか。B) もし我々自身で貨幣を発行する事ができない場合は〔どうなるか〕。C) 〔貨幣〕流出の観点から見て、この事の中にあるリスクとはどのようなものか〔4：26〕。

これをもって我々は本項目を締め括った〔4：26〕。

⑥ アリヤーの諸問題

シャビラ 私は前回会合以来の事態の展開について付け加えよう。前回会合で私は、停戦の一月に約2万人の移民を連れて来る計画を我々は持っている

報告した。彼らのうち1万2000人はキプロスから、8000人はヨーロッパからだ。この計画は駄目になった、というのはイギリスがキプロスからの人々の出国全般を禁止する事を決定したからだ（当初意図された様に動員年令にある人々のみならず）[4:26]。

シュルトク氏はゴールドマン博士から、イギリスが動員年令でない人々への出国許可を与える事に同意した模様だ、と知らせる電報を受け取った。……もし既に適切な指示が与えられているなら、我々は停戦の終わりにまでに1万人を連れて来るのに成功するだろう。（ベングリオン 二隻の船はどうなったか？）それらはハイファ港にあったが、今日から我々の権限下に移された。（シュルトク ……それらが入港した時イギリス人らがそれらに近づいた。それらは拘束されていて、漸く今日解放されたのだ。）イギリス人らは、これらの船は移民を連れて来る事を目的としていたと主張した。……[4:26～27] [一段落省略4:27]

これら二隻の船（パン・ヨーク号とパン・クレセント号³²）は滞りなく我々に1万5000人をもたらした、確かにあまり快適でない条件下ではあったが。今我々は各船で最大1500人を連れて来るつもりでいる。つまり一つの旅でそれらの船は3000人を連れて来るだろう。四つの旅の間には1万2000人が連れて来られるだろう。我々の計算では、現在キプロスには動員年令の人々以外移民はいない [4:27]。

ヨーロッパの状況に関して。最初から船〔複数形〕は停戦条件が受諾されるまで出航しなくなかった。今やその件は進展し始めた。7月1日までに約2500人の移民がこの地に入れられる。彼らの一部は既に着いた（1300人）。今は三隻の船が道中にある——カディマー号、タティ号、カンパドニア号だ。移民は飛行機でも到着している。私が言及した三隻の船で1180人が到着するだろう。この地からは三隻の船が送られた——エメク・アヤロン号、ロー・タフヒドゥーヌー号、イエヒアム号であり、それらは1500人を連れて来るだろう。

これとは別に二隻の船——メディナト・イスラエル号とレニツァホン号——が300人を連れて来るだろう。サン・アントニオ号は500人を連れて来るだろう。・・・これら全てを併せると、もし我々が人々の来住を飛行機で促進するのなら、私が上で言及した2500人に加えて7月9日までに3000人の移民に達するという我々の展望を強めるだろう。つまり全部で5500人の移民に達し、恐らく更に500人増えるがこれについては私は言質を与えない。その事が意味するのは、ヨーロッパから移民を連れて来る我々の計画が、停戦後に起こった紛糾の故に25%縮小するだろうという事である [4: 27~28]。

我々は追加の船を準備する為にあらゆる努力をするが、[それらの船が]出発できるまでに時間がかかるだろう。・・・多分、飛行機で移民を連れて来る事に関して更なる努力をする事はできるだろう。（シェルトク 飛行機の件については——いずれは避けて通れない。・・・）私の意見では国連代表たちに、移民が飛行機で到着しており、彼らをキャンプへ入れるだろうと知らせねばならない。この事は恐らく、他の物資を運んで来る飛行機について容易にするだろう [4: 28]。

ツィスリング 私は幾つか質問しよう。A) 既に着いた移民と将来着くであろう人々をどこへ向かわせるか？ キャンプに対する我々の計画はいかなるもので、それらの中の状態はどの様か。移民はキャンプ内に住んでいる間に働く資格はあるのか。B) 7月9日以降状況はどうなるだろうか？・・・停戦が続くとしたら、5500人のアリヤーの後のアリヤーの見込みはどの様か？ C) 独立した船、商船ではなく移民船を我々の為に確保するべく行動がなされたか？・・・D) 我々は更なる船を移民を連れて来る事に従事させる為の適切な手段をとり、この件について全ての国に要請したか？・・・我々は、そこ [東欧] 或いは他の諸国からの移民の緊急輸送の為の船の獲得について東欧諸国に要請したか？ [4: 28]

シャピラ キャンプにいる人々の運命について。今までのところの経験は全く

悪くはなかった。動員年令の移民の半数以下がキャンプに入った。移民全員でない理由は——彼らの一部が、帰って来たこの地の住民だからだ [4: 29]。

キャンプにいる人々は何もする事がない、というのも彼らは訓練される事を禁じられているからである。・・・[4: 29]

停戦が続く場合の将来の計画に関して——私が明確な事を答える事はできないだろう。いずれにせよ、この事はこの地の吸収の可能性にかかっている。もし来月、我々がこの地に動員年令の人々をも入れる事ができれば——我々は2万人に達するだろう。もしできなければ——キプロスは我々の前に閉ざされるだろうし、その数はずっと小さくなるだろう。ヨーロッパから我々はそんなに大きな数の移民を移住させる事はできないだろう。多大な努力によってそこからの移民数を倍増する事は可能だろうが。(ベングリオン 動員年令ではない移民についてはどうか?) 今までそのカテゴリーの移民は非常に限られた数しか着いていない。カディマー号は453人の移民を連れて来たが、彼らの中で動員年令でないのは僅か40人だ。これに対してキャンプに行ったのは僅か128人の移民だ [4: 29]。

シェルトク 動員年令の移民の割合の問題が引き起こされる可能性があるのは、[イスラエルに] 移住する事が許可されないであろう動員年令の人々が来る場合、及びこれを超えると軍事的な意味で充分以上に大きなアドバンテージがつくられるだろうという程の数の動員年令の人々が既に移住したという主張が提起される場合だ。我々はまだそこまで行っていない [4: 29]。

シャビラ 移住問題について。今月、かつて移住に寄与した六隻の船が着くだろう。今あと三隻の船が近日中に出発できると理解している。全部で——九隻の船だ。カディマー号も出発するだろうから併せて十隻の船になるだろう。これと共に我々は更なる船を得ようと努力している [4: 29]。

ツイスリング ・・・[それらの船が] ハアバラー [העפלה, 委任統治下の困難な移住] 船としてもたらした人数と、それらが今もたらしている人数の比はど

の位か [4:30]。

シャピラ 我々が今、かつて移民が連れて来られたのと同じ条件で移民を連れて来ているのではない事は明らかだ。今しがた小さな船が着いた——ハボルツィーム号だ。それは138人連れて来たが、この数も、かくも小さな船にしては充分大きかった [4:30]。

これと共に我々は更なる船を得る為にあらゆる努力をしている。私は一昨日、様々な場所にいる我々の人々に、船と移民を増やすべくできる限り努力するよう電報を送った [4:30]。

トランシルヴァニア号に関してだが——この船は決して多数の渡航者を連れて来なかった。多くて120人だ。それはエレッツ・イスラエルへ行く事を中止した最初 [の船] だったが、その事を再開する用意はない様だ [4:30]。

プロヴィデンス号は一度に1000人の移民（先月）を連れて来たが——ここであつくり出された状況の故にエレッツ・イスラエルへ旅するのをやめた。この件は今、明確化の最中で、私はまだ明確な答えを受け取っていない [4:30]。

費用に関して質問があつた。ジョイント³³がいまだに移民の旅費を取りしきっている事が判明したが、[それは] キプロスからの行程の費用は払いたがつていない。我々はパスマン氏³⁴との会合を持った。・・・我々は彼に、キプロスからエレッツ・イスラエルへの一人あたり4～5リラの旅費を我々がジョイントから受け取るよう計らつて欲しいと頼んだ。彼はその事への対処を約束し、我々が妥協の取り決めに同意するかと聞いた。・・・私は彼に、[カプラン蔵相は] できる限りの事をするが、我々が費用全額を受け取る事は主張するだろうと言つた。彼はできる限りの事はすると約束した [4:30]。

ローゼンブルート 西欧と南アフリカのユダヤ人の間に移住の願望は感じられるか？ [4:31]

シャピラ 全く疑いない。これらの船でユダヤ人は世界各国から来ている。南アフリカ、西欧、カナダからも。（ベングリオン 非常に重要な軍事専門家が

来ている。ゴイームも来たいという意志を表明している。) [4:31]

シュルトク 閉じ込められ監視されている移民たちの居場所と雇用の問題に関して。当初私は彼らを農場に連れて来る問題をすぐに提起する可能性を見なかった。なぜならある微妙な点があり、我々は何よりもまず移民を降ろす事に関心があったからだ。時間がたち監視者たちが検討して、我々に悪い意図がなく全てが適切に行われている事に納得した今、私の意見ではもう一段階進めてこれらの人々が失業状態で住む事は不可能だと語る事は可能である。この場合我々はリーズナブルな措置を提案せねばならない。つまりキャンプにいるのと同じ数の人々が、彼らがそこで働く事のできる場所に向けられるだろうという事だ。彼らを仕事に従事させる事については何の問題も提起されないだろう。禁止が適用されるのは訓練だけだから。(シャピラ 今のところハデラに一つキャンプがあるだけで、そこには300人がいる。) [4:31]

ベントヴ [彼らが] 人々を出航前に船から降ろした事はあったか? [4:31]

シャピラ その様なケースはまだ起こっていない [4:31]。

ツイスリング 私は現状に満足していない。私はこの件について [幾つか] 提案しよう。1) この地に到着する移民に関して。彼らは50~100人を収容するキャンプに分けられるだろう。これらのキャンプはキブーツと大小のモシャヴァー³⁵に分散し、[彼らは] 労働に従事させられるだろう。我々は今後この地の隅々にキャンプを立てる計画に融資せねばならず、私は短時間でこの計画を提出して、労働に従事させられる移民がどこで働かされるかを決める用意がある。この措置は金銭的支出を節約し、人々は心配しなくてよくなるだろう [4:31~32]。

訓練の問題は政治的問題であり、[政府は] 決定するであろう様に決定するだろう [4:32]。

2) 移民数の拡大の件では、移民の数の面で我々がイギリスに依存している状態がつくられた。キプロスから移民を連れて来る事が可能であるとする

と——その数は大きくなるだろう。彼らを連れて来る事に禁止が適用されると——その数は小さくなるだろう。私は我々がイギリスの陰謀を克服できるかどうかは知らないが、ヨーロッパからのアリヤーはこれらの条件下では何倍も大きくなり得ると確信している。我々がハアパラーの時代にそうであった様に「今後も」船を持っていないという状態は正当化されない。私はこのタイプの船を購入する努力がなされているかお聞きする。私がこの事を今感じるのは、7月9日以降何が起こるかまだ分からないというシャピラ氏の答えを私が受け入れないからである。7月9日以降我々が船を大変必要とする事は私にとって明白であり、7月9日に起こるであろう事に我々は依存してはならない。アリヤーの可能性があるなら——我々には我々自身の船が必要だ。アリヤーの可能性がないなら——その場合も我々には我々自身の船が必要だ。故に、私はアリヤーの必要性の為に移民船の購入を継続する人がいるのかを知りたい [4 : 32]。

私の意見では、我々はハアパラーの条件下で移民を連れて来続ける事はできる。それでも移民の状況はより容易なものになるだろう、なぜなら彼らを甲板に載せて移住させる事は可能で、そうする事により我々は彼らをより速く連れて来られるだろうから。・・・ユダヤ人アリヤーの前に門戸が閉ざされる危険が予想され、我々はその様な事に合わせて行動せねばならない。今は夏季で季節が海における迅速な旅に適しており、各船の移民数を制限する事が不可欠であるという答えを私は受け入れない。・・・[4 : 32]

3) 私は他国に属する船をめぐる交渉についてのシャピラ氏の答えを受け取っていない。私はこれらの件に従事している機関「アバラート」の性格がどのようなものか、どの国々で「彼らが」アリヤーの為に船を動員しようとしているのかを知りたい [4 : 32]。

トランシルヴァニア号に関する回答は私を満足させない。私はこの船で700人のユダヤ人と共に旅した。これらの条件下で、より大勢の人々をそれに乗せ

て移住させる事ができる。この船での旅はより多くの金を奪うという事を私は知っている。これはソヴェト＝ルーマニア船³⁶だ。しかし私は、ユダヤ人移住の為に何故それを動員できないのかについての十分な答えは聞かなかった。私が聞いたのは、我々の権限下におかれる事になる全ての船と引き換えに我々は金を全額支払うだろうという通告がブルガリア、ルーマニア、その他の国に与えられたという事だ [4:33]。

今、船の購入とそれらの引き渡しに従事している人は誰か、そしてこの件についての我々のポリシーは何か [4:33]。

シャピラ 私はあなたがこれらの事項に関心がある事を嬉しく思う。船の購入の為に提案が採択され、[彼らが] その代金として15万リラ要求した事は確かだ。私はカプラン氏との会合を行ったが、その中で彼は我々に極めてはっきりと自分には金がないと告げた。カプラン氏は彼の立場をきつと説明するだろうが、私は要求されている額を受け取るのに今まで成功しておらず、その件を政府会合での明確化に持ち込まねばならないだろう。その事が有効かは疑わしく思うが [4:33]。

これらの日々にメイル・サピル³⁷ という男が海外に出張し、次の事を行う完全な権限を与えられた。A) 移民の構成を決めること（この件については「彼は」我々から受け取った指示に従って行動するだろう）。B) モサドの諸事項を扱う人々と共に、考慮に入ってきた全ての船を我々の為に獲得する可能性を検討すること [4:33]。[一段落省略 4:33]

私は本件を全体としてツイスリング氏が描く程悲劇的だと見ていない。確かにもシイギリスがキプロスからのアリヤーを阻止するとすれば——その事は我々にとってふさわしいアリヤーの最大の予備軍が我々の前に閉ざされるだろうという事を意味する。ヨーロッパに我々は大きな予備軍を持っていない。動員年令の人々は全部で5000人（ルーマニアを除く）いる。・・・ルーマニアは人々にその地を去る事を直接的には許可しておらず、不法な越境によってのみ

出国できる。この事は簡単ではない [4:34]。

ヨーロッパにおける我々の人的ポテンシャルは充分限られており、今月我々はそのから 600 人を移住させたと私が言う時、彼らの 80% は我々にとって今必要とされる人々だと想定する必要がある。もし我々が事前の選別なく人々を移住させられると決定するなら——つまり病人、びっこ、ちんばも³⁸——我々は多くの船を一杯にできるだろう。・・・しかしこれは我々のアリヤーの政治ではない。今のところ我々は、我々の戦争にとって重荷になる人々ではなく我々にとって最も適切な人々を選び出している。（ベントヴ どういう点で彼らは重荷になるだろうか？）アリヤー自体とは別に吸収の問題があり、女子供や老人を吸収せねばならない時——これは簡単な問題ではない。我々は 100 万リラ近い規模の予算案をカプランに提出した。もしカプランの報告を聞いた後にこの金額を得るのが易しいだろうと考えているなら、あなたは正にエデンの園に生きている。これらの理由から私はアリヤーをこの様に調整しているのだ。軍の隊列に到達する様な、[又] 自分達の吸収を気にかける為の多額の予算を自らの裁量下においている様なアリヤーになる様にと。もし我々がヨーロッパから 600 人を連れて来る事に成功するなら——その事は彼らの大半が動員されるだろうという事を意味する、なぜならこれがそこ [ヨーロッパ] から来た最良の分子だからだ。我々が [ナフム・] ゴールドマン氏から受け取った報告に根拠があるなら、私は我々が 1 万 2000 人近くをキプロスから連れて来るだろうと信じる資格がある [4:34]。

停戦が中断する場合、海に船団を設けるというツイスリングの提案は夢の観点からのものだ。この船団を守るには我々は飛行機も船も必要とするだろう。この事は我々の手中にあるであろう [軍事] 力にかかっているが、私は適切な [軍事] 力によって護衛されこの地に移民を連れて来るであろう強力な船が二、三隻我々の手中にあったら喜ぶだろう [4:34]。

カプラン [彼らが] 私に多額の金を要請した事は確かだ。我々は滞りなく彼

らの権限下に20万ドルを移した。今まで「彼らは」この金を使う事に成功しなかった様に思われる。・・・[4:35]

私は20万ドルの金額の中から「彼らが」どの位支出するのに成功したかは知らない。今までにその金額の半分しか支出されなかった様に思われる。船の購入は簡単にはいかない様だ [4:35]。

ベングリオン この会合で我々が触れた一つの案件が結論がないままになっている。私の意図は移民の為に多数の労働キャンプのアレンジの可能性にある。「彼らは」非常に小さなキャンプには確かに同意しないだろうが、二、三の大キャンプを整えて人々が働ける様にする事は可能だ [4:35]。

シャピラ この件は、シュルトク氏が監視者たちと明確化せねばならない [4:35]。

ツイスリング 私は私の提案を三項にまとめよう。A) 移民については、移民はキャンプに来たらすぐに分けられること。B) 我々は移民相に、外国での船の購入の為にもっとダイナミックな代表団を心がけるよう、外国でその事に携わる全ての人々を行動させるよう要請しよう。私はこれらの言葉で不信感を表明しているのでもシャピラに対して個人的に中傷しているのでもなく、我々はシャピラ氏にこの件について行動する事を要請する、と決定するよう提案しているのである。C) 船の購入について決定するよう提案する、それら [の船] なくしてはアリヤーが中断されるだろうという危険に留意しつつ [4:35]。

ベングリオン この問題は既に話し合いの為に立てられ、その為の特別な委員会が選出された³⁹。船の購入の件は我々の前にある中心的任務の一つだ [4:35]。

ツイスリング あなたが言及した委員会はヘブライ船団の件に携わるだろう。確かにこれ「船の購入」は最も重要な事だが、私はハアパラー用の船の問題に触れた。これらの船も我々の船団に入るだろうが、カディマー号やその他の船の例に従って働く事はないだろう。私の提案は財務担当者にこの件に要する金

額を割り当てるよう要求する事である⁴⁰。私はゴルダ〔・メイルソン〕⁴¹に次の様に知らせるよう提案する。近々の時期にこの地に着くであろう移民の数はアリヤーに要するこの特別な資金の件にかかっている、と〔4：36〕。

私の目にはこの地に着く移民の数の全てが重要と映る。しかし私はその行為の価値を、その行動がどの位の緊張感でもってなされたか、その程度によって測る。我々のうちの誰も、胸に手を置いてアリヤーの可能性が将来もっと多くなると保証する事はできない。今我々には移民を連れて来る可能性が与えられた。もし我々がこの可能性を最大限に活用しなければ、多くのユダヤ人がこの地に着かないという事の責任を我々が負う事になるだろう〔4：36〕。

ベングリオン あなたの発言は——全部が提案の範囲に収まりきらない。ダイナミックな代表団は提案ではない。資金の問題も提案ではない〔4：36〕。

ツィスリング 私は15万リラの金額をアリヤーの為に承認する事を提案する〔4：36〕。

ベングリオン 船の件の為に選出された委員会が会合を開いて、政府に報告書を提出する事を提案する〔4：36〕。

我々は今、かつてそれがなされた様にはハアパラーの行動を始める事ができない。その当時我々は、我々の船がこの地に着くのを許可しないイギリス艦隊を恐れていた。今我々はエジプト艦隊を恐れている。・・・故に我々の船に対する防衛がなくてはならず、船自体がもっと強くなくてはならない〔4：36〕。

我々の権限下に入るであろう船の獲得の問題、これはアリヤー、安全保障、我々の経済を左右する基本的な問題である。イギリスは船舶の世界に多大な影響力を持っている様で、同国は封鎖を組織した。・・・この危険に鑑みれば、我々はエルサレムの例の様にこの地全土における飢えに直面しない保証はない。・・・我々自身のふさわしい船の獲得の問題と、充分な防衛によりそれらの船をこの地の海岸に近づける為の諸条件を保証する事——この問題に我々の生存がかかっている。故に、この件の為に選出された委員会は自らに課された

使命を大いに熱心に引き受ける必要がある。委員会のメンバーはシャピラ、レメズ、カプランの各氏と私である。我々はレメズ氏の帰りを待たず、私は委員会を開く事を自らに課す [4:37]。

いつまでイギリスの影響力が東方諸国にも及ぶのかは、その事が我々の問題に及ぶ時に我々は学ぶ。[例は省略] この様な形で同国は我々に対して海上封鎖を組織している。もし我々が我々自身の海軍力を持たないなら——船も人々も着かないだろう。安全確保なしで女子供を連れて来る事——それは簡単な事ではなく、アリヤーが中断されるには一隻の船が要求されるだけで充分なのだ。それ故にユダヤ船団の獲得、これは我々にとって生存の問題であり、大きなエネルギーでそれにアプローチせねばならない [4:37]。

それらの中で船を獲得する事が可能な国々がある。我々にとって速い船は重要であり、ハアパラーの諸条件で移民を連れて来続ける事が可能だとは思わない。我々は小さなボートを多数の人々で一杯にする事はできないだろう。(ツイスリング 私は停戦期のみというつもりなのだが。) アリヤーに関しては今停戦が続行中かどうか、あなたは知りようがない。停戦打ち切りの時点で船が道中 [の海上] にあるという事も起こり得る。これらの問題は非常に深刻で、我々は今の現実に従って我々の行動を行わねばならず、状況が一年前そうであった様にはではない。今の現実のアラブとの公然たる戦争のそれであり、イギリスの方面では海における、より隠然とした危険な戦争である [4:37]。

我々は船問題の詳細に入らねばならない。我々の船なくしてアリヤーはなく、食糧はもたらされず、我々に安全保障はないだろう。しかしそうこうしている間に我々は移民のキャンプの事を心配せねばならない、というのもこれは重要な問題だからだ [4:37~38]。

ベントヴ・・・移民相に [東欧諸国への] 特使を送るよう課す事を提案する。特使は、移民を連れて来る為に考慮に入る全ての船を我々が利用できる様にする為に、これらの国々と協定を結ぶ可能性があるかどうかを検討する事に

なろう [4:38]。

ベングリオン 二か国（ロシア [ソ連] とチェコスロヴァキア）に我々は代表 [ツィリーム]⁴²を持っている。その事を残りの諸国についても検討せねばならない。我々は適切な形で船の問題にアプローチせねばならない、そうすれば我々は船の件について融通のきくアメリカのユダヤ人を動員できるだろう。この件の為に個人的・民族的資本を動員する事が可能だ。もし我々がその事に予算の観点からのみならず適切な理解からアプローチするなら、我々はユダヤ船団をたてられるだろう、と私は想定する [4:38]。

ツィスリング氏の諸提案に関しては、海外にいる我々の代表に要請せねばならない [4:38]。

外相に、移民相と共に移民の為に労働キャンプの設立の可能性をアレンジするように要求する決定を採択する事については、政府メンバーの側からは反対がなかった [4:38]。

法によれば、全ての閣僚は三時間が経過した後、に会合の打ち切りを要求できる。・・・それ故、我々はツィスリング氏の諸提案を次回会合が開かれると同時にすぐに票決にかけよう [4:38]。

ゴルダ・メイルソンに関する提案について。この問題についても決定の余地はないが、移民相は彼女がこの件について行うよう彼女に要請せねばならない [4:38]。

⑦ シンボル委員会

[彼らは] M. シェルトク大臣を、D. レメズ大臣の不在期間におけるシンボル委員会のメンバーとして選出する [4:38]。

⑧ 国家評議会の議題

[彼らは] 1948年7月1日の国家評議会のセッションの為に、次の議題を承認する。

A) 概観 B) 大統領職についての決定 C) 大統領の選出 D) 「統治の諸措

3. 予備的考察——本議事録に見る優先的審議事項とアラブ問題——

本節では、前節2で見てきた本議事録の内容から把握される暫定政府における優先的な審議事項を五項目に分けて整理し、概観と解説・考察を行う。本議事録全体では（3）のアルタレナ号事件の審議に多大な紙幅が割かれているが、その他の議題も内容的には劣らず重要であるため、立項は優先度の高い順ではない。複数の項目にわたるアラブ問題は独立して立項せず、「終わりに」でまとめて述べる事とする。

（1）軍と農村への即時追加動員

6月20日閣議でベングリオンは「今日承認する事が不可欠な結論」[3: 96]として、36～40才の者に軍か農場への動員命令を出す事に内閣の理解を求めた。これは停戦を和平のステップではなく戦争準備期間と捉えるベングリオンの方針を背景としていた。彼は「軍と農場」という「二つの戦線」があるとし、「農場の戦線は軍の戦線に劣らず死活的であり影響力がある」、「動員が必要なのは諸部隊を強化したり補充部隊をつくったりする為だけではないという事である。・・・農場の問題が非常に死活的である事が明らかになった」と述べ、「すぐに、訓練され塹壕を掘るであろう人々を農場に送らなければ」ならないとする [3: 96～97]。

ベングリオンが「動的な戦闘軍」のほかに農村における「静的な戦闘軍」[3: 97]の必要性を強調した背景には、入植村を国防の基盤・対アラブ戦争の最前線と捉えてきた社会主義シオニズムの核心的な価値観があり、それは入植村の強化の為に大規模なアリヤーを閣議で再三主張してきたツイスリングにも共有された価値観であった。ベングリオンのこれらの発言が恐らくエツィオ

ン・ブロックの悲劇を念頭においたものであった事は、一同が直感的に理解したと思われる。同じ閣議で彼が述べる様に、アラブ軍団の砲撃の前に要塞は無力で、塹壕が必要である事はエツィオン・ブロックの潰滅の教訓であった。しかし追加動員については宗教政党出身の三閣僚が強く反対し、6月6日・16日のいずれの閣議でも決定する事ができなかったため、20日閣議でベングリオンが「焦眉の急」[3:97]であるとして冒頭で提起したのである。三人のうち唯一出席していたフィシュマンは徴兵を逃れた若者がいるのに36~40才を追加動員するのは納得がいかず、彼らの動員によって「イシューヴの生活は破壊される。完全な家族というものが失われていく」「(特にエルサレムの子供のいる)家族を破壊する」[3:97~98]と反対し、シャピラとレヴィンが出席できる時に決めるべきだと主張したが、ベングリオンはこの動員はこの年令以上の人々が既に動員されているエルサレムには適用されない上、テルアヴィヴが爆撃されないためイシューヴは「幻想の中に生きて」おり、追加動員は延期できないとした。「あなたは家族について心配しているが、我々[が心配しているの]は——イシューヴなのだ」[3:98]——ベングリオンのこの言は、アルタレナ号事件の論議でも浮かび上がる事になる世俗閣僚と宗教閣僚の認識の溝を象徴していた。

ベングリオンの必死の議論から浮かび上がるのは、彼がモデルとした英軍では実戦兵士の十倍の人数が後方業務に当たっていたのに対し、イスラエル国防軍ではその比率が僅か1.4倍弱で後方業務に若い女性を入れざるを得ない状態であった事である。追加動員しなければ「我々の持ちこたえる力は崩れるだろう」[3:97]という彼の危機感は死傷者、脱走兵、及び現に戦っている兵士たちの極度の疲労により「兵力が使い果たされている」[3:96]のみならず、後方から前線に廻す余力がもはやないという状況に発していた。この為フィシュマンを除く閣僚全員の賛成により、36~40才の者を軍と農場に動員するという閣議決定がなされた。但し農場から動員される場合は、負担を考え「現地編

成隊に所属し、場所から場所へと移されない」事も決定された [3:102]。ツイスリングは「最大限の労働力を動員してそれを、イシューヴがそれによって支えられているところの農業諸部門が破壊されている場所に」向ける事をも主張して [3:103]、6月6日閣議（議題⑨）で否決された16才の者を農場労働に動員するという自案を蒸し返したが、動員しないという前の決議は取り消さない事が決定された。なお労相が関係諸省と協議の上、動員された人々の中から必要に応じて農場労働にふり向ける事となった。

（2）ベルナドット和平提案前夜の外交

① シェルトクの「異論」をめぐる波紋

6月20日閣議でベントヴは、6月16日閣議で閣議決定がなされなかったエルサレム（国際化に同意するか否か）、アラブ帰還問題、ヤッフオの運命（11月29日決議通りユダヤ人国家領となるべきか否か）についてシェルトクが党内演説で「未決の問題」と発言したとの報道を受け、政府見解がないものについて外相が公的に発言すると政府見解として受け取られるのではないかと質した。自身は穏健派であり、対立する政党の出身ながらシェルトクの立場に一定の敬意を払うベントヴは外相への個人的・政策的批判を意図するわけではなく断った上で、閣僚が政府見解と異なる内容の公的発言をする事の不適切さを問題にしたのであった。これに対してシェルトクは政府決定のない問題について断言したわけではなく「未決だと言った」[3:106] までだが、断言するに近かった点（エルサレム回廊）もあるので少々行きすぎたかも知れないと認め、エルサレム回廊の放棄に否定的であった理由として世論への考慮を挙げている。

解説すると、テルアヴィヴの政治家がエルサレム問題について「未決」と発言する事は1948年6月には熟慮を要する事になりつつあった。5月半ばから6月上旬にかけてエツィオン・ブロックの潰滅⁴³、旧市街の陥落、エルサレムへ

の輸送隊の大量の流血、同市への補給路沿いにあるラトルンをめぐる戦闘での夥しい戦死者に加え、配給制が敷かれたエルサレム市内の耐乏生活とアラブ軍団の絶え間ない砲撃⁴⁴による民間人死傷者の増大が、自分達の闘争を正義の防衛戦争と見る愛国的感情と⁴⁵、流血の犠牲の正当な代償として「ユダヤ人エルサレム」の所有を求めるエルサレムの市民感情を高揚させていた⁴⁶。「国際化」の意味もテルアヴィヴの政治家とエルサレムの当局者の間では受け止め方に懸隔があった。テルアヴィヴ、特に外相シェルトクにとって「国際化」は国連分割決議に基づく国際協調路線を意味し得たが、イギリス当局の往年の敵対的な政策や停戦委員会（議事録では「領事委員会」）の不当な介入⁴⁷を集中的に経験してきた現場エルサレムにとっては「国際化」とは外国支配の下におかれ続ける事にほかならず、テルアヴィヴの政治家が考えるほど中立的な紛争抑止策ではなかった⁴⁸。加えて、新補給路は完成したもののテルアヴィヴは包囲下の我々の為に最大限の補給の努力をしてくれなかったのではないかと、我々の流血の犠牲と忍耐をテルアヴィヴは分かっているのかというエルサレム側の疑念もテルアヴィヴとの間に感情的疎隔を生じつつあった⁴⁹。エルサレム文民当局の責任者であったジョゼフと連絡を取り合っていたシェルトクがこの温度差に、そして「エルサレムの国際化」という自らの外交路線と「ユダヤ人エルサレム」を求める世論の懸隔に気付かぬ筈はなく、「未決」発言のバランスを取る為にエルサレム回廊の放棄に否定的な発言をしたのだと思われる⁵⁰。エルサレムとユデヤ丘陵の間に位置するエルサレム回廊がエルサレム・テルアヴィヴ間の道路をはじめラトルン戦線が展開された一帯を含み、ユダヤ人社会にとって安全保障上の生命線と考えられていた事からすると、回廊の放棄に否定的な発言自体は世論の要求する最低ラインをクリアした無難な発言であった。しかしここで彼が、その発言はあくまでも世論を考慮したもので、自分の本当の考えは別の所にある（つまりこの問題さえも「未決」で考慮の余地があるかも知れないと考えている）という含意を匂わせている点は注目されよう。

シェルトクの党内での「未決」発言と、その後の閣議で彼がそれを撤回しない事に対して、7月2日閣議で「力による制圧」を唱える事になるベングリオンとグリェンバウムが危機感を持った事が議事録から読み取れる。ベングリオンはシェルトクの回答についてこの場での議論を望んだグリェンbaumの提案は受け入れなかったものの「この問題は、将来における紛糾を防ぐ為に話し合いと定義を要する」[3:107]として、いずれ閣議で明確化が行われるという決定に持ち込んだ。ベングリオンが「これらの問題については『踏み越えられぬ』境界線が決定される」事は必要だという抑えた表現で牽制しようとしたのは、エルサレムの国際化に反対し、アラブ帰還も拒否し、ヤッフォはイスラエル領であるという6月16日閣議で彼が強調した立場と全面衝突するシェルトクの「異論」であった。首相と外相の対外政策の相違はもはや党内問題ではなく、連立内閣の質疑の場面で改めて公然化したのである。しかも次項で見る様に、シェルトクが6月17日にベルナドットに対しても同様の「未決」発言をしていた事が同じ閣議の中で判明する。

② 6月17日のシェルトク＝ベルナドット会談の報告

ベルナドットとの6月17日会談についての報告(6月20日)の中でシェルトクは、国境線と難民について「未決」という言葉を繰り返した事に触れる。ベルナドットはこの会談についてユダヤ側の立場がアラブ側と逆であったと回想しているが、実際にはシェルトクは自国の譲れぬ原則と共に、譲歩と解され得る要素をも、「未決」という表現でベルナドットに伝えていたのである。

(i) 問題全体への見解(総論)

シェルトクはベルナドットの求めに応じて問題全体への見解を述べたと報告するが、その要点は、イスラエル国家の主権を否定する和平案は受け入れられない(すなわちイスラエル国家が実効的に存在している事実は交渉の対象にならない)、及びその主権は11月29日決議に基づく、という二点であった。第一の点について彼はベルナドットに「我々にとって問題は『パレスチナ』問題

の新たな解決策を探す事にあるのではない。我々にとってその問題「パレスチナ問題」は「既に」解決されたのであり、この解決策が平和的方法で実現され得るかどうかという事に我々は大変関心がある」[3: 112~113]と述べているが、それはベルナドットに対する彼の次の言明と共に、左右を問わず今日までイスラエル政府の基本的立場となる考え方を要約していた。

根本的な事実、すなわちイスラエル国家の実効的な存在の事実に関しては、・・・もし相手側がこの国家は非合法的であり、その政府を承認してはならぬと主張しても——これについて交渉はあり得ない。これは自らの存在を人々 [העם] の意志に由来させ、選出された諸機関に立脚している政府であり、その政府は実効性を持ち、その統治は日毎に強化されているのである [3: 113]。

戦争に頼るユダヤ側の方向性を批判したバンチに答えてシェルトクは、ケマル時代のトルコ共和国が民族国家を形成する過程でギリシアと戦争し、ギリシア正教徒を追放したにもかかわらずその後両国関係は安定しているという事例を引きつつ、イスラエル国家の生存を犠牲にした平和はあり得ないという立場を繰り返す。「だが我々がその様な事「[和平]」を必要とするのは、我々が存在する限りに於てであって、我々の生存を犠牲にしての事ではない。我々にとって王国的な「国家的な、ממלכתי」生存の問題と、生存及び発展の能力を備えた国家は——そこから下りてはならぬこの最小限の領域によって保証されるのであり、それ故に我々は、和平がこの土台に立脚している場合にのみ我々自身の為に和平を思い描く事ができる。従ってユダヤ人国家の樹立と、その防衛と、その実効的存在、これらこそが和平の不可欠な条件である。それらなくして平和はないだろう」[3: 115]。

イスラエル国家の主権が11月29日決議に基づくという第二の点については

シェルトクは、11月29日決議からの「後退はあり得ぬ」[3:113] 一方、戦争によってつくられた諸事実、「戦争の[様々な]出来事が新たに開いた問題」については考慮が必要だという慎重な表現で、イスラエル側の領土的獲得を反映した有利な変更なら排除しないという話の流れを巧みに導いている。しかし彼が閣議で再現したやりとりから窺われる様に、この論理は両刃の剣であった。シェルトクが「我々に対するキリスト教世界の道徳的義務」[3:113] (キリスト教世界がホロコーストに対する償いとして、ムスリムがユダヤ人に軍事的圧力をかけてエルサレムを支配しようとしている状況を阻止せねばならない事を指す)を根拠として「イスラエル国家とエルサレムの領土的連続性」の確保すなわち「道の征服」の問題を、できれば「交渉という方法で」、それができなければ「戦争という方法で」解決すると強く出たのに対してベルナドットは、11月29日決議の国境線では防衛が難しい事を理由に国境線修正を示唆してきたのである。これに対してシェルトクは、微細な修正ならよいが「根本的な変更」、特に放棄については論外であると答えた。従って彼は、閣内では議論の俎上に上っていたネゲヴの放棄の可能性には触れず、西ガリラヤの獲得等の「我々に有利な修正」に言及するにとどめたが、そもそもアラブ側がイスラエル国家を承認していないのに国境線問題から議論するのは矛盾している、とベルナドットに対して指摘する事も忘れなかった [3:113~115]。

更にシェルトクはベルナドットらに対し、自分達は経済連合が成立するという前提の下に11月29日決議の異常な形の国境線に同意したため、経済連合が成立しない場合には問題が白紙に戻り、国境線の修正が視野に入ると伝えた。ベルナドットらが経済連合はユダヤ人国家の承認の為の不可欠な条件ではなかったと応じると、シェルトクは経済連合以外にもイギリスのアラブ諸国支援、国連からの援助の欠如、我々が持ちこたえる力、アラブの逃亡という想定外の要素があり、アラブの逃亡が「我々にとって未決の問題をつくり出している」[3:116]と述べた。すなわちシェルトクは、経済連合の不成立とアラブの逃

亡により「未決の問題」が生じた故に、11月29日国境線の変更が正当化されると主張した事になる。

シュルトクは、イスラエル建国へのアラブ諸国の強い反対の理由をバンチから問われた際に、三要因を挙げたとも報告する。第一にアラブが外国人であるユダヤ人の存在を望まない事である。アラブの民族的覚醒の後にユダヤ人が到来したため共存が成功しなかったとも彼は付言しているが、ここで彼が両民族の対立をアприオリなものとしてではなく、民族意識が発生した世界史の段階や両民族が邂逅したタイミングという、偶然の要素の不運な重なりから歴史的に捉えている事は興味深い。第二に彼は、ユダヤ人の成功はクルド人など中東の他の少数派を刺激するため、少数派を支配したい汎アラブ運動にとって不都合であったとする。第三に彼は、ユダヤ人が「東方に新しい社会概念と社会関係を導入している」点を挙げ、ユダヤ人の持ち込む社会主義等の思想がアラブ諸国の現体制にとって不都合である事を示唆した。

(ii) アリヤー、アラブ帰還、アラブ財産（各論）

6月17日会談の前半で譲れぬ原則をベルナドットに提示したシュルトクは、会談後半の各論をめぐる意見交換では譲歩ととれる要素も提示した事を、6月20日閣議で続けて報告している。

その報告によると彼はまず、移民の数・出自・来住のペースなどあらゆる面で「いかなる制限もない」アリヤー [3:117] を主張した。「これはユダヤ人主権についての根本的問題であり、我々こそがいかにそれを行使するかを決定するだろう」[3:117] と彼は述べ、従ってアリヤーの制限が長期に及ぶと停戦継続が難しくなるとベルナドットに伝える。その上で彼は「制限されないアリヤー」と言っても次の様な限界はあると留保した。ホロコーストにより「この地に移住せねばならなかった人々の大半がもはや生きていないので、[この地に] 着く事ができない」[3:117] 事と、「我々にとって重荷となるであろう人々をこの地に移住させない」[3:117] 事による限界である。後者について

はシャピラも6月27日閣議で言及しているが、移民の選別に閣僚が公的に触れた箇所として注目されよう。シュルトクは、ベルナドットと共通の結論には達しなかったがアリヤーを制限する事はなさそうだという感触を得た、としている。

アラブ帰還については、ベルナドットは、連絡担当官についての話の最中に「無人になった200のアラブ村がある」[3:111]と言いかけたシュルトクの言葉を遮ったため、先刻は「何を言おうとしたのか」、パレスチナ・アラブ人が帰還したいとしたらどのような立場をとるか[3:118]と自分の方からシュルトクに尋ねた。シュルトクは停戦期間を含めて戦争中の帰還は考えられないこと(停戦期間は平和につながるという事が判明するまでは「戦争における一段階」と見なす)、更に平和が回復された後帰還できるかどうかは「和平の条件にかかって」おり、「我々は、この問題を未決のまま保持する事を我々の義務と見ている」[3:118]と答える。更にベルナドットのアラブ財産についての問いに答えて、「財産権を侵害しない」「個人の財産の諸問題と、政治的・民族的問題はそれぞれ別個に話し合われる」「その問題は我々にとって未決であり、戦争後にもたらされるであろう解決の性質にかかっている」[3:118]という三点を述べている。特に財産については、「政治的・民族的問題」としては放棄されたアラブ財産は接収して政府財産にするという既定の方針があったが⁵¹、それとは別に「個人の財産の諸問題」として個別に補償に応じる可能性がある事、すなわち「原則」と「個別のケース」を切り分ける柔軟な対応を否定しなかった点は注目されよう。

解説すると、戦争中のアラブ帰還は考えられないという点については閣内合意があったが、国境線については論争がある上、平和が回復された後のアラブの帰還や財産の補償が「和平の条件」や「解決の性質」にかかっているという点については、帰還や補償そのものに否定的なベングリオンの見解(特に6月16日閣議における)と懸隔があり、閣内合意が存在するとは言えなかった。

従ってシェルトクが6月17日会談で国境線・アラブ帰還・アラブ財産について、改めて交渉に開かれている様なニュアンスのある「未決」という言葉をベルナドットの前で繰り返した事は、閣内の懸念を呼ばずにはおかなかった。一週間余り後のベルナドット和平提案をめぐる論議では、シェルトクの方針に従来から理解のある閣僚らでさえ、同提案におけるイスラエルにとって不利な内容はシェルトクが「未決」と公言した事にも原因があるのではないか、という疑念を表明する事になる⁵²。

③ ネゲヴにおけるエジプトの停戦違反

6月27日閣議でシェルトクはネゲヴへのユダヤ人補給隊がエジプト軍に阻止された事件の顛末を次の様に報告する。ボンデが介入したがエジプトはあくまで阻止するとの態度であったため、ボンデはイスラエル側に軍事行動の自由があるという6月25日付の許可を出した。輸送隊は引き返したが、ユダヤ人世論は自国が直ちに軍事行動に入る事を要求して記者会見で外相を質問攻めにする程激昂しており、シェルトクは国内対策としては参謀本部との協議を踏まえて「我々は我々が必要であるときと場所で行動するだろう」[4:14]という声明を発表して世論を抑制せざるを得なかった。この様に説明した上で、彼はクファル・ダロムの様な包囲されて深刻な状況にあるネゲヴの入植地の上に安易に飛行機を飛ばすと、停戦違反になる恐れがあるとも指摘している。更に彼は、ネゲヴでのエジプトの執拗な行動の背後に、国内危機から世論をそらそうとする意図があると見ていた。シェルトクが1948年末のヌクラーシー暗殺につながる政権の不安定さを正しく見抜いていた事が窺われる。

④ その他のロードス島関連事項

6月27日閣議でシェルトクは、ロードス島でのイスラエル側とベルナドット側のスタッフ会談は極めて一般的内容で役立たなかったと述べている。更にシェルトクは、旧市街の非軍事化構想についてスタッフを通じてベルナドットに確認した結果、ベルナドットは旧市街のみの非軍事化を提起するつもりはな

く、エルサレム全体についての構想は持っているがまだ固まっていない事が判明した、とする。一方、米國務省・財務省関係者との話に基づくワシントンからの報告（現状及びイギリスの利益がそこでいかに反映されているかについて）を受け取ったとも報告している⁵³。

（3）アルタレナ号事件関連

本議事録では6月27日を除く全閣議で、アルタレナ号事件関連の言及や審議がなされている。以下、それらを閣議横断的にまとめつつ考察を加える。

① アルタレナ号事件直前の右派軍事組織の動向

6月20日閣議ではエルサレムから帰ったグリェンバウムが、同市におけるイルゲンとレヒの活性化⁵⁴、及びこれらの組織と自分の折衝について報告している。アルタレナ号事件直前の右派軍事組織の動向を知る手がかりとなるため、まずその内容を見ておきたい。

グリェンバウムはイルゲンが、エルサレムはイスラエル国家領ではない故に「イスラエル国家の中で彼らに適用される全ての事はエルサレムでは彼らに適用されない」という前提で行動しているため、「もし政府がエルサレムをイスラエル国家に併合すると宣言するなら——彼らは自分達の武器を置くだろう」[3:134]と指摘する。すなわちグリェンバウムはイルゲンが民族の目的に奉仕するという意味で政府と目標を共有しており、政府が彼らの理想と合致する政策をとった場合には政府に服従するという行動原理を備えていると見ていた。彼は、軍が必需品を供給する代わりにイルゲンが軍当局の権威を受け入れるという妥協が成立したとも報告する。

レヒについてはグリェンバウムは、彼らがエルサレムで独自の活動を活発化させ、当局と紛争を起こしていた事を報告している⁵⁵。この報告で注目されるのはグリェンバウムが、「我々が彼らを助けに来る事ができる前には、つまり——停戦が終わる前には」彼らの行動計画を実行に移さぬ様に[3:134]と

か、彼らの拠点が破壊されてしまったので新しい拠点の為に必要な家屋は与えられると伝えるなど、レヒにも妥協的なシグナルを送りつつ折り合いをつけたとしている事である。解説すると、閣僚によるこの様なアプローチは、停戦中には政府は公然とは援助できないが停戦が終われば援助できる、すなわち〈彼らの行動は停戦中だからまずいのであって行動自体が間違っているわけではない〉という政府側のメッセージと解される危険があったであろう。この時には問題化しなかったが、グリュンバウムはアルタレナ号事件でも同様の交渉をイルグンと行ったため、逸脱組織の行動を正当化しかねない独断の交渉として閣議で批判される事になる。

② アルタレナ号事件発生の経緯

6月20日閣議でシェルトクは、その日の夜に着くと予想されるアルタレナ号の来航の経緯に言及する。「停戦の努力はイスラエル国家の存亡の根幹に関わる」[3:120]と考えていた彼はこの件を「ユダヤ人による、極めて分裂した形での停戦違反」[3:119]であると、ワイツマンからの懸念の電報⁵⁶にも触れつつ「停戦に対する我々の全ての考慮と、我々がそれにつぎ込んできた努力に見合わぬトラブル」[3:120]であると述べた。「ベルナドットが50か国の政府に対して、これらの国に彼のオブザーバーたちが来る前にエレッツ・イスラエルに向けての移民の出国を許可しないよう要求した」事に憤慨する外務省の部下らを、「我々がこのステップ〔アルタレナ号の出航〕について知らなかった事こそベルナドット側からすれば適切ではない」「彼がオブザーバーを派遣でき、この件について諸政府に要請しなくて済むよう、全ての出航について知らせるという我々の義務に立脚すべきだった」[3:120]と叱正した事も、シェルトクは報告している。この様にシェルトクがこの事件を国際的考慮からも懸念していたのに対し、ベングリオンは自らが主導する政府への許すべからざる挑戦という国内的観点から主に受け止めていた事を、その後の閣内論議は示している。

③ アルタレナ号事件への対処をめぐって

(i) 6月20日閣議における論議

ベングリオンは閣議の最中に受け取った副国防相ガリリからの手紙を読み上げ、ベギンらに限界まで譲歩したにもかかわらず彼らは暫定政府を無視した行動を取るに及んだと述べる。「二つの軍が存在する事は不可能であり、二つの国家が存在する事も不可能」[3:145]と断言するベングリオンにとって、問題は停戦違反ではなく、暫定政府の「統治権」と威信という国内的側面にあった。

私は今その事について、我々の側からの停戦違反の危険性、及びその後に展開したであろう国際的紛糾の観点からは論じない⁵⁷。政治は、戦時にあっては私の関心を惹かない。しかし軍は明日戦闘に入る事はできず、もし入るとすると——その場合はそれ[軍]の決定によるのであって、ベギンの決定によるのではない。統治権をベギンの手に渡して我々の軍を解体するのか、それとも彼に分派的行動をやめる様に言ってもしやめなければ——発砲するのか、我々は決めねばならない。・・・[3:145]

他方、ベングリオンはこの事件が「アラブ人に対する戦争ではなくユダヤ人に対する戦争」[3:145]すなわち内戦を引き起こす事をも危惧し、できれば穏当な処理を望んだ。シェルトクがイルゲンに対する初動からの実力行使を主張した際にも（「ユダヤ人を集合させ、海岸近くに集結しているエツェルの人々500人を蹴散らさねばならない。船の人々は一度には降りて来ず、ボートに分乗するだろう。我々は全ての降船者に武器で対峙しよう。我々は彼らを拘禁し、彼らの武器を解体しよう」[3:146]）、その対処は彼らの到着場所が分からない故に簡単ではないとし、ベギンを逮捕する様にというベントヴの要求（後にシェルトクも再三要求している）に対してもそれには閣議決定が要ると

述べ、ベルグソン以外については逮捕に消極的であった。またベントヴが、本件の解決後、イルグンに徹底的に合意を守らせる為の警告を与えるよう提案した際にも「この件を穏当に始末する事に成功するなら、それだけで充分だ」[3:152]と答えている。

ベントヴは「この国の諸法に沿って本件を扱うよう、国防相に課す事を提案」[3:147]する。ベングリオンもこの件についての決定がなされるなら本件を引き受ける用意があり、不可欠な程度で力行使するがなるべく人々を傷つけない措置をとるとした。議論の続きはガリリとヤディンを呼んで行われるが、そこでベングリオンは「国防相に法に従って行動する事を委ねる」というベントヴの提案を政府の意見に基づいて実行に移す用意があると言明する[3:150]。また「その旅団の司令官と共に政府のメンバーがいて欲しいというイガエル〔・ヤディン〕の要求を理解する」[3:151]とした上で、時間内に十分な兵力を集結させられない場合には「機会を逸した」[3:151]という事で「何も行ってはならない」[3:150]という考えを示した。すなわち軍事行動には政府の威信がかかるため敗北が許されず、制圧できる確証がなくてはならなかったのである。この事を念頭に、求められる時間に十分な兵力を集結させられた場合には参謀本部に対抗行動の権限を与える、という閣議決定が満場一致でなされた。すなわち現場の司令官は実力行使せずに彼らを阻止するべく努力せねばならないが、それが不可能な場合には実力行使が許される事となった[3:152]。

(ii) 6月22日臨時閣議における論議

閣議冒頭でベングリオンは深夜2時にスタヴスキー、ベギン、メリドールが指揮するアルタレナ号がテルアヴィヴに着き現在テルアヴィヴ沖に停泊中であること、「その船を屈服させる事ができる為に要する全兵力を集結させよという指示」を既に出しており[3:153]、軍は行動に入れという政府の指示待ちである事を報告した。すかさずシェルトクの質問が飛ぶ。

シェルトク その船の積み荷がどうなったか知っているか? [3:154]

ベングリオン 一部はクファル・ヴィトキンで船から降ろされ、我々の手中にある [3:154]。

シェルトク つまり、船から降ろされた物が我々の手中にあるという事か? [3:154]

ベングリオン 船から降ろされたのは僅かな部分にすぎない。積み荷の大半はまだ船内にある [3:154]。

シェルトクが停戦違反を真剣に懸念している事を知っているベングリオンは、クファル・ヴィトキンで降ろされた武器は僅かでしかも自分達の手中にあり大半は船内にあると答えるが、他方ではやや後で、南部にいるエツェルの諸部隊がラムレ近くの持ち場を去ってクファル・ヴィトキンへ行き、その「諸部隊の多くの兵士たちがその武器を持ってネタニヤに逃走し始めた」[3:154～155]とも述べている。移民については「全員我々の人々の助けで降ろされた」[3:154] 故に国連には報告しなかったとも述べる。つまり実際には武器も移民もこの時点で既に拡散していたのであった。他方ベングリオンは、シャピラの要請に応じて事件直前のイルゲンとの交渉の経緯を概略次の様に説明する。——ベギンによる船の来航阻止の試みは通信障害により失敗し、来航直前にもガリリとベギンの間でやりとりがあったが、武器を政府に引き渡す様にと、いうガリリの要求をベギンらは結局受け入れず、この様な状況下で6月20日には武器引き渡しと必要な場合の武力行使についての閣議決定がなされた、と。

この後、閣議の焦点はグリュンバウムが独断でイルゲンと交渉した問題に移る。グリュンバウムは「武器がエツェルと我々の共同の監視下に倉庫に移され、その武器はエツェルの諸部隊の装備に充てられる」[3:155] という妥協案をイルゲンに持ちかけたのであるが、その理由について次の様に弁明する。

6月20日閣議決定の趣旨は、彼らの抵抗の願望を挫くに充分な兵力を集結させる事にある、つまり「目的はどんな代価を払ってもエツェルを屈服させる事ではなく・・・その件を終熄させる事だ」[3:157]と自分は理解していたため、「彼らの屈服と我々の軍への武器引き渡し」が実現する様な交渉ができればそれで充分な筈だと考えて交渉に入った、と。グリュンバウムは、交渉で解決する事で彼らが対政府テロ組織に戻る事を防げるとも主張する。更に彼は単独交渉に至ったその他の理由として、閣僚が彼らと接触するのは望ましくないというベングリオンの返答が政府見解ではなく彼の個人的見解であると思っていた事と、内相として治安事項に介入する権限があると考えた事を挙げる。

ところがここでグリュンバウムがイルグンの交渉相手から知り得たとする経緯が、閣内の論議を、単独交渉の是非から事件のより深い真相をめぐるものへと変貌させる。その経緯とは、事件に先立つ司令部とイルグンの長い交渉では船を帰す事や武器引き渡しについては議論がなく、武器の分配及び武器を保管する倉庫とその警備が交渉の焦点であり、「武器の20%を直ちにエルサレムに送る事が合意された。残りの分配については合意に達しなかった、なぜなら彼ら[エツェル]はその武器がエツェルに与えられ、軍と共にエツェルの手でそれが分配される事を要求したからだ」[3:158]というものであった。以上の経緯をガリリの手紙（既出）の内容と考え併せると、問題の核心は停戦違反ではなく武器の分配問題であったという結論に達した、とグリュンバウムは述べたのである。

解説すると、グリュンバウムがイルグンの交渉相手から聞いた話は大筋に於て事実であった。具体的な事実関係としては、アルタレナ号の来航を阻止できない事が判明した時、シェルトクの圧力下にベングリオンはテルアヴィヴではなく離れた目立たぬ海岸に上陸する事を許可するよう、副国防相ガリリと国防次官エシュコルに秘密裡に指示した。ガリリ、エシュコル、ベギンはテルアヴィヴから離れた所に船を上陸させる事で合意し、武器の一部はまだエルサレム

で独立して行動していたイルゲン諸部隊に向けられる事でも合意した。ところがベギンは残りの武器も最終的には国防軍内或いはエルサレムのイルゲン諸部隊に与えられるべきであると主張してガリリらに拒否された為、要求をエスカレートさせて全ての武器をイルゲンの倉庫に入れる事を要求したので合意自体が躓いた⁵⁸。従って武器の20%についての合意が最終的に生きていたかという点については曖昧であった様である。いずれにせよ武器分配に関するイルゲンとの事前取り引きが存在したとなれば、政府は停戦違反の「共犯者」であった事になる。

22日閣議に戻ると、問題の核心は武器の分配であったというグリュンバウムの発言に、政府の共犯性という危険な含意を感知したシェルトクは焦点をそらそうとするかの様に鋭く口を挟む。

シェルトク 核心はイスラエル国家の権威だった [3:159]。

グリュンバウム 私は我々が何を核心と考えるのかについて述べているのではない——その交渉における核心について述べているのだ [3:159]。

ベングリオン それこそがその交渉における核心だったのだ！ [3:159]

グリュンバウム 実際には核心は、国家支配の原則に基づく武器の分配だった [3:159]。

この事を聞いた後、そして我々が流血を望まず本件の終熄を望んでいるという事を理解した後・・・——私は双方に提案を提示する事を試みる事は可能だと考えたのだった [3:159]。

すなわちグリュンバウムは、事件前からの交渉の核心が武器の分配問題であった事が分かったので、それらの武器を運んで来た彼らの「一定の権利」を尊重した「個人的提案」を提示したのだと説明したのである。しかしこの事をベングリオンに報告すると本件を進めてはならない旨の返信があり、理由として

は閣議決定の意味は力の行使のみによって本件を終息させねばならないという事でありこれは交渉である、と書かれていた。これに対してグリェンバウムは、6日20日閣議決定では「力のみによる本件の終息」とは言われておらず「事態が対峙に帰着しない程度に大きな兵力」[3:160]が想定されていたけれど、と閣僚たちの前で反論する。20日閣議決定の際のベングリオンの前提は相手が服従しなければ実際の武力行使も辞さないというものであったが（6月20日[3:150]）、グリェンバウムは武力行使は彼らを政府に反対する地下テロ組織にしてしまう故に避けるべきだと力説した。「私は、我々が我々の主権[スヴェレニユート]を守り、武装闘争の際には我々の方が優勢である事を証明するだろう、というこの事に賛成だ。しかしその事にはある限定がある。その限定とは、我々の国家の中で政府と法に敵対する方向性を持つ地下テロ組織を、我々のもとでつくり出す事に、我々は全く微塵も関心はないという事だ。それ故、我々が持つ全ての力をもってしても、又この力を行使する用意ができていたとしても——我々は交渉を拒否できない。もし交渉の可能性があるなら——交渉を行わねばならない」[3:161]。彼は、暫定政府とイルグンの停戦は「我々に対抗する地下テロ組織が創設されない様な形で」[3:162]、すなわち指導者の処刑を避ける形で行われるべきだとも主張した。

グリェンバウムが武力行使の危険性を気につけたのに対し、シャピラとベルンシュタインは政府の「共犯性」に話題を戻した。船の到着前に「折り合いをつけ」ようとするベギンに対して移民の組織化自体が今はよくないのだと釘を刺したシャピラは、「我々が百パーセント正しいという事については誰も異論はない」[3:163]が、イルグンと交渉しようとする政府の宥和的態度にそもそも問題があったのであり、武器を秘密裡に受け取る用意は政府側にもあったとイルグンが国連に暴露する恐れがある、と指摘した。

[それは] 我々が辿り着いた事に辿り着こうとする [エツェルへの] 理解

も〔問題の〕一部だったのではないか、という事である。私はこの問題への対処の際に我々が示した理解と忍耐の、正にその程度について訝しく思わざるを得なかった。力によって今これらの人々を正しい道に引き戻す事が可能だと考える人々は論理的でなければならなかった。もしそうであるなら交渉の余地は全くなかった。エツェルの連中が明日来てこの交渉の内容を暴露できない様にする為にも。そして彼らはその様な事もためらわないだろう。彼らは明日真相を暴露してこう知らせてしまうだろう。イスラエル政府は国連の監視者たちに、これについて知らせずに武器を〔船から〕降ろす用意があったが、問題は誰に武器が渡されるかであった、と〔3：163〕。

シェルトクは「〔では〕どう行動すればよかったのか？」と一言返す。シャピラの答えは明快であった。本来はいかなる交渉もせず武器引き渡しを命ずるか、世界に向けて公表・抗議するか of the いずれかであった。今やイルグン是我々が共犯者であったという真相を暴露するであろうから我々の手は縛られてしまったのである、従って「流血に帰結させる事は我々には禁じられた」〔3：164〕。しかもパルマッハに対して統制がとれないでいる国防軍がイルグンを武力で矯正する事などできようか、内戦状態では外部の敵からの危険がある、従って流血の衝突をやめるよう直ちに指示するべきである、とシャピラは主張し、本件の処理をする三人委員会の選出を提案した（やや後にフィシュマンも、直ちに停戦命令を出し解決の為に二、三人の委員会を選出する、という同様の要求をしている。彼は世論がイルグン寄りである故に、戦火を停止して彼らと折衝すべきであり、さもなければ地下組織のみならず「国民の中の露骨な反乱」〔3：176〕に直面するだろうと警告した）。

ベルンシュタインは「国家は二つの軍事的権威の中では存続できず」〔3：165〕という認識から20日閣議決定に賛成したのだと述べ、外部からの大きな

危険にさらされているというシャピラの意見に同意しつつ、政府自体が停戦違反に加担していた事の重大性と、それにもかかわらずイルグンだけに責任を負わせようとした欺瞞を指摘した。

通告「国連にアルタレナ号来航について知らせた事」に関しては・・・別の大事な事がある。この通告の中には我々を苦しめた者の中に顕著にあった、不誠実さという一つの要素があり、この様な事については既にシャピラ氏が示唆していた——我々の政府は、[停戦]違反に加担し停戦条件に反して武器を受け取る用意ができていたのだと。武器が来る事自体の中に[停戦]違反に等しいものがある。政府がこれを行うか、それとも逸脱組織がこれを行うか——これが本質的な議論なのではない。我々が国連にそれについて報告せずに我々の手中に武器を受け取る用意があったという、その事実が問題なのだ [3: 165~166]。

ベルンシュタインは軍や政府には善意の意図があった事は疑わないとしつつ、「これ以上の内戦なき本件の収拾に向けて努力せざるを得ない」[3: 166]と締め括る。

シャピラとベルンシュタインがこの様に停戦違反への政府の「加担」に考慮して武力行使に難色を示したのに対し、国防軍将校を輩出していたマパムの二閣僚は政府や軍の権威への挑戦には断固とした措置で臨むべきだと主張した。ツイスリングは6月20日閣議決定の意図は「イスラエル政府の権威を実現させる事」[3: 166]であったとし、同閣議で参謀本部の者に「我々の意図は[軍事]行動を防ぎ、可能な限り流血を避ける事だ。しかし[彼らが]決定を受け入れなければ——力も行使すると」[3: 167]明確に指示した以上ぶれてはならず、軍事行動はイルグンが妥協してきた時点で中止する事もできると述べる。彼はシャピラがイルグンとパルマッハを同列に論じた事に不快感を表す

と共に、アルタレナ号がテルアヴィヴに移って来た事は挑発行為にほかならないとし、国の主権や権威を尊重しないならせめて合意は守るようイルグンの責任者に通告すべきだと憤った。ベントヴは政府がアルタレナ号来航に「便乗してひそかに停戦を破る意図はなかった」[3:169]という事実をグリェンバウムは確認すべきだとし、「軍の政治的反乱」[3:169]では責任者の処刑が通例で、禁錮や恩赦なら分からぬでもないが「政府が自ら支配の放棄に寛容心から同意するなどと」[3:169]というのは論外であるとした。彼はポーランド出身のグリェンバウムにユダヤ人がオゾンと妥協せず厳正な処断を要求した例を思い出させ、国家に於て政府が他の分子と交渉する事はある得ず、6月20日閣議で「国防相に法に沿って行動するよう課す」[3:170]という原則を自分が提案したのは、交渉ではなく、という意味が込められていたとも示唆する。「我々は流血を防ぐ為にあらゆる努力をせねばならないが、政府の放棄まで行っているのではない」[3:171]と彼は強調した。

シェルトクがここでグリェンバウムやシャピラの提起した問題に話を戻す。彼はアルタレナ号の出航を止める試みが失敗し船が接近していたという状況を現場担当者の立場で想像して欲しいと一同に促しつつ、その時「三つの可能性」があったとする。第一に見ぬふりをする。これは停戦違反が露呈するため不可能であった。第二に国連に丸投げする。これは思いつかなかった。第三に彼らと折衝して折り合いをつける。これは「イスラエル国家の存在を掘り崩す」のでできなかった。この様に述べた上でシェルトクはグリェンバウムが政府とイルグンの間で武器の山分けの話がつかなかったかの様な言い方をしたのはもってのほかであり、20%の武器がエルサレムに行く事も含めいかなる合意もなかったとして、グリェンバウムの政府メンバーとしての越権行為を厳しく非難し、ベギンら三人の逮捕を主張した。更にシェルトクはベルンシュタインの「不誠実」との指摘を踏まえて、国連に報告せざるを得なかった事情も説明している。彼の結論は武力を使ってでも彼らを服従させ、その後どうすべき

かは話し合う事とし、ベギンらは逮捕すべきだというものであった。

ローゼンブルートはシュルトクの見解を全面的に支持し、シトリトも内戦を恐れる一方国防軍以外の軍事力は存在しないという法を踏まえ、法と秩序を守るかどうかには新生国家の存続がかかっているとしてシュルトクに同調する姿勢を示した。彼は武器の存在が国連に知られたからには「それらが法的・国際的方法で国に引き渡される事ができるのか大変疑わしく思う」[3: 176~177]と懸念し、交渉の為の委員会の選出というフィシュマン（とシャピラ）の提案については、交渉が失敗したらそれでも武力を使わずに要求を通すのかという同じ問題に直面するだろうと指摘した。武力行使を容認する 20 日閣議決定に「苦渋の心で賛成票を投じた」[3: 177] カプランもこれら穏健派閣僚とほぼ同意見であり、イルグンが交渉を悪用する危険がある上に、政府が彼らと対等に交渉する事を口にする事自体が「我々を破壊する」とし、「力[の行使]なくして彼らに影響を及ぼす事ができるという信念はない」[3: 177]と述べた。また彼は、閣議と新聞各紙における、イルグンとの交渉と彼らへの寛大さについての言説がイルグン内の急進派を煽る危険性を指摘している。

ベングリオンはこの事件が戦争努力のみならず国の存在そのものを危険にさらしており、「軍を破壊する試み」「国家を欲する試み」[3: 177~178]である故にいかなる妥協もあり得ないとし、イルグンの解体に到達する為にあらゆる譲歩をしたにもかかわらず彼らはその合意を破ったのだと述べる。これは「[エツェルへの] 理解も [問題の] 一部」[3: 163]であり「訝しく思わざるを得なかった」というシャピラの発言を受けたものであったが、シャピラが事件直前の政府とイルグンの交渉の事を恐らく言っていたのに対し、その本質を外して答えている。

更にベングリオンは首相に会う手段がなかったというグリェンバウムの主張を斥け、「これは国内治安の問題ではなく——これは国の生存の問題」であり、「兵力に行動する可能性が与えられなければ力で威嚇する事が不可能であ

る事」[3: 178~179]を全員で確認した上で20日閣議決定がなされた経緯からしても、グリェンバウムの交渉は「災い」「誤り」であるとした。彼は、軍の一部が反乱を起こし記者会見で嘘を述べている以上いかなる妥協もあり得ないが、彼らが船を明け渡し、政府の命令に従えば逮捕のみで絞首刑はなく、本件が片付いた暁には恩赦もあらうと述べる。ここで彼が寛大な処置の根拠としている「ユダヤの強盗」[3: 179]が何を意味するかについては、「終わりに」で触れる事としたい。

最後に船・武器の扱い・逮捕の三点が話し合われた。まず船については船が公海に去る場合には介入しないが入植地に接近する場合には対抗行動をとるというグリェンバウム＝シャピラ案と、政府に引き渡されるよう船に要求するという案が別個に票決にかけられ、後者の案が採択された。また船が国外に去り政府の同意なく帰る事はないと申し出る場合には、政府はその事について話し合うと決定された。ベングリオンはこの閣議決定の意味を次の様に確認した。——彼らに船を引き渡すよう要求し、同意しなければ「彼らが屈服せざるを得ない様な力で彼らを包囲する」。彼らがこの地の海岸から船を去らせると知らせてきた場合は「政府はその事について話し合い、彼らに回答を与える」。すなわち流血なく船を捕える全ての努力をするが、他に方法がなければ武力を行使する [3: 184]。

武器の取り扱いについてはシェルトク、シャピラ、ベントヴが武器を国連に引き渡さずに最終的に自分達が獲得できる方向を考える旨の発言をしている。シェルトクは武器を船内に残し、停戦期間中国連の監視下に置く事をボンデに提案するつもりだとした。そうすれば「停戦終了と共に我々はそれを降ろす事ができ」[3: 183]、これが「武器を最終的に我々の権限内に受け取る見込みを最大限に守る唯一の措置」[3: 183]であると彼は説明する。ベントヴは武器を降ろして国連の監視下で倉庫に預けられるよう要求し、国連が同意しなければ国連の監視下に停戦終了まで船内に残す事で妥協すればよいと提案し、その

様に国連側と交渉する事が閣議決定された。

逮捕についてはシャピラが「彼らの指導部の逮捕は政府の特別な決定を要する」[3:185]と主張したのに対し、ベントヴは法に従って逮捕する事はある得ると示唆し、グリェンバウムは逮捕の問題も含めて屈服後の措置については改めて話し合う事を提案した。ベングリオンはグリェンバウム案に賛成し、屈服後の措置については次回閣議で話し合う事が決定された。なおこの事件について話し合う国家評議会で閣僚は、政府の立場に反する発言をしてもよい事になった。

(iii) 6月23日臨時閣議における論議

屈服後の措置については次回閣議で話し合うという22日閣議決定にもかかわらず、早々と逮捕者が出た事をめぐって、翌23日の臨時閣議では大論争が起こる。22日閣議決定を「人を逮捕しない」[3:190]趣旨で解釈していたフィシュマンは逮捕者全員の釈放を要求し、シャピラも「政府決定なしに」右派の拠点を襲撃して逮捕者を出した事について「合法的でない、ユダヤ的でない事がなされた」[3:191]と抗議した。これに対してシェルトクとツイスリングは、逮捕する様という決定はなかったが逮捕してはならぬという決定もなかった、と反論した。

フィシュマンは全員の釈放以外世論を静める方法はないと主張し、「その発足後最初の一か月間に既にユダヤ人によるユダヤ人の流血が起きているところの政府に参加する事に同意しない。この命令が出されなければ——私は政府を辞任する」[3:194]と断言する。逮捕の理由を問うローゼンブルートにベングリオンは武器による襲撃の咎であると答えるが、シャピラは逮捕現場である「ゼエヴの砦」には一般住民も大勢いたと反論する。カプランは逮捕についての報告書を待って翌日釈放について話し合う事を提案した。結局、「昨日と今日逮捕された全員を釈放する」(フィシュマン)と「すぐに取り調べ判事を任命して、彼が被拘禁者の中にいる移民全員と、武器を携行していて捕まったわ

けではない人々全員を、彼らに対する重大な告発がある場合を除いて釈放する権限を持つ様にする」(ベングリオンとグリュンバウム) [3: 197] という二案が出て、後者の提案が可決された。

自案が否決されたフィシュマンは辞任を表明する。連立崩壊の危機に直面してベングリオンは慰留に努め、グリュンバウムも恩赦の方が釈放よりよいと宥めるが、フィシュマンの決意は固くシャピラ(彼も辞任をほのめかした)と共に退席する。彼らの退席後、「犯罪者たちへの恩赦の付与の為の諸条件」等を検討する閣僚委員会(ベングリオン、ローゼンブルート、グリュンバウム)の設立が決定された。

解説すると、この論争で改めて浮かび上がるのは閣内の宗教・世俗の対立軸である⁵⁹。逮捕と流血を「合法的でない、ユダヤ的でない事」[3: 191]と捉えたシャピラは、「我々は正に自分達の手で政府とこの地のユダヤ人支配を破壊している」と内輪もめの危険を指摘し、次の様に述べた。「今回その船の司令官が恰も犯罪者の様に逮捕された——彼は「不法」移民をこの地に連れて来て武器を持ち込んだ[だけだ]。しかも政府はこの武器について交渉を行っていた！」[3: 196]。ここでのシャピラの非難には、政府自体が停戦合意を破って武器を受け取る用意があったという前日の論点に加えて、武器持ち込みや移民を連れて来る行為自体はそもそも「不法」・「犯罪」ではないという新たな論点が付け加わっている事に注目したい。これはベングリオンに「十人の無実の人々を逮捕するより百人の犯罪者を釈放する方がましだ」[3: 198]と述べたフィシュマンにも共通する、ユダヤ教正統派から見た犯罪観であったと言えよう。彼らにとっては、ユダヤ教的倫理にさえ反していなければ逮捕や流血にかなげる必然性はなく、むしろその場合は「身内」であるユダヤ人の逮捕や流血の方が「悪」なのであった。このユダヤ法に基づく感覚と世俗国家の法概念の衝突は、フィシュマンと、閣内で最も世俗的信念を持つ一人であるツイスリングの次の応酬にも鮮烈に表れている。

ツイスリング ……逮捕してはならぬという決定も採択されなかった。その上前の会合では、イスラエルに現にある法に従って彼らに対抗する行動をとるという決定があった。

フィシュマン イスラエルに、などと言うな——ゴイーム〔異教徒〕の中に、と言え！

ツイスリング これは失礼、ラビ・フィシュマン、だがイスラエルの法では我々も権威を認められた教師 [מורה הוראה, モレー・ホラー] なのだ。……[3:191~192]

ラビ・フィシュマンとシャピラ氏へ一言。政府の法は〔悪法でも〕法だが、イスラエルの法は法ではないと。これはどういうわけか？ 私は逮捕の詳細を正確には知らないし、それらの逮捕が合法的でなかった事が判明すれば——その事は修正を要する。しかしこうした全てにもかかわらず、ラビ・フィシュマンとシャピラ氏がイスラエル国民 [עם ישראל] にとって基本的な利益が危険にさらされている事実をここで持ち出さず、体制の権威への侵害の事実を持ち出さず……彼らがいかにしてその船から海岸や人々を攻撃し、いかにして人々の命を危険にさらし、いかにしてテルアヴィヴに侵入しようとしたかを語らない事がいかにして可能なのかを理解するのは難しい。イスラエル国家の法も尊重する必要のある法だ！……[3:192]

暫定政府が最後に行き着いた「恩赦」という結論は、世俗閣僚の望む厳罰と宗教閣僚の望む無罪放免の中庸をとった妥協策であり、政治的信条面で中間にあるグリェンバウムが積極的に主導したのも自然の成り行きであった。ここでベングリオンが「恩赦」の語は「よくない行為がなされた」事を意味するので適切だとしたのに対し、カプランは「清算」という語の方がよいと提案しているが、これは「恩赦」の語が外部に許容的な印象を与える事を恐れた為と思われる。

れる。恩赦という結論の含意については、ベングリオンが6月22日に言及した「ユダヤの強盗」という言葉を手がかりとして「終わりに」で考察する事としたい。

④ アルタレナ号事件の国際的波紋

6月27日閣議でシェルトクは、ワシントンからの報告によると暫定政府のアルタレナ号事件への対処はアメリカの一般世論とユダヤ人世論の大半に支持され、米政府と主要国公使館から「強力で迅速な対応」[4:11]と高く評価された、と報告する。

続いてシェルトクは6月25日に受け取ったテルアヴィヴの特使（国連事務総長特別代表）の手紙が非礼であったと報告する。シェルトクによればその手紙は、暫定政府の行動の中に「停戦違反があった恐れがある」[4:11]、というのも移民と武器が移入されたからだと述べ、人々と武器の所在について納得のいく情報を示さなければ「仲介者は我々が停戦を破ったと安保理に知らせねばならなくなるだろう」[4:11]と警告していた。この手紙への返信でシェルトクは、政府は自国民に発砲した上「自らにとって非常に必要であり停戦後の時期の為にそれを取っておくという希望があった武器を犠牲にするまでに鋭い手段をとった」[4:11]と反論した、とも報告する。彼は更に、6月末のネゲヴでのエジプトの停戦違反がイスラエルの停戦違反によって引き起こされたというリンケージ論が起きないか「非常に懸念した」[4:12]が、幸いベルナドットは特使の手紙からは距離をおいて暫定政府の事件への対処を評価した様であり、両事件を切り離して対応してくれた、と報告している⁶⁰。

この報告から知られるのは、シェルトクが武器と移民の行方を追及する特使の手紙を「非礼」とする一方（原文を見る限り、国連の立場からすると当然の内容であり特段非礼な表現はない）、武器と移民の行方については真相と異なるか、曖昧な説明を国連側にしている事である。武器については特使への返信の中で「我々の情報によるとクファル・ヴィトキンではいかなる武器も降ろさ

れなかった。我々がエツェルの手中に見出した武器は彼らの個人的な武器であり、船でもたらされた全ての武器はその後火をつけられた」[4:11]と書いた、と報告している⁶¹。船から弾薬を降ろしていたのを飛行機で旋回中に目撃したと知らせてきたボンデに対しても、「我々の情報によると武器は降ろされず、我々が見つけた武器はエツェルの連中の個人的な武器であったという説をとっておいた」[4:12]とする⁶²。移民についても特使への返信には「そこに移民がいたとしたら——彼らはその夜のうちに、我々の軍が行動を開始する前に〔船から〕降りた」[4:11]と書いたと報告し、国連側からの武器や移民についての問い合わせにも明確な回答を避ける旨を示唆している。

解説すると、議事録を見る限り、シェルトクが停戦合意との関係で武器の拡散を真剣に懸念していた事に疑問の余地はない。しかし拡散が現実化してしまうと彼はその武器を政府が最終的にいかに獲得するかに関心を移し、閣議では武器分配取り引きの存在は認めず（或いは追及しようとはせず）、国連に対しては武器の真の所在について曖昧な説明を行っている。彼のこの言動は、停戦合意という国際規範を遵守する義務と、＜武器持ち込みと移民を連れて来る事自体は正しい＞という民族主義的信念を両立させようとした結果であった様に見える。その様な言動は、原則と現実を切り分けて、起きてしまった現実に対応するプラグマティズムとも、或いはベルンシュタインの指摘する様な「不誠実」とも捉え得よう。シオニズムの粹を出られず、又ある程度行動派とも協調せざるを得ない事から来る、その後もイスラエルの穏健派につきまとう＜不誠実な対外協調＞とそれに伴う矛盾をシェルトクも免れ得なかった一例である。ここで、他地域の政治にも共通する、ナショナリズムにおける「穏健派」とは何かという問題も改めて浮かび上がる。他方、政府とイルゲンの「共犯性」の根本的な原因となった＜武器持ち込みと移民を連れて来る事自体は間違っておらず我々の正当な権利である＞という、両者が共有した信念については、リボヌート（主権）との関連で考察を要するであろう（後出「アリヤーの諸問題と

『ユダヤ船団』」項を参照)。

(4) エルサレムとその近郊をめぐる情勢

本議事録ではアルタレナ号事件に関する論議と共に、停戦前のエルサレムとその近郊をめぐる戦闘を振り返る「行動派」の言説が目立つ事も一つの特徴となっている。例えば6月20日閣議ではエルサレムについてのグリェンバウムとベングリオンの報告があり、6月27日閣議でもベングリオンがエルサレムにおける初期の征服等について触れている。審議事項ではないものの、ここではこれらの言説を抽出・整理する事により、1948年6月にエルサレムをめぐる〈征服とユダヤ化の記憶〉と〈困難と犠牲の記憶〉という二種類の記憶が結合して「国民的記憶」の一部が形成されつつあった事に注目する。アラブ地区のユダヤ化に伴う難民流出、放棄されたアラブ財産の掠奪と接収、エルサレム・テルアヴィヴ間の道沿いのアラブ村の征服・無人化など行間の暗部もできる限り析出し、考察を加える。

① 〈征服とユダヤ化の記憶〉ベングリオン

6月27日閣議でベングリオンはエルサレムからパルマッハの兵士たちが各自の武器を持って引き上げた件で、同市の兵力が手薄になったのではないかというシャピラの質問に答えて、引き上げたのは近郊の戦略的高台の疲弊した兵力である（から問題ない）と説明すると共に、そもそもエルサレムは兵力が枯渇しているという誤解があるが、同市では実際には「重要な征服」があったと強調した。

・・・これに対してエルサレムであった程大きく重要な征服があった場所はこの地にはない。・・・私はいかにその事に我々が成功したかという事に喜び、驚いた。なぜならもし状況が逆で、エルサレムに我々の兵力の二倍のアラブ兵力があったとしても——彼らはこれらの場所を我々の手か

ら征服する事に成功しなかっただろうからだ。シャイフ・ジャラーフの陥落故に些かその輝きを失ったこれらの征服の価値は計り知れぬものだ。旧市街を除いてアラブ人をエルサレムに見出す事はできない。・・・私の手元には征服を強調する様々な色で塗られた地図がある。それらは、軍の手中にあり我々の手に移った地帯〔すなわち〕アラブの手中にあったが〔今は〕我々の手中にある地帯と、今はアラブの手中にある地帯を示している。私は征服地を訪ねた時、強く印象づけられた。これは歴史的価値を持つ強力な征服であり、それを遂行した人々は大きな歴史的権利を持つだろう。しかしこの事は我々がエルサレムで受けた激しい打撃によってかすんだ。〔その打撃とは〕35人が斃れた事、ネビー・サムエル〔アン＝ナビー・サムーイール、前出〕、エツィオン・ブロック、旧市街である〔4：7〕。〔二段落省略〕

もし我々がエルサレムの町を失敗の町と見るなら、歴史的眞実と我々の諸征服に対して不正義を行う事になる。これは我々がそれらの為に高い代価を払った諸征服の町である。我々はそこで大きな諸征服を持ったのであり、多分それらは決定的な歴史的価値を持ち、エルサレムの相貌を完全に変えるだろう。私がカタモンの街路を歩き回り、旧市街からの巻き毛を垂らしたユダヤ人を見た時——これは偉大な光景だった〔4：8〕。

ベングリオンはエツィオン・ブロックの救援に行った35人の若者の死亡（1月18日）、エルサレム近郊のアラブ村アン＝ナビー・サムーイールのパルマツハによる掌握の失敗と35人の隊員の死亡（4月26日）、エツィオン・ブロックの潰滅（5月14日）、シャイフ・ジャラーフの喪失（5月16日）、旧市街の陥落（5月28日）がカタモン等の「決定的な歴史的価値」を持つ征服をかすませたが、「高い代価を払った」征服の価値は「計り知れぬもの」であるとする。ここでベングリオンが「ネビー・サムエル」「エツィオン・ブロック」「旧

市街」と地名を列挙するだけで「何があったか」を説明していない事に注意したい。この様な語りは、これらの地名が、6月20日閣議における彼の報告に出て来る「ラトルン」「バーブ・エル・ワド」等と共にユダヤ人の犠牲を象徴する地名として、人々が説明されなくても暗黙裡に一切を共有する「国民的記憶」の一部となった事を示唆している。しかし他方でベングリオンは、「エルサレムの相貌を完全に変えるだろう」と誇らかに述べたアラブ諸地区の征服がアラブの流出と財産の放棄を伴っていた事には触れていない。エルサレムのアラブが放棄した財産については、エルサレム緊急委員会の長としてユダヤ人の食糧供給に責任を持っていたジョゼフが、旧市街の陥落によって新市街に流入したユダヤ教正統派の人々を含む避難民に、アラブの残したカタモンの家屋を使わせたと回想している（詳細については後出④を参照）。

② <困難と犠牲の記憶 その一>グリェンバウムの報告

6月27日閣議におけるベングリオンの上記の発言に対してグリェンバウムは、「ベングリオン氏がそれらについて話した諸征服は・・・包囲の初期だった。その後困難な日々が始まり、徐々に深刻化して遂にハダッサー〔病院〕と、町から完全に切り離された〔ヘブライ〕大学の陥落、その後に旧市街の陥落という事態に我々は立ち至った。だから初期の征服は忘れ去られたのだ」[4:9]（6月27日）とコメントした。彼は一週間前の6月20日閣議では、より具体的に、過去二か月間にエルサレムが経験した困難を五点に分けて語っている。

第一点はエルサレム諸地区の征服にまつわる困難と旧市街の陥落である。ユダヤ側はカタモン、タルピヨート、ホマーを掌握したがシャイフ・ジャラーフの掌握には失敗した。エルサレムの南にあるラマツ・ラヘルは救援の遅れにより失いかけたが、結局再征服できた（5月25日）。彼は、旧市街における停戦交渉がラビと司祭によって試みられた事や、領事委員会と赤十字の齟齬など当事者のみが知り得る内情にも触れている。

第二点はエルサレムへのアラブ軍団の砲撃である。砲撃していたのはイギリス人将校らであり、ドイツ軍のワルシャワ占領時と同様に市街戦がなくてもエルサレムは陥落すると思われる程砲撃が激しかった、とグリェンバウムは述べている。彼は、シェルトクが閣内の停戦支持を伝えてきたにもかかわらず自分が停戦に反対だったのは、ラトルンを奪取できればエルサレムを解放できると信じていたからであり、あと一週間は食糧なしでも持ちこたえられたため、包囲を突破していたら我々は重要な既成事実をつくれただろうとするが、シェルトクは包囲を突破する確証はなかったと応じている。

第三点と第五点はエルサレムの体制に関連する事項である⁶³。グリェンバウムによると「エルサレムは実態としてはイスラエル国家に併合されたが、同時に、政府は我々の同意の下にエルサレムを国際地帯に変えると考えられていたため、国家へのその併合は正式のものではなかった」[3:126] 故に、軍の体制が支配的で地区司令官シャルティエルが実権を握り、軍は文民当局の意見を顧みず「全ての市民的事項に介入」[3:127] し得る状態であった⁶⁴。軍当局と文民当局は対立し、文民当局の中でも市当局・ケヒラー委員会・エルサレム緊急委員会の権限の線引きが難しく、政府の代表者が不在の状態であった。そこでグリェンバウムは政府の代表者を決めるよう政府に要請し、自分が任命される事を期待したが政府からは回答がなかった⁶⁵。その様な折、カプランが別の人物にアラブ財産の監督やユダヤ機関のアーカイヴスの管理等の権限を与えた事は面白くなかったと彼は報告する。解説すると、カプランはアラブ財産の購入命令を出す権限をローゼンブルート及びシトリトと共に与えられ（5月20日閣議の議題⑤ [1:48]）、エルサレムへの供給を担当する委員会（他の委員はツイスリングとシャピラ）の委員長でもあった（6月14日閣議の議題② [3:29]）。グリェンバウムの不平は主観性を免れないものの、閣内で最も穏健とされるカプランでさえアラブ財産の接収や、アーカイヴスの整備を通じての国家の公式史観の形成に関わっていた側面に光を当てている。

第四点はエルサレムへの補給問題である。4月20日を最後にエルサレムに補給隊は到着せず、市民は食糧について「なし得る限りの手段が尽くされ」ていない[3:127]と感じていた、とグリェンバウムは報告する。ここでアラブの残した食糧について問われた彼は「彼らは大量には残さなかった」[3:127]と答え、その後に1頁分の削除がある。彼は第一次大戦中のペトログラード程ではないものの、それなりの飢餓があった中で住民は「抑制を失わなかった」[3:129]とし、問題はむしろ大砲の不足で、後半は迫撃砲で応戦したものの効果を確かめようがないため、絶え間ない砲声に耐えるのが難しかったと述べている。

グリェンバウムは以上を踏まえ次の様に結論した。第一にエルサレムを大砲で装備すべきである。さもないとエルサレムは一、二週間しかもたず旧市街と同じ運命をたどる事になるため、停戦違反を恐れている場合ではない。第二に、エルサレム・テルアヴィヴ間の閣僚の往復用に少なくとも二機の専用機をおくべきである。第三に、多くて三人から成る委員会を設け、委員長が政府を代表する。信任されるなら自分が委員長を引き受ける用意がある。エルサレムの諸問題はあまりに重大なので解任されようとしているシャルティエルに支配権を集中させず、暫定的な軍司令官が任命されるべきである⁶⁶。これらの提案に対してベングリオンは、大砲については答えなかったが、全国的問題として砲撃には要塞より塹壕の方が有効であると改めて指摘している。閣僚の専用機については、レハヴィア等に止まっていると爆撃される危険がある上、スピットファイアに撃墜される恐れもあり、そう簡単ではないと説明する。政府を代表する委員会の任命については、その必要はなく、エルサレムに関する業務は閣僚間の分業でよいと答えている。

解説すると、グリェンバウムの報告にはアラブの残した食糧関連と推測される削除部分があるため、エルサレムから流出したアラブについて彼がどの様に認識していたかを議事録から知る事はできない。他方、彼がイギリス人将校に

よる砲撃をナチス・ドイツのワルシャワ包囲のイメージと重ね合わせて語っている事は、暫定政府によるベルナドット提案拒否の一要因にもなった、イギリスに対する行動派の憤りの深さを物語っている。

③ 〈困難と犠牲の記憶 その二〉ベングリオンの報告

6月20日閣議でベングリオンはグリェンバウムに引き続き、4月下旬以来のエルサレムへの補給とラトルン戦線を振り返る報告を行った。それは、グリェンバウムとジョゼフに彼が送った「[エルサレムの]解放の見込みと、食糧を町[エルサレム]に持って来るという見込みはあるが、但し我々にはその事の成功の保証はない」[3:141]という電報の背景説明として、エルサレムへの補給路沿いのラトルンの制圧が失敗した一方で代替の補給路が開かれた経緯を、概略次の様に述べたものであった。——4月20日のエルサレムへの最後の輸送隊にはベングリオンも参加し、先頭のベングリオンらは無事に着いたが、列の途中の部分はダイル・アイユーブからの襲撃を受けて損害を蒙った。建国宣言後エルサレムを視察したベングリオンは「もし今夜エルサレムが陥落したら——これは我々が直面できるかどうか疑わしい程の打撃となるだろう」[3:137]という思いからエルサレム街道への兵力増強を要求したが、参謀本部は他の戦線の状況が深刻であるため不可能だと反対してベングリオンは孤立し、彼らの意見に屈せざるを得なかった。しかしその後戦況がいよいよ深刻になったため、比較的楽な状態にある中部戦線から一部隊を引き抜き、装甲部隊及び二部隊と合体させて新しい旅団を編成し、5月26日にエルサレム街道に投入した。装甲部隊はラトルンを征服したが、引き継ぐ筈の歩兵部隊が退却してしまったため攻略は失敗した。この時装甲部隊は大損害を蒙ったが、道すがら、ラトルンが征服できない場合に代替の補給路になる道の道沿いにあるバイト・ジーズとバイト・スースィーンを征服する事はできた。ラトルンには停戦直前に再び攻勢をかけたが、手違いで失敗し、作戦を担ったアメリカ人将校ストーンも死亡してラトルンを奪取できぬままに停戦を迎えた。しかし上記の二

つのアラブ村の征服により、ラトルンを回避する新補給路（ビルマ・ロード）が開かれた。

解説すると、ベングリオンが以上の状況報告全体を通じて、ラトルン攻略の失敗が部隊間の協調の欠如や手違いなど、発足したばかりの国防軍の構造的欠陥に起因する事を示唆している点が目を引く。彼はこの欠陥を「規律」の問題であるとし、規律の浸透には一般に時間がかかると強調している。他方、作戦をめぐる参謀本部との論争、5月末のラトルン攻撃の際の粉碎された装甲部隊の凄惨な姿、新補給路を開くまでの苦闘の描写は閣議での報告としては異例に詳細で生々しく、ラトルン戦線へのベングリオンのこだわりを示している。報告の中ではパープ・エル・ワド（パープ・アル＝ワード）の地名が出て来る一方、バイト・ジーズとバイト・スースィーンの征服の詳細には触れられていない。「ラトルン」や「パープ・エル・ワド」におけるユダヤ人の流血は、補給路を脅かすアラブ村の掃討は当然であるという論理を閣内に改めて共有させたであろう。その様な論理の暗黙の共有があったからこそ、それらのアラブ村の征服の詳細は語られず、また語られる必要もなかったのである。

④ 軍の規律・その他

6月27日閣議でベングリオンは停戦に伴って発生した諸問題にも触れている。彼は以前から問題になっていたエルサレムからの市民の流出について⁶⁷、「門戸開放と共にエルサレムからの大衆の逃亡があるだろう」[4:8]と心配されているがエルサレム市民自身がそれを否定しており、道が自由に開かれても転出者は多くて2000人と見積もられているため、ツィスリングが関係者から聞いた転出希望者数1万5000人というのは誇張であると主張した。エルサレムの空洞化を恐れるベングリオンが、士気の低下と更なる流出を防ぐ為に数字を低く提示しがっている様子が窺われる。

また6月20日閣議におけるラトルン戦線についての報告（前述）の最後にベングリオンは、エルサレムをめぐる問題の一つとして軍の規律を挙げ、命令

系統に関わる規律が軍に浸透するには時間がかかると改めて強調している。また6月27日閣議では、パルマッハがエルサレム近郊の戦略的高台から引き上げた問題（前出）に関する質問に答えると共に、エルサレムへ送られた食糧が軍と住民の間でどの様に分けられているのか、及び「パルマッハの人々がエルサレムから掠奪品を出した故に道を閉鎖した」[4:6] 件を問う質問にはそれぞれ、エルサレムで調査せねばならない、参謀本部から報告書を受け取っていないと答えている。

ここで、エルサレムにおける食糧の分配、掠奪、軍の規律をめぐる状況を知る手がかりを与えるジョゼフの回想録をもとに、背景について若干解説したい⁶⁸。ジョゼフによればエルサレムでは4月頃既に、アラブ地域で見つかった食糧を兵士が盗む行為が発生しており、他方食糧の分配に関しては、彼が長を務めるエルサレム緊急委員会は入手した食糧の12.5%を軍に配分し、民間人の名簿から兵士の名前を削除して重複しない様に配給した。更に同委員会はカタモンやバカアにおける軍と民間人によるアラブ財産の掠奪を止めねばならなかったが、その掠奪はドアや窓枠ごと持ち去り家具はおろか水道の蛇口まで盗むという凄まじいものであり、「金も時間もかかる修理」をしてからでないと旧市街やラマッ・ラヘル等からのユダヤ人避難民にアラブの残した家屋を使わせられないという「重大な」結果をもたらしたという。また旧市街の陥落後ジョゼフは全避難民の為の仮住居をカタモンに直ちに準備させ、掠奪を防ぐ為に特別警察を配置した。8月に軍知事に任命されてからは彼は、アラブが残した家財を避難民に配る為に接収する事を命じる事ができる様になった。「我々は財産の多くを後で戦争の被害者に割り当てる為に何とか集め、放棄された家屋を、それらが避難民や、自宅を失ったその他の人々に割り当てられる様になるまで何とか守った」と彼は述べている。とりわけ注目されるのは、軍知事に任命された後の「我々の新たな問題の一つは敵の財産の管理であった。[既に] 始まっていた放棄された財産の掠奪を止めるのは容易ではなかった。それ

は特に、掠奪の多くが制服を着た男たちによって行われたからである」と述べるくだりである⁶⁹。ジョゼフの以上の記述は、本議事録で断片的に触れられているエルサレムにおけるパルマツハの掠奪事件が軍によるアラブ財産の掠奪の氷山の一角であった事や、この様な掠奪の横行がエルサレムのアラブ地区の破壊にかなり影響していた事と共に、当局によるアラブ財産の「収集」活動が軍や民間の「掠奪」と実は不分明の状態の中で行われた事をも示唆している。

(5) 経済とアリヤー

本議事録は、暫定政府がイギリスに従属しない独立した国家経済の確立を、アリヤーの問題と同様、主権に関わる喫緊の課題と捉えていた事を示している。従ってここでは、「主権」に関わるという点で共通する、経済とアリヤーについての審議を同一項目で括って概観する。

① 経済危機と新通貨発行

6月27日閣議ではカプランの新通貨発行の提案が話し合われたが、アングロ＝パレスチナ銀行に通貨発行を任せる事がどの程度イギリスへの経済的従属を招くかが議論の焦点となった。

カプランはまず、経済は貨幣不足の為に危機的な点に近づいているとして、6月の不足分はローンの資金とアメリカの資金と「放棄された敵の財産」[4:18]で賄ったが、7月の予算は500万リラを超えると予想される支出のうち400万リラが不足する計算になり、銀行も信用貸しをする能力がない故に「暫定通貨の発行を余儀なくされる」[4:18]と述べ、それまでの経緯を次の様に説明した。——自分は[1947年]10月に新通貨発行の準備を開始したが紙幣の印刷が難点であり、英・米・スイスでは政府を持たぬ限り貨幣を準備する事は難しいと言われた。しかしアングロ＝パレスチナ銀行なら一、二週間以内に多額の銀行券をもたらし得る。本来は五、六か月あるなら通貨発行を担当する政府銀行を設立でき、又その様にすべきだが、その間経済がもたないのでアン

グロ＝パレスチナ銀行による新通貨発行の提案を閣議に持ち込んだ次第である。その場合、同銀行に通貨発行権を与え同銀行の銀行券が出回る事になるが、それを現通貨と交換する事が義務付けられるという布告に基づいてこの銀行券の使用が保証される。政府の手元に 1000 万リラ（二、三か月予算を均衡させる額）残る様にするので 3000～3500 万リラを発行する必要がある、暫定的な法定通貨として宣言される。つまりある日付から現エレットイスラエル・リラは通用しなくなり、三、四週間の移行期間が新旧貨幣交換の為に設定される。

次にカプランはこの計画の難点を説明した。第一はアングロ＝パレスチナ銀行が暫定通貨を少なくとも五年間流通させる事を条件としている事であり、これについては自分は半年から一年間、つまり通常政府の樹立までとする事を提案した。第二にこの件を公に議論できない事であり、これは新通貨の保証の役割を果たすエレットイスラエル・リラの流出の危険があるからである。とは言え「最終的な合意を我々は政府と国家評議会の認可に持ち込まざるを得」ず、「あと二、三週間で新リラを発行できるようその事を進展させなければならない」[4：20]。カプランはこの様に述べて政府が計画を承認し、自分とベルンシュタイン通産相とホロヴィッツ大蔵次官にアングロ＝パレスチナ銀行との交渉を課すよう求めた。ベルンシュタインはカプランの以上の説明に次の様に補足した。新通貨を暫定的であると発表すると信用が最初から崩れるのでそうしてはならず、より継続的な期間にわたり銀行に特許を与えるべきである。また新通貨発行の難しさは凍結されるリラによって保証される点だが、「通貨の保証は凍結されるリラによってのみではない」[4：21] 事を踏まえ、非公式にでも新通貨発行について米政府の同意を得るべきである。ベルンシュタインのこの意見に対してカプランは、アメリカの同意を得る事はできないだろうが、我々が通貨の利益を配分する事を知っていると見ればアメリカは通貨発行の事実を進んで受け入れるだろう、とコメントした。

アングロ＝パレスチナ銀行はイギリスで登録されているため、ツイスリングは「イギリスと結び付いている機関の通貨を発行するので、再びそれ〔イギリス〕から解放されない」のではないかと述べ、同銀行とイギリスの結び付きの程度、及びその様な機関に自国の通貨を発行させる法的・政治的リスクを指摘した。また発行されるのは「イスラエル国家の通貨」ではないことから、国際社会から見た「我々の威信」・「経済的結果」・「感情」〔4：22〕面の影響や、別の機関に発行させる可能性についても問題提起する。カプランは同銀行に回答を求めると答え、イギリス政府がいかなる件についても決定できない事をいかに保証するかが問題だとしたが、ロンドンにある同銀行の諸事項にはイギリス政府は介入できる可能性があるものでこれについては正に交渉中だと述べた。5500万リラのエレッツ・イスラエル（パレスチナ）の信用手形と利子を抱えるイギリスにとっては自国の利害に反する事は確かであり、リードマンもイギリスの同意なく通貨を発行できるかどうかについて懸念を示した、とカプランは述べる。

通貨の保証についてのシャピラの質問に対してカプランは、旧通貨と共に、自国が保有する外貨等も保証として機能すると答えている。また米財務省のホワイトからは「保証としての貨幣の70%」が手元になくてもよく、保証はむしろ「価格の保護、インフレ回避、人々に交換を許す可能性、によるものでなくてはならない」〔4：23〕という助言を受けたとした。カプランは近々政府銀行設立の為の提案も持ち込むつもりだと述べるが、ベングリオンは今最終的に決める必要はなく、アングロ＝パレスチナ銀行との取り決めを含む最終提案をカプランが持ち込む時でよいと述べる。

カプランの説明を聞いたツイスリングは自分の懸念は当たっていたと述べ、貨幣流出のリスク、アングロ＝パレスチナ銀行が理論的にはイギリスの銀行である故にどの程度我々を縛るのか、他国（イギリス以外の）に通貨発行を頼むとするとどの位時間がかかるかの三点について明確化を求めた。カプランは自

案を今日（6月27日）通し、アングロ＝パレスチナ銀行と交渉を進めて最終合意を提出すべく急いでいたが、ベングリオンはツイスリングが説明を求めた点について専門家の意見をカプランが提出してから最終決定するとし、ベルンシュタインも本件を口外せぬよう全員に注意して審議は終了した。

② アリヤーの諸問題と「ユダヤ船団」

6月27日閣議ではシャピラが次の様に報告した。——停戦中に2万人を移住させる計画は、キプロスからの移民全般を禁止するというイギリスの決定で挫折した。しかしイギリスが動員年令でない人々に移住許可を与える事に同意した様だというロンドンからの情報が正しいなら、ハイファ港でイギリスに拿捕され今日（27日）解放された移民船二隻を四往復させれば、今後1万2000人をキプロスから連れて来られる。ヨーロッパからも移民は到着しており今後その見込みもあり、飛行機による移住も促進するが、ヨーロッパからの移民は停戦後の紛糾の為に25%減る（8000人の予定が最大6000人になる）だろう。

ツイスリングはキャンプにいる移民の就業、停戦終了後のアリヤー計画、移民船の獲得について質問した。第一の質問についてシャピラは、キャンプ内では訓練が禁じられているため移民はやる事がないと答えている。これについてはシェルトクが今なら彼らの就業を国連側に提案できると述べ、ツイスリングも彼らを、入植地に分散して建設したキャンプに分けて就業させる事を提案した。ベングリオンも労働キャンプを整備して就業できる様にする事を提案し、シャピラもシェルトクがボンデラとこの件を明確化する事を求めた。これらの意見を受けて、政府は外相に、移民相と共に移民の為に労働キャンプの設立の可能性を探る事を課す事になった。

ツイスリングの第二の質問についてシャピラは「この地の吸収の可能性」やキプロスの状況に左右され、ヨーロッパからの移民を劇的に増やす事は難しい事もあって明確に答える事はできずとし、第三の質問については船の獲得の為に「あらゆる努力をしている」[4:30]とした。これに対してツイスリング

はヨーロッパからのアリヤーは「何倍も大きくなり得る」[4:32]と述べ、停戦終了などの国際情勢に依存してはならないとし、アリヤーの可能性があってもなくても停戦終了後「我々が船を大変必要とする」[4:32]事は明白であるから船の獲得にもっと努力するよう求めた。シャピラは答えている。——船の購入提案が採択されたため15万リラを要求したが、カプランから財政難を告げられ受け取れていない。ヨーロッパからの移民のポテンシャルが限られる事については、婦女子・老人・足の不自由な人々も移住させるなら「多くの船を一杯にできる」[4:34]が、彼らを吸収する予算がない。自分はカプランに100万リラ近い規模の予算案を提出したが、カプランの報告を聞いた後にこれを容易に受け取れるとは考えていない。だからこそ自分は、兵士になれる、また自活する経済力のある移民が来るよう調整しているのであり、すなわち「我々の戦争にとって重荷になる人々ではなく我々にとって最も適切な人々を選び出している」。従ってヨーロッパからの移民の8割は「我々にとって今必要とされる人々」[4:34]で大半が兵士として動員されるのである、と。シャピラのこの発言は、ホロコーストを生き延びたヨーロッパのユダヤ人が移民として選別され、到着すると大半が対アラブ戦争に動員された現実、すなわちホロコーストとナクバの生々しい連関を垣間見させる。

シャピラが船の代金に言及したのを受けてカプランは、20万ドルを担当者の権限下に移したが、購入は簡単にはいかないらしく半分しか使っていない様だと述べた。ツイスリングは外国での船の購入について更に精力的に行動しようシャピラに要請する閣議決定を行う事を提案すると共に、外国船籍の船を備船するのに必要な資金を割り当てる事や、資金については滞米中のメイルソンにも要請する事を提案した（シャピラが彼女に要請する事になった）。ツイスリングの提案の背後には「アリヤーの可能性が将来もっと多くなると保証する事はできない。今我々には移民を連れて来る可能性が与えられた。もし我々がこの可能性を最大限に活用しなければ、多くのユダヤ人がこの地に着かない

という事の責任を我々が負う事になる」[4:36] という危機感があった。

ベングリオンは既に船舶購入の為の委員会（シャピラ、レメズ、カプラン、ベングリオン）があると述べて矢継ぎ早のツイスリングの要求を制しつつ、小さな移民船でアリヤーを行えなくなったのはエジプトの艦隊に攻撃されかねずイギリスも海上封鎖をしているからだと述べた。ベングリオンによれば、「アラブとの公然たる戦争」「イギリスの方面では海における、より隠然とした危険な戦争」[4:37] という二方面戦争の状況下で、しかも移民船が海上にある時に停戦が打ち切られる恐れもある中で、安全が保障されないアリヤーは考えられず、ツイスリングが想定する「ユダヤ船団」の獲得は「我々にとって生存の問題であり、大きなエネルギーでそれにアプローチせねばならない」[4:37] のであった。つまり船を獲得し、「十分な防衛によりそれらの船をこの地の海岸に近づける為の諸条件を保証する事」に「我々の生存がかかっている」[4:37] 事から、レメズの帰りを待たず船舶購入の委員会を開くと彼は言明する。ベングリオンは、ツイスリングの提案については海外の我々の代表に要請すると共に、次回会合の冒頭で票決にかけると述べた。またベントヴの、東欧諸国へ特使を送り移民船のアレンジに関する協定の可能性を検討するという提案にベングリオンは同意すると共に、アメリカのユダヤ人を船の件で動員する事にも触れ、適切にアプローチすれば「ユダヤ船団」を組む事も可能だと述べている。

解説すると、イギリスやアラブに攻撃されても微動だにしない、「我々自身の海軍力」（ベングリオン [4:37]）に護衛された移民船の大船団——ツイスリングが構想し、ベングリオンが強力に支持し、シャピラも実現を期待した「ユダヤ船団」——は、イギリスに従属しない経済と並んで、正にイスラエル国家の「主権」（リボヌート）の象徴であった。このような構想についての議論がアルタレナ号事件の直後にあった事に注目したい。一見別件の様に見えるこの「ユダヤ船団」の議論は、アルタレナ号事件に「停戦違反」とは別の角度から

光を投げかけている。この議論で示唆されているのは、移民自体を連れて来る事自体に道徳的な誤りは微塵もないという暫定政府の一致した認識であった。むしろ移民をできるだけ多く、イギリスの制止をかいくぐってアラブの攻撃をも撃退しつつ連れて来る事は、それを不当にもずっと妨げられてきたユダヤ人の当然のリベンジ、当然の権利であり、主権の誇らかな対外的宣言でもあった。6月27日のこの論議はアルタレナ号事件には一言も触れなかったにもかかわらず、「移民を船で連れて来る行為」自体は正当である事を再確認し、それによって、その行動を行った極右組織を暗黙裡に、かつ本質的な部分で免罪・正当化する政治的含意を伴ったのである。

終わりに——ベルナドット和平提案拒否の背景——

本論考には、前稿の補論として、暫定政府によるベルナドット提案拒否の背景をより深く考察する位置づけを持たせてきた。背景の考察自体は、本議事録の削除部分や行間を補う党内史料・日記等の周辺一次史料の網羅的使用を要するが、閣議の内容を精査するという「研究途上」段階では今すぐにその様な包括的考察を行う事はできない。この様な限界を自覚しつつも、ここではひとまず周辺文献の幾つかを参考としつつ本論考の冒頭（前篇）で提起した論点に答える事を通じて、ベルナドット提案拒否の背景を掘り下げて結びとしたい。

第一の論点は、シェルトクとベルナドットの、同じ会談をめぐる認識のずれである。6月17日会談はベルナドット提案の内容に直接影響したと考えられるが、この会談をめぐる両者の報告は、ベルナドットが極めて簡単にしか述べていないのに対し、シェルトクは相手に伝えた「譲れぬ原則」と「考慮してもよい点」を詳細に6月20日閣議で報告するという様になりにかなり温度差がある。他方、会談の10日後のベルナドット提案がシェルトクの伝えた前者の点を見落とし後者の点を大幅に取り入れていたという結果に注目すると、ベルナドット

は、シェルトクが言及した「譲歩」が「譲れぬ原則」の堅持をあくまでも前提としているという肝心な点を捉え損ねたと言わざるを得ない。ベルナドットがこの様な＜本質を外す解釈＞に陥った事が、イスラエルが拒否せざるを得ない提案を彼がわざわざ作成した一因であると考えられるが、その様な解釈の背後には、仲介者の立場に伴う一般的な難しさのみならず、イギリスやアラブ関係者との親密さというベルナドットの個人的要因も垣間見える。

職業外交官の経歴を持たず外交交渉に不慣れであった為もあると思われるが、ベルナドットはアラブ指導者らの個人的魅力に惹かれ、トランスヨルダン駐箚英国大使カークブライド⁷⁰やアラブ軍団のイギリス人将校とも頻繁に接触し、常にテルアヴィヴよりもカイロを先に訪問した事が彼の回想録に見える。その様な経緯を経て起草されたベルナドット提案は、シェルトクが6月17日に強調した原則を無視し、イギリスとトランスヨルダンの利益を大幅に考慮した内容になっていた⁷¹。イギリス及びアラブ関係者との距離が近すぎた事による先入観⁷²が6月17日会談の際にベルナドットの理解の仕方に影響し、シェルトクの主張についての＜本質を外す解釈＞に彼を導いた可能性は考えられるであろう⁷³。

第二の論点は、シェルトクの「未決」発言が象徴する穏健派と行動派の溝（これ自体については後で別途触れる）にもかかわらず、暫定政府が最後には一致してベルナドット提案拒否に傾いた国内的背景に、1948年戦争で形成されつつあった新たな「記憶」に関わる感情的要素があったのではないかというものであった。本議事録から示唆されるそれらの感情的要素の一つとしてまず挙げねばならないのは、アラブ軍団に自国将校を送り込んでいるイギリスへの不信感の決定的な増大である。イスラエル側から見れば、その将校がエルサレムを砲撃し、沿岸で移民船を拿捕していたイギリスは事実上の交戦国に等しく⁷⁴、従ってイギリスの意見と酷似するベルナドット提案は「中立的な提案」とは映らなかった。本議事録から示唆される今一つの感情的要素は、1948年4

～6月の、特にエルサレムとその周辺におけるユダヤ人の「記憶」の蓄積に関わる。過去二、三か月間に流血を伴って急激に醸成された新たな「国民的記憶」と、アラブに対し硬化する世論（後述する）は、暫定政府がユダヤ人の犠牲を無意味にする様な譲歩を含んだ提案を受諾する事を極めて困難にしたと考えられる。

第三の論点はアルタレナ号事件の政治的意味である。本論では、政府がイルグンと武器分配に関する事前取り引きをした事がある種の「共犯性」として閣議で問題になった事に注目したが、ベルナドット提案拒否の背景との関わりで整理すると、次の二点が指摘できよう。

一つは、この事件を審議・処理する過程で問題の「核心」として強調された、主権国家としての「イスラエル国家の権威」（シェルトク [3:159], ツイスリング [3:166]）や威信という考え方がベルナドット提案拒否の正に核心にもあったという事である。審議の中で閣僚らが口にした「マムラフティユート」（シェルトク [3:173], 形容詞形は「マムラフティ（ト）」）の語は、イスラエル国家の正統的な支配者が法と秩序に沿って逸脱組織（ないし異種のイデオロギー）を服従させ、ナショナルな一元적支配体制の中に組み込むというニュアンスを持っており、国家の持つ対外的な「主権」（リボヌート）の国内的側面を表現した用語として、またこの時期の国家による統治権力確立についての政府首脳らの高まる自覚を象徴する用語として注目されよう。

もう一つは、上記とも関わるが、アルタレナ号事件を審議・処理する過程で噴出した＜本来我々は国際社会の意志や規範に左右されない＞という論理も⁷⁵、ベルナドット提案拒否の際に見られたのと同じ論理であったという事である。例えばベングリオンはアルタレナ号事件について「我々の側からの停戦違反の可能性、及びその後に展開したであろう国際的紛糾の観点からは論じない」[3:145]と述べ、シャピラもアルタレナ号の司令官は「恰も犯罪者の様に」逮捕されたが「彼は『不法』移民をこの地に連れて来て武器を持ち込

んだ [だけだ]」⁷⁶ [3: 196] と発言している。これらの発言は上記の論理、すなわち具体的に言えば〈国際社会は我々の事項に本来関係なく、本件の処理も国際社会が要求するからではなく自国の必要性から行うのだ〉〈「不法」移民というのは国連の基準から見ての事であって、我々から見ればそもそも正当な移民であり本来国際社会が口を出す事ではない〉とでもいう様な、国連やそれを支持する国際社会と懸隔のある論理⁷⁷を示している。特に、本来移民は「不法」ではないという思いは閣僚全員に共有されており、それ故にこそ閣議でもイルグンが移民や武器を運んで来た行為自体を非難する声は皆無だったのであった。その行為自体はむしろ国家的な必要性でもあるが、問題はイルグンが停戦中に政府を無視する形でそれを行った事と、暴力的な手段を用いて法と秩序を乱した事にあるというのが閣内の一致した見方であり、従って彼らが政府に服従しさえすれば重い罪には問わないという考え方に大半は傾き、結局逮捕はしても「恩赦」を検討するという形で「穏当に始末」（ベングリオン [3: 152]）をつけたのであった⁷⁸。

ここでベルナドット提案拒否の背景からは若干それるが、「恩赦」の結論を出す際にベングリオンが言及した「ユダヤの強盗」[3: 179] という語を手がかりに、この結末の政治的含意を考えてみたい。

まずユダヤ法では殺人や姦通が死刑と規定されているが、歴史的にはラビたちは概して死刑を完全に廃する傾向があり⁷⁹、ヨーロッパ・キリスト教世界の中のユダヤ教徒共同体の実際の慣行としても、自治の枠組みで様々な刑罰が行われたが死刑は極めて稀であった⁸⁰。その上で「盗み」に関しては、盗んだ者は盗品を所有者に返し、盗品の二～五倍の金額を払う（盗んだ対象によって何倍払うかは異なる）という刑事的制裁が科される。盗品が持ち主に戻るという「原状回復」（民事的解決）をまず重視し、刑事罰としては拘禁ではなく物品返却と罰金の支払いで対処する点が西洋近代法と異なる⁸¹。但しタルムードは異教徒に対して法的差別を容認しており、例えばユダヤ教徒がユダヤ教徒の物を

盗んだ場合と異教徒の物を盗んだ場合とでは対処が異なる。前者のケースでは盗んだ物を所有者に返却せねばならないが、後者のケースでは異教徒の所有者に盗んだ物を返却する必要はない。タルムードのこの様な差別規定については、神学的な反感に基づく理由と共に、ユダヤ教徒が異教徒から不平等に扱われていた故に相互性を確保する必要がある、かつ異教徒との同化を防ぐ必要があったという歴史的理由も指摘されている⁸²。後者の歴史的理由は、ユダヤ教徒共同体が外部世界からの現実の差別に反応して、「相互性」の名の下に外部者に対する差別と、共同体内の道徳的な自己完結性（いずれも＜「身内」への許容性＞につながる）を正当化する精神を歴史の中で形成していった事の示唆が含まれている。

アルタレナ号事件の終局において「恩赦」という微温的解決が閣僚の大半に受け入れられた事を見る時、この様な＜「身内」への許容性＞が一つの背景的要因としてあったのではないと思われるのである。すなわち「ユダヤの強盗」という言葉が一同に想起させたであろう、ユダヤ教徒の間では物を盗んでも原状回復と罰金の支払いが済めば許される（当然死刑は避ける）というユダヤ法的犯罪観である⁸³。しかもベギンについては大半の閣僚は逮捕する事すら消極的であり、宗教政党出身の二閣僚は恩赦でも納得せずに、二日間で逮捕された全員の無条件釈放を求めたのであった⁸⁴。政府による極右の行為へのこの様な許容性（一種の「身内」への共感故の、もっと正確に言えば「身内」の理念への共感故の）と事実上の免罪の中に⁸⁵、三か月後のレヒによるベルナドット暗殺につながる水脈や、その後のイスラエル社会における極右（異質者であるアラブへの攻撃を正当化する）の長期的な伸長と安定的プレゼンスを解き明かす一つの手がかりを見る事は可能であろう。また急進的集団が少人数であってもしばしばイデオロギー的には周縁的な存在ではなく、むしろ社会や政府中枢にさえその潜在的な共感者が多数いる様な目標を極端な形で推し進める存在であり、従って社会が糾弾するのは彼らの「理念」よりも「手段」であるとい

う、イスラエルのみならず一般に紛争地や政情不安定な国家に観察されるテロリズム発生の典型的メカニズムをも、アルタレナ号事件（この事件自体は極右の起こした騒擾と呼ぶべきであるが）とベルナドット暗殺は示している様に思われる。

〈本来我々は国際社会の意志や規範に左右されない〉〈本来我々には他の国民と同様、我々の意志に従って行動する権利がある〉——アルタレナ号事件の審議の際にも、ベルナドット提案の審議の際にも共通して噴出した、共同体内部の自己完結的な価値観を国際社会の規範より優先させる考え方の中に、ベルナドット提案を扱った前稿ではポスト・コロニアルな「主権」（リボヌート）観を見ると論じたが、本稿ではそれに加えて、数世紀にわたりヨーロッパ・キリスト教世界などのユダヤ教徒共同体の伝統として継承されたユダヤ法的価値観の痕跡をとどめる論理——外部世界の価値観との調和を図るよりもユダヤ教徒共同体内部の価値観に従って自己完結的に行動する事を重んじ、同胞に対してはとりわけ許容的な扱いをすべきであるとする——もここに見えると論じたい。更に、パレスチナ問題との関わりで現代イスラエル国家が時として見せてきた国際法を軽視する対外行動の「古層」にも、ポスト・コロニアルな主権観と共に、ユダヤ法的な内外の二分法の発想とそれに基づく自己完結的な行動原理が見られるという、一歩進んだ問題提起は可能であろうか。

本論考冒頭で提起した論点は以上であるが、ベルナドット提案拒否の背景に関わる追加の論点として、戦争の進行に伴って1948年6月にはアラブをめぐるユダヤ人社会全体の空気が明らかに変化していた事、及びその様な変化を背景に政府・軍中枢内の対アラブ政策をめぐる葛藤や亀裂が深化しつつあったと見られる事について触れておきたい。

この点を論じるにあたり、本議事録からアラブ帰還とアラブ財産に関する状況を抽出しておく。まずシェルトクによれば、1948年6月半ばには「無人に

なった200のアラブ村がある」[3:111]状態に至っていた。他方、ベンゲリオンはエルサレムをめぐる「重要な征服」(6月27日[4:7])を強調しているが、それは裏を返せばアラブ地区の無人化と破壊であり、ラトルン戦線での戦果として彼が強調した新補給路の開通もアラブ村バイト・ジーズとバイト・スースィーンの破壊を伴っていた。しかしこれらの破壊についてその場で質問や異論を口にする閣僚がいなかった事は、少なくとも1948年6月下旬にはエルサレムのアラブ諸地区やエルサレムへの道沿いにあるアラブ村の破壊が国防上の必要から超党派的に是認されていた事を示している。また5月末まではツイスリングとシトリトなどによるアラブ住民の帰還や権利保障への配慮を求める議論が閣議議事録に残されているのに対し、本議事録を含め6月の閣議議事録にはその様な議論は殆ど見られない。この様に閣議議事録からは、暫定政府内に5月末まで存在したアラブへの考慮が殆ど消え、閣内の空気が一か月前と一変した事が読み取れる。

6月の議事録が示すこの様な閣内の空気の変化は、アラブをめぐる世論とどの様に对应していたのであろうか。本論ではエルサレムをめぐる市民の犠牲の増大が、自分達の闘争を正義の防衛戦争と見るエルサレムの市民感情を高揚させた事について触れた。この時期に関する研究はエルサレム以外のユダヤ人諸共同体でも同様の空気が支配的になり、社会全体がアラブの帰還や財産の返還について否定的になっていた事を明らかにしている。例えばニアはアラブ住民をめぐるこの様な社会全体の空気の変化が、潜在的に敵であるアラブ住民の中で戦う客観的な困難と共に、アラブ村の人々がアラブ正規軍に説得ないし強制されて後方支援を行ったり戦闘に加わったりした事例によっても徐々に引き起こされたとし、政策決定レベルでも社会のあらゆる現場でもアラブの流出へのアンビヴァレントな心情から事実の受容、更には流出を促す積極的手段をとるという方向へと人々の態度が変化した事、またアラブ村の破壊についても当初はエルサレムをめぐる戦闘中に死活的な戦略的手段として行われたが、戦闘が

休止すると恒常的な危険の源と見なされた（住民が戦闘に参加した故に）一群の村々が破壊されるという様に、防衛上の考慮が前にも増して優先されるに至った事を指摘する。また農村部では平和時の友好関係が敵対関係に取って代われ、アラブの退去を緊張からの解放として歓迎し、帰還する可能性がないと見ると跡地を獲得すべくアラブ村の破壊に参加し彼らの作物を収穫するなどの行為が広がっていったとも指摘する⁸⁶。都市や農村部でのこの様な友好から敵対への変化、アラブの帰還や財産の返還への拒絶的態度の広がりは、本議事録との関わりで指摘するなら、東欧からの新移民の流入によっても助長された面があると言えよう。シャピラやツイスリングが言及する様に、ホロコーストを免れたこれらの新移民は前線や入植地に続々と動員されつつあった⁸⁷。ホロコーストやボグロムを忘れ得なかった彼らにとっては自分達をかつて殺戮しようとしたドイツ人やポーランド人がアラブ人に置き換わっただけであり、ラトルンの戦士となってもキブツの防衛者となっても、地元のアラブ住民がアラブ軍を援助するのを見ると、ヨーロッパでの被害者としての記憶と重ね合わせて〈アラブ住民は自分達を殺戮しようとする敵・加害者である〉という恐怖感を容易に抱いた⁸⁸。前線や入植地に赴いた新移民のこのような意識のあり方も、アラブ村の破壊やアラブ財産の獲得をめぐる社会全体の葛藤を弱め、ユダヤ人側の加害の側面を急速に語られざるものと化した一因であったと考えられる。

しかしアラブをめぐる社会全体の空気のこのような硬化は、逆説的にも、少数のためらいや異論の存在を際立たせる。カプランの閣議での報告やジョゼフの回想録は、残されたアラブ財産が国家予算の不足分の補填に充てられたり、ヨーロッパ等からの移民や国内の周辺地域からエルサレムに流入したユダヤ人避難民の生活上の必要性に供されたりした事実と共に、その様なアラブ財産の事実上の接収が財政難や物資不足の故にやむを得ず行われていた面があった事を示唆する⁸⁹。しかし他方で閣議議事録には、接収がこの様にやむなきものとして事実上公認されていたにもかかわらず、直接的な表現をためらう発言も見え

る。

グリェンバウム・・・彼女が敵の財産についての監督者⁹⁰だと突然私に知らされたのだ。

カプラン 政府の財産についてだ。

グリェンバウム [いずれ] 政府の財産になるのだから同じだ。・・・[3: 132] (6月20日)

対アラブ政策をめぐるこのような違和感が、「放棄されたアラブ財産」の接収に直接関わるカプランだけではなく、彼らの帰還と財産について「未決」発言を繰り返したシェルトクにも共有されていた事は本論で見た。シェルトクは、アラブ帰還に否定的な方向性が打ち出された6月16日閣議の早くも翌日(17日)、ベルナドットとの会談で国境線・アラブ帰還・アラブ財産については「未決」と語り、党内演説でもエルサレム問題・アラブ帰還・ヤッフォの帰属について「未決の問題」と発言し、党内発言について問われた6月20日閣議でも「未決」という立場を再確認している。ラトルン等の激戦を経た6月16日閣議でベングリオンが主導しシェルトクもほぼ同調したアラブ帰還への否定的方向性をシェルトクは直後に明らかに再考し、自らの真意について誤解を与える様な16日の発言を撤回して、戦争中は彼らの帰還も財産補償も考えられないが平和時には条件次第で考慮する余地がある、という本来の信念を正確な表現で言い直そうとした様に見える。その「転換」は、6月16日閣議でベングリオンが打ち出した方向性が<内閣のコンセンサスではなく自分はそれに賛同していない>というシェルトクの明確なメッセージであり、帰還や補償に一律に否定的なベングリオン路線への紛れもない「異論」であった。「敵対的な」アラブ村の、純粋に国防上の要請からの破壊については他の閣僚と同様シェルトクも反対しておらず、社会全体の空気も「敵対的な」アラブ村への住民

の帰還には明らかに否定的であった事からすると、アラブ帰還やアラブ財産について「未決」とした彼の意図は、単に個別のケースについて柔軟に対応するというだけではなく、敵対的なアラブ村とそうではないアラブ村を区別し、後者について戦後の帰還や財産補償の可能性を残す事にあったのではないかと考えられるのである。

更に、ツィスリングの個人的アーカイヴスを調査したニアは、戦闘のさなかの破壊とは異なり「政治的計算から冷酷に」行われた破壊を批判する彼の発言が6月20日閣議にあった事を示唆している。議事録から削除された可能性のあるその発言は⁹¹、戦時と平和時の対アラブ政策は区別せねばならないのではないかという、シェルトクの「未決」発言にも共通する問題提起であった。ツィスリングの属するマバムが国防軍幹部を輩出している事は前に触れたが、本議事録の時期に進行していた「将校の反乱」の結果ベングリオンによって更迭されるマバム出身の副国防相ガリリが、以前ベングリオンによって最高司令部から罷免された主な原因の一つに、彼がアラブに対して追放と破壊などの「攻撃的な防衛手段」を使いたがらなかった事があると見る研究者らもいる⁹²。この説が正しいとすれば、軍の再編（及びマバムの勢力のそぎ落とし）に伴う事件として一般に説明される「将校の反乱」事件の核心に対アラブ政策をめぐる意見対立が絡んでいた可能性が否定できない事になる⁹³。突き詰めればこの事は、帰還や補償に否定的で追放と破壊を志向するベングリオンの対アラブ路線の形成を、〈異論封じ込め〉を伴ったベングリオンの権力確立過程——「マムラフティユート」の実現過程——の一環として（ある種相対化して）見る事もできるのではないか、という仮説にもつながる。その事を念頭にシェルトクの「未決」発言に立ち戻る時、一つの可能性が浮かぶ。それは彼の異論が世論の硬化にもかかわらず見かけほど孤立していなかった可能性であり、その異論が閣内穏健派やマバム・軍首脳部・キブツ運動の内部にある同種の異論⁹⁴と相俟って、ベングリオンの路線（軍と世論の大半に支持されていた）に対する一

つの重要なオルタナティヴを早くも形成し、ベングリオンがその中に、ガリリの異論と類似する自らの「権力」への潜在的脅威を感知していた可能性である⁹⁵。アラブ問題をめぐる政策対立と指導者間の権力闘争の関わりについては、今後検証が必要であろう。

最後に、前篇と後篇にわたった本論考の結論を次の様に提示する事ができよう。

ベルナドット和平提案の超党派の拒否は主権をめぐるものであったが、その結論はシオニズムの前提や国連分割決議からの逸脱といった、単に理論上・文面上の抽象的な理由に基づくものではなかった。1948年6月における新たな展開と既成事実——すなわち大量の流血と新たな「国民的記憶」の蓄積、背後で関わるイギリスへの増大する不信、アラブに対して硬化する世論⁹⁶——が暫定政府のとり得る結論を限定した具体的「文脈」であった。ベルナドットらに誤算があったとすれば、流血は平和を必要とするという彼らの暗黙の前提であった。しかし現実とは逆であり、血が流されれば流されるほど暫定政府は領土放棄を含む妥協を頑なに拒否した⁹⁷。流血は、それを正当化する「意味」を必要としたからである。

しかし他方、ベルナドットらは当時知る由もなく対外的に知られる機会もなかったが、提案拒否という結論に至るまでにテルアヴィヴの閣議室で行動派と穏健派の間に交わされた激論は、社会の対アラブ認識の右傾化と共に政府（及び恐らくは軍中枢）内で一層可視化しつつあった対アラブ政策をめぐる葛藤と亀裂をはっきりと表していた。エルサレムとその近郊の激戦について本議事録で詳細に報告したベングリオンとグリェンバウムが、一週間余り後のベルナドット提案をめぐる審議で強硬論を主導したのは偶然ではない。ベルナドット提案審議の過程で顕在化する、エルサレムの「犠牲」の忘却を拒否する世論と一体化した＜エルサレム派＞とも言うべきベングリオンら行動派の国防重視型の論理と、エルサレムを国際的視点から相対化する冷静さを持つシェルトクラ

〈テルアヴィヴ派〉とも言うべき穏健派の外交重視型の論理の衝突が〈国防と外交の対立〉のみにとどまらない含意を帯びた事を、本議事録とその行間に見える背景の検討は示唆する。その衝突は、ベルナドット提案前夜にあたる本議事録の時期に顕在化していた「世論」と「外交」の緊張を、そしていかに重要であるにせよ行政的には「一地方」の域を超えないエルサレムと、自国の国際的な立ち位置を常に見極めざるを得ない「中央」としてのテルアヴィヴの間に⁹⁸、エルサレムが包囲されていた激戦の日々とその後の停戦の日々を通じて生じていた利害対立と感情的疎隔をも、重層的に反映していたのである。

- 1 アヴラハム・スタヴスキーはメナヘム・ベギンやヤアコヴ・メリドールと共に修正主義シオニストで、イルグンのメンバー。スタヴスキーは1933年にユダヤ機関政治局長であったハイム・アルロゾロフをテルアヴィヴの海岸で暗殺した嫌疑をかけられた人物で、アルタレナ号事件に伴う戦闘で奇しくもアルロゾロフの殺害現場近くで命を落とした事がバーナード（・ドヴ・）ジョゼフの回想録に述べられている（Dov Joseph, *The Faithful City: The Siege of Jerusalem, 1948*, New York: Simon and Schuster, 1960, pp.240-241）。なお本稿では本文中では「イルグン」の名称を用いるが、議事録の抄訳では原文通り「エツェル」の名称のままとする（同一の組織である）。また本稿では、前篇をはじめ以前の諸論考で説明した人名・地名などの固有名詞の説明は原則として割愛している（何も記さないか「既出」とのみ記す）。
- 2 この合意については、6月1日閣議の議題④〔2:32〕を参照。
- 3 実際には、武器は引き渡さねばならないという部分は6月20日閣議決定には含まれていない。
- 4 セイム（Sejm）はポーランドの議会。
- 5 OZON（Obóz Zjednoczenia Narodowego, ポーランド語で“Camp of National Unity”を意味する）はポーランドの反セム主義的な準軍事的組織。1937年10月2日に結成された。ナショナリズム・カトリシズム・反セム主義に基づいて、不法行為やユダヤ人の権利への攻撃やボグロムを煽り、貧困や失業問題から労働者や農民の関心をそらそうとした（*Encyclopaedia Judaica, Vol.12*, Jerusalem: Keter Publishing House, 1996, p.1540.）。
- 6 「mamrafteyut」は「王国的思考」と訳しておいたが、「王国的であること」を原義とする。本議事録では形容詞「mamraftey (t)」も含めるとシェル

トクが三回 [3:172~173], シトリトが一回 [3:177] 使用している。同じ頃ベングリオンによっても頻用された語である事と, リボースト (主権) やナティン (臣民) 等の語と併せて, 支配と従属に力点をおく政治観を表す用語の一つとして注目される事は前篇で指摘した。本稿「終わりに」でも触れている。

- 7 軍の掠奪等の不祥事については, 本稿「軍の規律・その他」項 (後出) を参照。
- 8 「シオニスト行動委員会の合意」とは1948年3月のシオニスト行動委員会 (委員会そのものについては既出) のセッションで承認された, イルグンの別個の存在は維持するがその作戦計画はハガナー司令部の事前の承認を要するとした暫定的措置を指す (*New Encyclopedia of Zionism and Israel, Vol.1*, Cranbury, NJ: Associated University Presses, 1994, p.669.)。
- 9 「ユダヤの強盗」については本稿「終わりに」を参照。
- 10 「ゼエヴの砦」とはテルアヴィヴに建てられた, 修正主義シオニズム運動とその青年運動であるベタルの本部のあった建物であり, イルグンの秘密の会合場所でもあった (ゼエヴはジャボティンスキーのヘブライ語のファーストネーム)。現在もリクード本部やジャボティンスキー研究所などを擁する。
- 11 モレー・ホラー (מורה הוראה) とは, an authorized instructor, teacher of religious subjects, つまりラビを指す。Reuben Alcalay, *The Complete Hebrew-English Dictionary (New Enlarged Edition), Vol.1*, Tel Aviv: Chemed Books, 2009, p.506. 世俗的な信条を持つツイスリングの, フィシュマンに対する強烈な皮肉をこめた反論である。
- 12 この6月23日臨時閣議でも22日臨時閣議でもベントヴは, 国防相に法に沿って対処する事を課すという6月20日の閣議決定があったと発言しているが, 6月20日閣議の議事録を見る限り彼の提案にとどまり, 閣議決定はなされていない。
- 13 この質問はシャピラにより6月16日閣議の議題① [3:38] で出された。
- 14 この質問はフィシュマンによるもので, エルサレムから到着した人々が, テルアヴィヴから送られた食糧を軍が独占して市民には全く残っていないと不平を言っているため調査して欲しいという内容であった。6月14日閣議の議題② [3:12~13] を参照。
- 15 ヘブライ法 (ユダヤ法, ハラハー) とは, 「モーセ五書」 (創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記) のことで「書かれたトーラー」と呼ばれる), タルムード (「口伝のトーラー」と呼ばれる), ラビ法, 慣習法に基づいてユダヤ教徒の生活全般を規定する法体系であり, イスラーム教におけるシャリーアに相当する。ハラハー (הלכה) は「歩き方」「(道の) 行き方」を意味し, シャリーア (شرعية) も「水場に至る道」を原義とする点で両者は似ている。なお現在のイスラエル法務省には, 1980年 (ベギン政権) のJudicial Principles Law (חוק יסודות המשפט, 「イスラエ

ル法とヘブライ法及びイスラエルの財産たる自由・公正・誠実・平和の諸原則の間の結び付きを打ち立てる」法であると法務省のヘブライ語版ホームページに書かれている）を執行する為のヘブライ法課が設けられ、法廷・省庁・クネセトの諸委員会への意見書を書いたり、裁判官・検事の為のヘブライ法の勉強コースやセミナーを開いたり、ヘブライ法に関する刊行物による啓発活動を行ったりしている。上記の法に関する法務省の英語版ホームページの説明ではヘブライ語版にある「イスラエル法とヘブライ法・・・の間の結び付き」という説明の代わりに、「イスラエル法とユダヤ人の遺産の一部である自由・公正・誠実・平和の諸原則の間の結び付きを規定する」とされて「ヘブライ法」の語が省略されており、宗教法も考慮されているというヘブライ語版のニュアンスが対外的説明の中ではやや薄められている。イスラエル法務省ヘブライ法課のホームページは <http://www.justice.gov.il/En/Units/JewishLaw/Pages/default.aspx>（英語版）、<http://www.justice.gov.il/Units/MishpatIvri/Pages/default.aspx>（ヘブライ語版）。2018年11月3日アクセス。

- 16 「新しいアリヤー」は1942年10月に設立された党で進歩党の前身。既存の政党内には居場所を見つけないと感じていた中欧（ドイツ・オーストリア）の移民連合から発展した。ローゼンブルートが党首となる。1948年10月に労働組織や一般シオニスト党の進歩派と合併して進歩党を設立。「新しいアリヤー」はドイツ語を話す移民の統合に重要な役割を果たした（*New Encyclopedia of Zionism and Israel*, Vol.1, pp.58-59, Vol.2, p.1072.）。
- 17 ラビ法廷はオスマン帝国下の宗教法廷に起源を持ち、パレスチナ委任統治に受け継がれ、イスラエル国家に継承された制度。委任統治下では四人のアシュケナズィームのラビと四人のスファラディームのラビから成るラビ評議会の権威の下にユダヤ教正統派の教義に基づくラビ法廷が設置されたが、パレスチナに居住していても外国籍を維持するユダヤ人（何千人もいた）にはこの法廷の管轄権は及ばず、イシューヴの世俗化の進行やアシュケナズィームとスファラディームのラビの間に度々生じた意見対立などもあってラビ法廷の制度はパレスチナのユダヤ人の宗教生活に大きな役割を果たし得なかった。他方、委任統治下ではムスリム法廷（シャリーア法廷）の管轄権はムスリムに限定されており、客観的にはそれへの特別な優遇政策がとられたとは言えないことから、フィシュマンの言う「ラビ法廷への差別」とは、法廷におけるユダヤ教正統派の影響力が上記の事情により限定されていた事への不満に由来する表現と考えられる。なお宗教法廷の制度は建国後の「統治と法の秩序」令第11条（1948年5月14日にパレスチナに存在した法は効力を持続するという内容）により新国家に継承された（*New Encyclopedia of Zionism and Israel*, Vol.2, pp.1084-1085.）。

- 18 ジョゼフの説明によれば以下の通りである。1948年1月18日にエルサレムから35人の若者の志願者がアラブに封鎖されたエツィオン・ブロックに救援に行った。彼らはヘブライ大学の優秀な学生と若手の科学者を含んでいたが、目的地に着く前に近隣の村からの数百人の武装したアラブに襲撃され、弾薬が尽きるまで戦い全員が殺害された (Joseph, *op.cit.*, pp.70-71.)。
- 19 議事録本文では「ネビー」とアラビア語(口語,「預言者」の意)を音写した形で記載されている。「預言者」を意味するヘブライ語は「ナヴィ」である。ネビー・サムエル, エツィオン・ブロック, 旧市街については「<征服とユダヤ化の記憶>ベングリオン」項の本文を参照。
- 20 カタモン(カタムーン)は既出であるが詳細を記すと, パルマツハが1948年4月30日夜に攻撃をかけて朝までにその要衝を奪い, 更に一日の戦闘の後に制圧した (Joseph, *op.cit.*, p.73.)。
- 21 Zerach Warhaftig (1906~2002) はラビでイスラエルの法律家・政治家。現ベラルーシ(当時ロシア帝国)に生まれる。第二次大戦中に杉原千畝にユダヤ人の為のビザを出すよう説得した一人であった。1947年にパレスチナに移住しハポエル・ハミズラヒに加入。建国宣言の署名者の一人。1948年当時, 暫定国家評議会議員。
- 22 イスラエルの公共放送で, 「イスラエルの声」の意。元はハガナーの地下ラジオ局で, 1948年5月14日に公式の放送局となり, 建国宣言を読み上げるベングリオンの声をテルアヴィヴから中継で流した。
- 23 この手紙は Document 227, P.Cremona to M.Sher tok, Tel Aviv, 24 June 1948, *Documents on the Foreign Policy of Israel, Vol.1, 14 May - 30 September 1948*, Edited by Yehoshua Freundlich, Jerusalem: Israel State Archives, 1981. クレモナは国連事務総長特別代表であった。
- 24 ボンデは実際にはこの当時既に大佐であった。
- 25 クファル・ヴァルブルク (כפר ורבורג) とベエル・トゥヴィア (באר טוביה) はネゲヴの入植地。
- 26 段落最後の点線は原文通りである。
- 27 クファル・ダロム (כפר דרום) はネゲヴの入植地。
- 28 エジプトでは1947年にコレラの大流行があった。当時の状況について詳しくは, 例えばエジプト公衆衛生省事務次官による以下の報告書を参照。Sir Aly Tewfik Shousha, Pasha, M.D. (Under-Secretary of State, Ministry of Public Health, Cairo, Egypt), “CHOLERA EPIDEMIC IN EGYPT (1947)” (<http://www.who.int/bulletin/about/bullwhov1n20353-0381.pdf>, 2018年9月4日アクセス。)
- 29 Harry Dexter White (1892~1948) はフランクリン・ローズヴェルト政権のモー

ゲンソー財務長官の下で財務次官補を務めたモーゲンソーの側近，エコノミスト。ボストンのリトアニア系ユダヤ人移民の家庭に生まれる。戦後ソ連のスパイという嫌疑がかかり 1948 年当時この嫌疑の渦中にあったが，新生イスラエルの金融政策への，死の直前の熱意ある関与はアメリカのユダヤ系政治家としての彼の知られざる側面を浮かび上がらせる。

- 30 The Anglo-Palestine Bank は世界シオニスト機構により 1902 年に設立され，第二回世界シオニスト会議で設立されたユダヤ入植協会（The Jewish Colonial Trust）を前身とする。同銀行はユダヤ人の土地購入や農夫への融資などパレスチナにおける銀行活動を担い，イスラエル建国後の 1948 年に新銀行券を発行する許可を得た（The Anglo-Palestine Bank Limited. と印字された ONE PALESTINE POUND 紙幣等が 1948～1951 年に流通）。以下の閣議の議論はこの経緯に関わる。なおアングロ・パレスチナ銀行はイギリスで登録されたため，議論の中では同銀行のイギリスとの関わりが問題になっている。同銀行は 1950 年にバンク・レウミ・レイスラエル（National Bank of Israel）と改称，1954 年に中央銀行として Bank of Israel が設立されると商業銀行に移行した。
- 31 Palestine Currency Board はイギリスの植民相に従属しており，議題に上っている新通貨の発行まで使われていたパレスチナ・ポンド（エレットイスラエル・リラ）を発行していた。
- 32 パン・ヨーク号とパン・クレセント号はパレスチナへのユダヤ人「不法」移民の歴史の中で最大の移民船。1947 年にアメリカで購入され，ルーマニアから出港して 1 万 5000 人の移民をパレスチナに運んだ。
- 33 Joint とは The American Jewish Joint Distribution Committee の略称で JDC とも呼ばれる。ニューヨークに拠点をおくユダヤ人の救済組織。建国後のイスラエルに流入するユダヤ人移民に援助を行った。
- 34 Charles Passman はジョイントのエルサレム事務所の所長でアメリカ国籍保持者。イギリスの管轄下にあったキプロスのユダヤ人難民キャンプを視察してその惨状を目撃，対処に奔走した。
- 35 ヘブライ語で「入植地」の意。個人所有・個人経営の入植村。
- 36 1947 年 12 月末にルーマニア社会主義共和国が成立しており，1944～1958 年にソ連軍の占領下にあったという事情から「ソヴェト＝ルーマニア船」という言い方をしている。
- 37 メイル・サピルは 1948 年にブリハー（1944～1948 年にかけて東欧・中欧・南欧からユダヤ人を救い出す為に組織化された地下活動）の司令官となった。
- 38 ここではイスラエルに連れて来る移民を事前に選別し，戦争の役に立たず国家の

重荷になる人々を除外しているという選別発言の暗い含意を薄めない為に、「足の不自由な人々」とせず「びっこ、ちんば」と直訳しており、訳者自身の差別感情を表すものではない事をお断りする。

- 39 6月6日閣議の議題⑥で、船の購入と移民の輸送の為の四人の閣僚（カブラン、レメズ、シャピラ、ベングリオン）から成る委員会を設置するという閣議決定がなされている [2:94]。
- 40 委任統治下のハアパラーでは外国船籍の船を借りて移民を運ぶのが通例であったが、建国前後からトランシルヴァニア号の様に他国の船を借りる場合とパン・ヨーク号やパン・クレセント号の様にユダヤ人側（建国後はイスラエル国家）が購入・所有して移民を運ぶ場合があった。他国の船を借りる場合は費用がかかる事からツイスリングはその資金を要求したのである。
- 41 ゴルダ・メイルソンは当時アメリカで資金集めを担当していた。
- 42 初代駐ソ大使はゴルダ・メイルソンで1948年9月に、初代チェコスロヴァキア公使はエフード・アヴリエルで7月に正式に着任した（アヴリエルの任命は5月20日閣議で報告されている）。
- 43 エツィオン・ブロックはエルサレムの防波堤と考えられていたが、ジョゼフは客観的にはそうではなかったと述べている。詳しくは Joseph, *op.cit.*, pp.125-126. なお以下では、1948年のエルサレムの状況についての目撃証言であるジョゼフの回想録を、閣議議事録の行間を埋める（議事録に異なる角度から光を当てる）一助として頻用する（紙幅の関係で主に注記する）。ジョゼフはカナダ生まれの法律家で、当時はエルサレム緊急委員会の長として補給の責任者であった。彼の職務の詳細については後出の註を参照。彼の回想録は法律家らしく事務や事件の細部にわたってエルサレムの内情を伝えており、エルサレムから見てテルアヴィヴがどの様に見えたかをも伝える当事者の貴重な証言である。
- 44 ジョゼフによると、エルサレムへの砲撃は4月の第二週に始まりイギリスの撤退後非常に強まった。新市街を砲撃したのは、イギリスの撤退後もアラブ軍団に残って決定的な役割を果たしていたイギリス将校らであった。アラブ軍団に奪取されたシャイフ・ジャラーフや旧市街など近距離からの砲撃は特に新市街の北端に被害を与えて多数の民間人死傷者を出し、スコープス山にあるハダッサー病院とヘブライ大学キャンパスも集中的な砲火を浴び、5月14日以降の三週間でエルサレムには1万発以上の大砲が直撃した。第一次停戦開始後のジョゼフらの調査によると2000家族が砲撃の被害を受けており、当局は焼け出された避難者の為のローンや代替の住居の確保に奔走した。砲撃の日々にはエルサレムは文字通り前線であり、無差別砲撃の中で婦女子も前線に立たされていたとジョゼフは記す (Joseph, *op.cit.*, p.72,

p.201, pp.136-137, p.140.)。エルサレムとテルアヴィヴとの温度差はこの様な事情からも生まれていた。即時追加動員の審議の際にも、エルサレムを最重視するベングリオンはこの温度差を「イシューヴは今、幻想の中に生きている。なぜならテルアヴィヴを爆撃する飛行機が現れないからだ」（6月20日 [3:98]）と苛立ちを込めて表現している。

- 45 愛国的感情については、ジョゼフはエルサレム緊急委員会が時折全市民へのアピールを出した事を回想している。例えば砲撃がピークであった6月6日のアピールは耐乏生活の中の努力を訴え、「エルサレムのユダヤ人の皆さん！ 我々の闘争の正義を深く意識しつつ、それに献身しようではありませんか、解放の日が明け初めるまで」と鼓舞していた。ジョゼフはこの様な気分は市民にも共有されていたとし、エルサレム市民の精神は“a miracle of courage and fortitude”にはかならなかったと述べて、息子を全員召集されて二人が戦死しても「彼は英雄として斃れました。私達は勝利まで戦い続けます」「家族は勝利まで戦い続けるであります」と宣言した遺族の例などを挙げている。またエルサレムでは徴兵逃れがないとの指摘があったとされるが、ジョゼフはその理由を、包囲されているため「エイン・ブリラー」（他の選択肢はない）であった事と、配給（自身が責任者）が公平であった事による市民の連帯感の強さに求めている（Joseph, *op.cit.*, pp.146-147, pp.158-159. 但し閣議事録ではエルサレムからの転出希望者の扱いが以前から問題になっており、本議事録でも停戦開始後の転出希望者の増大の問題が話し合われているため、愛国心についての記述は多少差し引く必要はある）。

- 46 「ユダヤ人エルサレム」を求める市民感情については、ジョゼフの回想録の随所にそれを示唆する箇所が見られる。彼はシオン山の戦闘で戦死したユダヤ人兵士の母親が語った、息子の死がエルサレムを救う事に僅かなりとも役立つのであれば犠牲は大きすぎるものではないという言葉を記録しているが、この一市民の思いは裏を返せば、重い犠牲を払った上はエルサレムを放棄する事はできないという市民感情でもあった。本議事録よりやや後になるが、ジョゼフは1948年7月には「エルサレムはイスラエル国家に含まれるべき」という強い感情が社会で増しつつあったとし、この様な市民感情がどの様な帰結をもたらしたかについても詳述する。暫定政府は1948年8月にエルサレムを占領地と宣言し、ジョゼフは8月2日に「エルサレムの占領地域軍知事」に任命されたが、この時彼は自分達に対するアラブの攻撃（及び自分達が犠牲を払ってエルサレムを防衛した事）がエルサレムの国際化を永久に不可能にしたという自らの感情、国際化が放棄された事への市民の安堵、将来におけるエルサレムの完全併合を求める市民と自分の願望について記している（Joseph, *op.cit.*, pp.318-320, p.323.）。

- 47 エルサレムでイギリス当局の政策がユダヤ人にとって「敵対的」であると日常的に感じられた事例（警察も含めて）については例えば Joseph, *op.cit.*, pp.36-37, pp.110-111, pp.114-115 等を参照（但し最後の高等弁務官 Sir Alan Cunningham をはじめ、委任統治当局やエルサレム市当局の中には、暴力を抑制して秩序ある権力移譲を行わねばならないと考える公正なイギリス人官僚も少なくなかったと彼は記している）。イギリスの政策全体の方向性については「エルサレムに関してイギリスは、ユダヤ人国家が究極的に建てられねばならないとしてもエルサレムがユダヤ人国家に含まれる事を防ごうと明らかに決意して」おり、それは道路についての英軍の方針やハガナーへの対応など様々な面から明らかであったとジョゼフは述べている（*Ibid.*, p.114.）。停戦委員会の介入と硬直性、及びそれから生じたジョゼフらユダヤ側当局との様々なトラブルについては *Ibid.*, Chapter XI 等を参照。
- 48 「国際化」について、エルサレムのユダヤ人当局がシェルトクラと異なった認識を持っていた事についてもジョゼフの回想録は多くを物語る。例えばジョゼフはイギリス当局や赤十字がセキュリティー・ゾーンといういかにも「中立的な」名目で特定のエリアを自分達の管理下におこうとする意図を強く疑わせる事例があった事を記しており（Joseph, *op.cit.*, pp.287-288.）、「国際的」「中立的」という名目がしばしば関係諸機関の自己利益に資するばかりでユダヤ人の命を守らないという現実には気付いていた。本議事録よりやや後になるが、1948年7月に合意されたスコープス山の非軍事化も同様であった事を彼は記している。それは国連の管理下にユダヤ人・アラブ人それぞれの警察が持ち場につくというものであったが、スコープス山のユダヤ人は非武装のままアラブ地域に包囲される恐怖を味わった。これらの経験からジョゼフは国連管理下の「国際化」に一切幻想はなく、「ユダヤ人国家の不可分の一部として以外にエルサレムにとっての将来はなく、ユダヤ人兵力による保護以外にエルサレムの市民の命の保障はない」と確信していた（*Ibid.*, pp.323-324.）。しかし、現場から離れたテルアヴィヴに必ずしもその様な認識が共有されていない事をよく知っていた彼は、更に後になるが、9月26日にエルサレム代表団を率いてエルサレムをイスラエル国家に包含するべく政府に陳情しに行った。この時彼は「国際化」がエルサレムにとって「机上の空論」的な解決でしかないという持論を閣僚らの前で次の様に展開した。——この都市の10万人のユダヤ人の実際の生活を考慮しない抽象的なアプローチはあり得ず、ユダヤ人市民はエルサレムがイスラエル国家の一部にならない限り安全であると感じられない。「エルサレムの一般市民の間にあるこの感情の深さを言葉で表現するのは難しく」「もし政府がエルサレムの国際化に同意するなら、この都市のユダヤ人は完全に、かつ不当に見捨てられていると感じるだろう」。エルサレムの国際化案はもともとアラブとの協力によっ

てユダヤ人国家を建てる計画の一部であったがそれは失敗したのだ、と。ジョゼフは、エルサレム側のこの論理に、国際社会の圧力故に国際化を考えてもよいと考えがちであった閣僚の一部は説得され、〈エルサレムをイスラエル国家の一部とし、エルサレム回廊を確保する〉という政府方針につながったと振り返っている（*Ibid.*, pp.335-337.）。

- 49 テルアヴィヴが食糧補給についてできる限りの事をしていないとエルサレム市民が感じていた事については、グリェンバウムの報告も参照（6月20日[3:127]）。またエルサレム側のこの様な感情、特に「テルアヴィヴは我々の犠牲や苦しみを分かっているのだろうか」という感情については、例えば次の叙述を参照。“*There was a feeling abroad in Jerusalem that not all that could be done for the capital had been done. The tragedy of the convoy to Scopus of April 12, the annihilation of the thirty-five young men who had gone to the relief of the Etzion bloc and perished, the loss of the Old City, the suffering that Jerusalem had experienced — all these things weighed heavily on our spirits, and we wondered if they were felt as deeply in Tel Aviv.*” (Joseph, *op.cit.*, pp.217-218. イタリックは引用者。) ジョゼフはベングリオンが暫定国家評議会で「可能な全ての事がエルサレムの為になされるだろう」と述べて市民感情と寄り添おうとしている事を認めつつも、“*But this was by no means the dominant thought or feeling in the minds and hearts of the Jews in Jerusalem.*”と市民が冷めた見方をしていた事も匂わせる。エルサレム市民のこのような思いの根底には、自分達は「エルサレムの為のみならず新生イスラエル国家の為に戦ってきた」(*Ibid.*, p.218.)という自負（従って国は我々を最優先で扱うべきだという論理）が潜んでいた（例えば *Ibid.*, p.126 も参照）。エルサレムとテルアヴィヴの感情的疎隔は重要な案件について意見対立を生む事もあった。一例としてジョゼフは第一次停戦中、停戦委員会が定めた量を超過する食糧をエルサレムに輸送するのに新補給路を使用する問題をめぐって、シェルトクと意見対立があった事に触れている。シェルトクが停戦遵守を優先して、国連側の要求通り新補給路を使わぬようジョゼフに伝えたのに対し、ジョゼフは最終決定があるまでは新補給路を併用して食糧を運ぶ権利があると主張した。ジョゼフは、シェルトクは国連の要求が理不尽でも従おうとする傾向があったとし、テルアヴィヴの論理とエルサレムの現場の必要性が乖離した例として振り返っている（*Ibid.*, pp.236-237.）。又ジョゼフは第二次停戦中にもエルサレムがきちんと食糧補給を受けるよう絶えずテルアヴィヴに圧力をかける必要があったとし、国（テルアヴィヴ）の目線で価格や税を考える蔵相カプランとの協働に時間がかかった事にも言及する（*Ibid.*, p.270.）。但し新補給路の件についてはシェルトクの反対は外相としての立場上のものであり、内心はジョゼフの立場に賛同していた事を6

月14日閣議の議題②でシェルトク自身が示唆している[3:9]。

- 50 第一次停戦中、エルサレム回廊ではユダヤ人入植地の建設計画が実行に移されつつあり (Joseph, *op.cit.*, p.227.), 既成事実化が進行しているという事情もシェルトクは考慮したであろう。
- 51 アラブ財産がいずれ政府の財産とされる事については、6月20日閣議の議題③[3:132]のグリュンバウムとカプランのやりとりでも触れられている。
- 52 7月2日閣議の議題②のツイスリング[4:103]とカプラン[4:116]の発言を参照。ツイスリングは「未決の諸問題についてのあなたの公的な発言がベルナドットによる未決の諸問題の提示を容易にしまったのであり、[それらは]扉が閉まった後も未決であり続けるだろう」と述べている(前稿参照)。シェルトクの「未決」発言に対しては閣外からも懸念が寄せられた。ワイツマンは「あまりにも多くを修正する」事への懸念を示し、有利な修正でさえも慎重に運ばなければ国連分割決議で一旦決まった事を全て白紙に戻しかねず、「新たな問題を開く事を本当に恐れている」とシェルトクに伝える手紙を送っている (Document 235, C.Weizmann to M.Shertok, Paris, 26 June 1948, *Documents on the Foreign Policy of Israel*, Vol.1.)。
- 53 Document 226, E.Epstein to M.Shertok, Washington, 24/25 June 1948, *Documents on the Foreign Policy of Israel*, Vol.1.
- 54 彼らは5月末に成立した国防軍に組み込まれたが、イスラエル国家領である事が明確でないエルサレムでは独自の活動を続けていた。
- 55 レヒは1947年以来、エルサレムの分割や国際化を防ぐ為にエルサレムに活動を集中させていた。彼らのこのイデオロギーが1948年9月のベルナドット暗殺の底流にある。
- 56 Document 188, C.Weizmann to M.Shertok, Paris, 15 June 1948, *Documents on the Foreign Policy of Israel*, Vol.1.
- 57 ベングリオンは戦闘が発生したら停戦違反と見なされるのかというシトリトの質問にも「我々が本件について、外国人はそれに関係ないかの様に話し合う事を望む」[3:149]と答えている。
- 58 Gabriel Sheffer, *Moshe Sharett: Biography of a Political Moderate*, Oxford: Clarendon Press, 1996, pp.357-358.
- 59 追加動員をめぐる論議(6月20日)の際にも可視化したこの宗教・世俗の対立軸は、ここではより法的側面を帯びている。フィシュマンは後の記者会見で辞任の理由は法相との意見の相違にあると述べてローゼンブルートを驚愕させたが(6月27日閣議冒頭)、フィシュマンとしては、アルタレナ号事件の処理がユダヤ法に沿っ

ていなかったという憤懣が辞任の直接のきっかけになっているため、ユダヤ法の適用をめぐるローゼンブルートとの以前の対立（ベングリオンによると解決済み）を諸悪の根源とばかりに蒸し返したものと推測される。

- 60 実際シェルトクの懸念とは逆に、エジプトの停戦違反の発生によってアルタレナ号事件の否定的な印象がある程度相殺され、同事件がユダヤ人移民の流入に影響する事もなかったとされる（Sheffer, *op.cit.*, pp.360-361.）。
- 61 国連特使へのシェルトクの返信における、武器に関する説明の原文は以下の通りである。“When the Irgun Zvai Le’umi forces at Kfar Vitkin surrendered to the Army on Tuesday morning, all their arms were given up and their names were taken down. They were found in possession only of their personal arms. It was thus proved that the off-loading of arms and other war materials reported to have been brought by the ship had not yet started, and the Provisional Government is satisfied that the whole quantity of such arms and war materials was actually consumed by the flames when the *Altalena* took fire off Tel Aviv.” Document 234, M.Shertok to P.Cremona (Tel Aviv), Tel Aviv, 26 June 1948, *Documents on the Foreign Policy of Israel, Vol.1*, pp.223-224.
- 62 武器の行方についてベルナドットは安保理に次の様に報告している。ボンデ大佐の査定によると戦車が降ろされた形跡はない。戦車が積み荷の中にあったとすれば船が炎上した時も船内にあった筈である。エツェルの宣伝通りに大量の爆弾が船内にあるなら大爆発していた筈であるが、実際に起こった爆発はその様な規模ではなかった。またエツェルはネタニヤで戦争物資を降ろし、ユダヤ人通常兵力がエツェルの降伏後それを掌握した事を示す証拠がある、と（Joseph, *op.cit.*, pp.239-240.）。つまり武器は拡散するか国防軍の手に渡ったというのが国連側の観察であったが、シェルトクはこれを曖昧にしようとしたのである。
- 63 ここでグリェンバウムの話の順番通りではないが、第三点と第五点は類似しているため、まとめて述べる。
- 64 文民当局と軍当局が対立し、地区司令官が実権を握っていた事はジョゼフの回想録には書かれていない。旧市街の喪失に関して、シャルティエルが文民当局の我々にもっと情報を与えてくれれば状況をベングリオンに連絡するなど対処のしようがあったという趣旨の批判が書かれているのみである（Joseph, *op.cit.*, pp.187-188.）。
- 65 グリェンバウムの要請に政府が回答しなかったのは、ジョゼフが文民当局の事実上の責任者にされていた事情があったからではないかと思われる。ジョゼフの回想録によると、彼の権限は8月2日に軍知事に任命されるまで明確に定義されていなかったため、市民の必要性に応じて自分で個別に判断せねばならなかった。具体的

な地位としては、彼は1947年12月にユダヤ機関によって設立されたエルサレム緊急委員会の長であったが、1948年4月10日にユダヤ機関執行部を代表するベングリオンから市を運営する個人的な委任状を与えられ、更に6月10日以降はこの地位に加えて、仲介者との関係では暫定政府の代表としての資格を得た。しかしエルサレムの不確かな地位の問題もあって彼の権限は曖昧であり、軍とは協働が必要であったが彼らを権限下においているわけではなく、軍知事になるまで政府から与えられた正式な肩書はなかった (Joseph, *op.cit.*, pp.220-221.)。この説明を前提とすると、当時暫定政府から市の運営責任を任されていたのはジョゼフであり、責任者がいないというグリェンバウムの主張はジョゼフの記述と齟齬がある (ジョゼフは法律家であり権限についての記述は正確であると推測される)。なおジョゼフはカプランとの協働については触れているが、グリェンバウムについては一言も触れていない。

66 この後グリェンバウムは、エルサレムにおけるイルゲンとレヒの動向と彼らとの折衝について述べているが、この部分は「アルタレナ号事件関連」の項に組み込んだため割愛する。

67 エルサレムからのユダヤ人市民の脱出の可否やどこまでこれを認めるかについてはそれまでも閣議で度々問題化してきたが、ベングリオンはエルサレムの空洞化を恐れ脱出の防止を主張してきた (6月14日 [3:5] など)。これに対して子供達を脱出させる事や、家族をエルサレムから移動させたい人々が請願を出す事を可能にすべきである等の意見もあった (6月14日, ベントヴ [3:19] など)。子供達の脱出については、ベングリオンは「エルサレムの空洞化と敵への降伏」を意味するとして反対している (6月14日 [3:21])。

68 但しジョゼフは、軍に不利な事実の詳細や批判は書いておらず、パルマッハが掠奪した後「道を閉鎖した」件にも触れていない事に注意したい。後に政界中央に進出した事に伴う公的な理由もあろうが、個人的な理由として考えられるのは彼の次女がパルマッハ隊員でこの戦争中ネゲヴで戦死しており、同書が殉職した次女とその仲間たちに捧げられている事である。しかし批判的に読めば、彼の叙述からある程度の手がかりは得られる。

69 Joseph, *op.cit.*, p.84, pp.143-144, pp.175-176, p.326. なお、放棄されたアラブ地域に残された水についてジョゼフは、アラブが逃亡した家々の殆ど全てに貯水槽があったため、エルサレムが包囲されてからはまずその水源を使い切ったと回想している (*Ibid.*, p.150.)。

70 Sir Alec Seath Kirkbride (1897-1978) はトランスヨルダン駐箚英国大使。1946年に任命され、1948年戦争に於て大きな外交的役割を果たす。

- 71 但し、前篇の背景説明で述べた様に、ベルナドット提案は5月29日会談でのスクラーシーの主張の主要部分を取り入れており（但しスクラーシーはパレスチナのアラブ部分がトランスヨルダンに併合される事には反対していた）、アッザーム・パシャの考え方にも影響された痕跡がある。
- 72 具体的には、6月17日会談の前日16日に行われたアラブ側との会談の印象がベルナドットにとっては強く残っていたであろう。なおベングリオンもシェルトクもベルナドットがアラブの所（カイロ、アンマン、バイルート）ばかり訪問しているという不満を持っていた事が閣議事録から窺われる（シェルトク [2: 185] など）。
- 73 ベルナドット提案の方向性がイギリスのそれに酷似していると考える人々は当時暫定政府にとどまらずユダヤ人社会一般でも多く見られ、特にエルサレムをアラブ領にする提案はイギリスに発する提案であると広く信じられていた。“It was generally believed by our people that the Mediator’s surprising proposal in regard to Jerusalem … originated with the British.”とジョゼフは回想する（Joseph, *op.cit.*, pp.298-299.）。しかしベルナドット自身は回想録の中で同提案がイギリス政府の直接の意向を反映している事は示唆しておらず、あくまで関係者と接触した結果としての自分とスタッフの考えであるとして説明しており、例えばシェルトクがワシントンから受け取った報告（前掲 Document 226, E.Epstein to M.Shertok, Washington, 24/25 June 1948, 米政府関係者から見てイギリスの利害が和平問題の現状にいかに関与されているかについての文書）もイギリスの意向とベルナドット提案の直接的な関係を示唆するものではない。この様にベルナドットがイギリスの直接の意向を受けて提案を作成したというイスラエル側の疑念を公刊史料から立証するのは難しい。客観的には、前篇で述べた様にベルナドットはもともと11月29日決議は維持し得ないと考えており、一体化したパレスチナの理想とユダヤ人主権国家の存在を折衷させた案が和平提案であったと回想録で述べている事から、そうした方向性がたまたまいギリス及びアラブの考え方と合致した面があるのではないかと推測される。
- 74 「今の現実にはアラブとの公然たる戦争のそれであり、イギリスの方面では海に開ける、より隠然とした危険な戦争である」（ベングリオン [4: 37]）。これ以前にも類似の発言は見られる。例えば、6月16日閣議におけるベングリオンの「我々の脅威となる困難（これは私にとって最初の瞬間から悪夢だった）、それはイギリスである」に始まる発言を参照 [3: 70~71]。
- 75 他にも例えば、アリヤーの論議におけるツイスリングの「7月9日以降我々が船を大変必要とする事は私にとって明白であり、7月9日に起こるであろう事に我々

は依存してはならない。アリヤーの可能性があるなら——我々には我々自身の船が必要だ。アリヤーの可能性がないなら——その場合も我々には我々自身の船が必要だ」[4:32]という発言にもこの論理が表れている。

76 但しシャピラは国際社会の規範を無視してよいと考えていたわけではなく、彼の批判のポイントは「我々が国連に報告せずに武器を受け取る用意があった」事であったため、その意味で相対的にアルタレナ号の司令官の罪は軽いのだというのが発言の趣旨である。ただ彼も、移民相という立場の故でもあるが、本来移民そのものは「不法」ではあり得ないという見解を持っていた事は確かである。

77 国連の停戦合意における移民と武器の扱いについては前篇の背景説明を参照。

78 但しベングリオンは彼らが服従しない場合には、政府の威信にかけて断固として武力行使をする方針であり、実際にそれを断行した。あくまでも最終的に服従した後の寛大な措置である。

79 *Encyclopaedia Judaica*, Vol.15, p.1097. 但しこれにも歴史的経緯が関わっている。サンヘドリン（古代エルサレムの最高法院）が死刑を科す権限を持ち歴史的にもそれを行っていた事は立証されているが、ローマ帝国による第二神殿の破壊と共にサンヘドリンからは死刑を科す権限が奪われた。この為、タルムードにおける死刑についての様々な言及はアカデミックなもので実際の慣行を反映していなかったというのが定説である（*Encyclopaedia Judaica*, Vol.5, pp.145-147.）。

80 *Encyclopaedia Judaica*, Vol.13, p.1388.

81 ここでは議論に必要な限りで単純化して叙述しており、様々な場合分け等を省いている事をお断りしたい。但し一つ付記すると、盗品の性質によってはその返却だけでよい場合もあり、逆に「人間を盗む事」すなわち誘拐については死罪とされている（*Encyclopaedia Judaica*, Vol.15, pp.1094-1098.）。

82 *Encyclopaedia Judaica*, Vol.7, pp.411-412. 反面、タルムードには異教徒への差別を、彼らとの友好関係を損なう故に望ましくないものとし禁止すらしている箇所もある（*Encyclopaedia Judaica*, Vol.7, p.412.）。

83 但し穏当な解決法が望まれた背景には、対アラブ戦争のさなかに内戦は避けねばならないという、極めて現実的な危機感があった事は言うまでもない。

84 但し表面上は全員一致で許容的であったわけではない。フィシュマンとシャピラが恩赦でも納得がいかず退席したのに対して、逆に世俗派からは「イスラエル国民にとって（の）基本的な利益」、「体制の権威への侵害の事実」、人命を危険にさらすという不法行為、には目をつぶって逮捕という結果のみをひたすら批判するフィシュマンとシャピラに対し、世俗法である「イスラエル国家の法も尊重する必要のある法だ」（ツイスリング [3:192]）という反論が出ている。ここには動員問題で

も表れた宗教・世俗の対立軸が観察される。しかしそれと同時に、その対立軸は依然としてありながらもその対立軸を包含する〈「身内」への許容性〉が見られる事も確かであり、本稿ではその側面に注目している。

85 但し許容の目的や程度やあり方については意見の幅があった事は言うまでもない。グリュンバウムはレヒにも許容的であったが [3 : 134~135]、自分が宥和的な態度をとるのはテロ組織をつくらぬ為であると正当化している [3 : 161]。逆にカプランやシャピラは穏健な措置に傾きながらも、交渉や宥和の態度が逸脱組織を増長させる可能性をも指摘している（カプラン [3 : 177]、シャピラ [3 : 163]）。

86 Henry Near, *The Kibbutz Movement, A History, Vol.II*, London: The Littman Library of Jewish Civilization, 1997, pp.131-134. 世論も圧倒的に財産の接収を支持する方向に変化した事については *Ibid.*, p.133, p.137 を参照。

87 入植地に移民が投入された事については、*Ibid.*, p.152 などを参照。

88 *Ibid.*, p.136.

89 エルサレムにおけるアラブ財産の接収という措置の背景に物資不足の中で避難民に対処せねばならない緊急の事情があった事は、例えばユダヤ人当局がアラブの住居のみならずユダヤ人の住居をも接収している事からも窺われる。1948年7月7日のエルサレム緊急委員会の会合では住居不足を軽減する為にテルアヴィヴに転出して空き家になったユダヤ人の住居の接収を許可するという思い切った措置がとられた事をジョセフは回想する（Joseph, *op.cit.*, p.145.）。しかし同時に接収されたのではなく、アラブの住居が先で、それでも足りないためユダヤ人の住居の接収に及んだ事は確かである。

90 敵の財産についての監督者は放棄されたアラブ財産について責任を持ったが（ハイファにおける同様の状況については 1 : 170）、他方で放棄されたアラブ財産の位置づけについてはまだ混乱が見られ、その為もあって多くの掠奪が発生していた。これらの財産の位置づけが法的に定まるのは 1949年11月に通過した法によってであり、同法は 1947年11月29日より後に家を去ったいかなるアラブも財産を放棄したものと見なされて当該財産は国に帰属し、蔵相の下におかれた「敵の財産についての管理者」の部局によって管理されると規定していた（Near, *op.cit.*, pp.130-131.）。

91 Near, *op.cit.*, p.132. ニアが6月20日閣議のツイスリングの発言として個人アーカイヴスから引用している文言は実際の閣議事録にはないため、議事録から削除された可能性がある（ツイスリングの発言については他にも同様の例がある）。

92 *Ibid.*

93 但しマバム自体は一枚岩の組織ではなく、追放と破壊については支持も反対もあ

り、反対した人々も後に沈黙した (Near, *op.cit.*, pp.133-134, p.161.)。又マバムにはイデオロギーと実際の行動の間に矛盾があり、その矛盾は以前の諸論考で示した様にツイスリングの閣議での発言にもしばしば表れている。

- 94 但し軍首脳の内にはアラブ住民の退去を促進するイガル・アロンの様な強硬派も存在し、また強硬な手段に違和感を抱いていても現場では強硬な将校と変わらぬ行動をとる者もいた (Near, *op.cit.*, p.134.)。キブツ運動にも多様な潮流があり、同じ潮流の中でさえ意見の幅と矛盾が存在した。

- 95 ベングリオン自身は路線・政策上の対立として提示しているにもかかわらず、実際には権力の問題が核心部分で絡んでいたと見れば、ガリリ更迭の執拗な試みも、また対アラブ政策をめぐるシェルトクとの後の確執に於て彼がシェルトクを排除しようとした執念も理解しやすくなる面がある。なお民族問題をめぐる政策対立と権力闘争の関わりという視点は、ソ連政治にもヒントを得ている。

- 96 アラブと国連に対するイスラエルのユダヤ人世論の硬化については、やや後の例も参考として挙げておきたい。第二次停戦中も砲火がやまぬ中で現状報告として行われたシェルトクの記者会見 (1948年9月16日) の翌日、イスラエルのヘブライ語各紙は一斉に「停戦監視の不失機」「我慢の限界」「イスラエルは正に軍事行動を」と書き立て (Joseph, *op.cit.*, pp.263-264.)、同日ベルナドットが暗殺された。

- 97 以前の論考で扱った6月16日閣議におけるシェルトクの強硬な発言も、大量の流血を意識したものと考えればそれなりの論理性を持つ。「残された全ての土地や残された家々は・・・流された血の代わりに、もたらされた破壊の代わりに、・・・我々に届く補償である」[3:55]。(但し彼自身は領土的放棄を完全に拒否しているわけではなかった。)

- 98 但しエルサレムの地位は当時未確定であったため、イスラエルにとって法的な意味での「地方」ではなく、あくまでも意識と既成事実の面で領土の一部として認識されていた。更にジョゼフが回想録の中でエルサレムを一貫して“the capital”と表現している事からも分かる様に、エルサレム市民とその他の多くのユダヤ人はエルサレムを「一地方」どころか「首都」(であるべき)と認識していた。しかしこの様な感情にもかかわらず暫定政府の現実の所在地はテルアヴィヴであり、従って行政的にはテルアヴィヴが事実上「中央」としての機能を担っていたのである。

An Introduction to and a Preliminary Review of
the Proceedings of the Israeli Cabinet Meetings
at the Time of the Establishment of the State of
Israel (5), Part II: Domestic Politics and
Diplomacy on the Eve of Bernadotte's Peace
Suggestions and the Debates over the Altalena
Affair in *The Proceedings of the Provisional
Government Meetings Vols.3-4*
(20 June to 27 June 1948)

by Mariko MORI

Due to limited space, this study, *An Introduction to and a Preliminary Review of the Proceedings of the Israeli Cabinet Meetings at the Time of the Establishment of the State of Israel* (5), is divided into two parts, *Part I* and *Part II*. This paper is *Part II*, which includes the latter half of Section 2, Section 3, and Conclusion. (*Part I* appeared in the previous journal.)

This study as a whole gives an introduction to the latter half of Vol. 3 and the first part of Vol. 4 of *The Proceedings of the Provisional Government Meetings*, which cover from 20 June to 27 June 1948, and gives a review of its main contents, the Arab question. As a follow-up to my previous papers published in this journal in March 2014, March 2015, March 2016, March 2017, and March 2018, it is also intended to be a preliminary step toward revisiting the formative years of Israel, this time focusing on the turbulent one week prior to the presentation of

Bernadotte's Peace Suggestions to the Arab and Jewish sides. During that week, which immediately followed the controversial cabinet meeting on 16 June 1948 when the Israeli Provisional Government seemed to incline toward a negative direction concerning the repatriation of Arab refugees, Count Folke Bernadotte, the UN Mediator, with his staffs at their headquarters at Rhodes, was intensively drafting the Peace Suggestions based on his negotiations during the preceding one month with both sides. In the same week there also occurred the Altalena affair, an incident in which an immigrant ship called Altalena, organized by Irgun (a rightist military organization led by Menachem Begin) and bearing 900 Jewish immigrants and large quantities of weapons, arrived near Tel Aviv, despite the fact that the Truce Agreement strictly limited immigration and forbade the import of weapons during the truce. The Israeli government decided to take strong measures against this sectarian action by Irgun, which apparently ignored the authority of the newly born government as well as defied the United Nations by deliberately violating the Truce Agreement, which the Israeli government had accepted and promised to observe. During the stormy debates over the Altalena affair, which appear in the three cabinet meetings covered by this study, the Minister of Religious Affairs, Rabbi Fishman, resigned as a sign of protest against the government's policy of using force, if necessary, against "fellow" Jews. On the domestic front, the already strained relationship between Ben-Gurion and the IDF generals was seriously exacerbated over the army reorganization, and this tension was to develop into a cabinet crisis in early July ("Generals' Revolt").

Against this backdrop, and with the three assumptions presented in *Part I* in mind, this paper (*Part II*) concludes as follows:

First, this paper finds that Bernadotte's too-close relationship with British and Arab officials may have affected his understanding of Shertok's emphasis in

their discussions on 17 June. Shertok, according to his report in the cabinet meeting on 20 June, made it clear to Bernadotte what the Israeli government could not compromise: the government would reject any peace proposal that denied the sovereignty of the State of Israel, and it would never relinquish the territory assigned to the Jewish state by the United Nations General Assembly Resolution on 29 November 1947. Only on this basis, Shertok reported, did he offer a compromise concerning refugees and minor border issues. But ultimately Shertok's non-negotiable conditions were entirely ignored in Bernadotte's Peace Suggestions, which instead took into account primarily British and Transjordanian interests. Bernadotte's evident pro-British and pro-Arab history, subsequently betrayed in his posthumously published memoirs, might well explain his neglect of Shertok's account on 17 June.

Second, this paper finds the Israeli government's strong distrust of Britain revealed in the cabinet protocols, which seems to intensify in the latter half of May and June 1948, as the main underlying emotional factor for the rejection of Bernadotte's Suggestions by the government. Bernadotte's Suggestions were never considered to be "neutral" by the Israelis, given their striking affinity to the ideas advocated by Britain, whose hostile actions infuriated even moderate Israelis; British officers in the Arab Legion had continued to shell Jews in Jerusalem until the beginning of the truce as was vividly described by Gruenbaum in the cabinet meeting on 20 June, and British battleships often captured Jewish immigrant ships off the coast of Palestine. Another emotional factor behind the rejection of Bernadotte's Suggestions, which can be extracted from the cabinet protocols, was the fresh memories of heavy Jewish bloodshed and numerous victims in the battles around Jerusalem. Because of these memories, it became extremely difficult for the government to accept suggestions demanding Israeli

compromise, which would make the recent Jewish losses appear meaningless.

Third, this paper finds that during the cabinet debates over the Altalena affair rightist militant philosophy itself appeared to be justified, and that this tendency of tacit tolerance and acquiescence within Zionist political circles toward rightist militant philosophy, which culminated in the cabinet decision on amnesty, may have derived from the Talmudic treatment of “Jewish robbers” as was implied by Ben-Gurion, who mentioned the term during the debate. This cabinet tendency of putting a higher priority on promoting Jewish internal logic than on respecting the logic of international society not only gave fundamental justification, or signaled leniency, to the extremists conducting terrorist activities, but also was visible in the course of the debates over Bernadotte’s Suggestions one week later, apparently becoming a contributing factor to the cabinet’s rejection of Bernadotte’s Suggestions.

Bearing these three conclusions in mind, the following general conclusion can be drawn concerning the background factors of the rejection by the Israeli government of Bernadotte’s Suggestions in early July. According to the examination of the cabinet protocols, its rejection was not based on an abstract Zionist cause but on more concrete reasons; increasing distrust of the British, fresh memories of Jewish bloodshed, and awareness of public hostility toward the Arabs which dramatically increased in June through the Latrun fightings. At the same time, the debates over Bernadotte’s Suggestions brought to the surface a serious internal schism within the cabinet between activists led by Ben-Gurion and moderates led by Shertok. This schism also reflected a widening policy gap between the Defense Ministry and the Foreign Ministry, which the two leaders supervised respectively, and an escalating clash of interests between Jerusalem, which suffered from the siege and desired its patriotic sacrifices to be recognized

by the entire nation, and Tel Aviv, which was the virtual capital of the new-born state and open to more international, soberer logic and longer-term national interests.